Be With～Ⅱ

目次

Misato in New York! 1
パスワード 5
捕獲 11
ネコ 16
手 20
実感がない 25
まさかの？ 29
ショーシン 33
タッパー 37
塩むすび 42
表参道 46
縫う 52
産婦人科 56
感動ポイント 62
位置は 67
ハンバーガー 71
初めての夜 76
覚悟が・・・ 80
住民票 84
名字 88
保証人 91
入籍はいつ？ 95
入籍・撮影 99
誕生日のプレゼント 105
呼び名 111
ビースラ 118
貯金 124
リサイクル 129
初めての服 134
クリスマスイブ 139
正月休み 144
出産 148

三年後の春 152
泣く 156
命名 160
入園式 163
あのとき 168
最強の男 172

Misato in New York!

New York！一ヵ月！　New York! メッチャ濃かった一ヵ月！
もちろん仕事・仕事・仕事の毎日。
ホテルで頭抱えてた夜もあったわよ。
でもね、なんていうのかな？　やりやすい　それかな？
会議で、殺し合うんじゃね？ くらいの激しい討論しても、会議が終われば、
さっきまでの殺し合いの相手が「Misato、コーヒー飲む？」みたいな？
仕事は仕事ってだけっていう割り切り？
合ってる、私にメチャ合ってる。

MAGA の男性社員て、ほぼイケメン！
イケメンていうか、内なる自信？　それがあるからかっこいいの、カッコつけないのに。
そのイケメンたちが、金曜日には何人も私をデートに誘うの。
私ってこんなにモテるの？ ってビックリするくらい。
でもね、一緒に飲みに行って、話してるうちに、メチャ話の合う友だちになっちゃうの。
べつに恋の相手を探しにきたわけじゃないからいいんだけどね。
その友だちが、友だちっていうか、提携先の社員だけどね、
「あそこの店が美味しいよ」「New York にきたら、あの店で食べなきゃ」とかね。
毎日数人でごはん食べに行ったから、私、どこで食べようって探さなくて済んじゃった。
地元の人たちだから、ガイドブックになんか載ってないお店で美味しかったし。
もちろん彼らがおごってくれたしね。

あとね、女性陣もサバッサバしてるから気が合うのよ。
「服を買いたいんだけど、いいお店おしえて」って言ったら、
「だったら、土曜日にみんなでショッピングにいきましょうよ」ってね。
あちこち連れていってくれた。
ハイブランドではないの、ではないんだけど、質もいいしステキなのよ。
それを自分流に着こなすのよねえ、初日にプラダ着てた自分が恥ずかしくなったもの。
3 人くらいで行くのよ、その 3 人が勧めるのが、白か黒か赤。
試着するでしょ？　見せるわね？
“That is Misato!”　これぞミサトだ！ ってどういうこと？
私だってブルーグレーのちょっとフェミニンなワンピとかね、

ピンクだけど甘くなくてかっこいいのとかね、着たいの。
試着するでしょ？　見せるわね？
3 人が同時に “Naaaa” ってしかめ面して首振るのよ。
私ってどういうイメージで見られてるの？　白か黒か赤・・・のみ？
まあいいけど、素敵な服いろいろ買えたから。
こっそりブルーグレーのワンピも買ったけどね。

仕事するのはもともと好きだったけど、仕事が快感って思ったのは初めてよ。
提携するとはいえ、お互い自分の会社に有利になるように進めたいでしょ。
そこのところで議論になるわよ、もちろん。
でもね、それと同時に、一緒にこのプロジェクトをベストなものにするぞ！ っていう、
なんていうの？　仲間意識？　それを感じるの、それがたまらないのよ！

藤木部長とはね、もしも二人で、そうねえ、テニスのペアで試合に出たら、
世界チャンピオンになるんじゃない？ くらい息ピッタリだったの。
テニスは大学のときにカリッとかじったくらいだからよくわかんないけど。
たとえば、私が打てそうだったのに届かない球を、藤木部長がちゃんとかまえてて、
スパーンと決めてくれちゃうとかね。
藤木部長が見事なサーブして、相手がやっとのことでこっちに返したのを、
私がネット際でスポンと向こうに入れちゃうみたいな？
こうきたらこうしようなんて打合せしても、その場で突発的に起こることがあるでしょ？
そういうとき！
最強コンビ！ って私が思ってるだけだけどね。

そんな 1 ヵ月が過ぎて、明日は日本に帰る。
今はホテルの最上階のバーラウンジで藤木部長と飲んでるの。
祝杯！
藤木部長は I.W. ハーパーのロックを 3 杯目。
お酒は強いけど、私の前でこんなに飲むのは初めて、よっぽど満足したのね。
「北川くん」
「はい」
「やったな」
「やりましたね！」
二人でニッコリ。
「これでもう社長も吉田くんをゴリ押しできなくなったな」
「社長が？」
吉田を？
「吉田くんは社長の従弟の息子だ」
「エッ？」
コネ入社っていうのは知ってたけど、そんな強力なコネだったとは！

「酒の席の戯言だと聞き流してほしいんだが」
「はい？」
「社長は君を潰そうとしていた」
「エッ？」
な、なんで私を？
「君が優秀なのは取締役たちの間でも話題になるくらいで」
マジで？
「それが、社長は気に食わなかった、まして女のくせにってね」
藤木部長がフッと笑ったけど、私は恐ろしいことを聞いてしまった気持ちよぉ
「今回のプロジェクトの企画も潰されるところだったんだ」
「え？」
「吉田くんが出した企画は、社長が集めた精鋭たちが作ったものだよ」
マジッ？
「社長はなんとしても、吉田くんの企画を通して彼を主任にしたかった。
　でもね、君の企画はそんな陰謀すら一蹴するほど素晴らしかった。
　だから社長はなんとしても君を潰そうとした」
え・・・
「そこで、専務が社長に持ちかけた案が、企画は会社のために北川のものを採用して、
　主任を吉田にやらせる」
あ・・・
「社長としても、会社の利益になるものは手に入れたい、自分の親族も役職につける」
なんか・・・
「だから、専務の案を飲んだ」
藤木さんが言っていた言葉が・・・　あのとき言っていた・・・

「俺たちの世界は足の引っ張り合いなんだよ」
「今は慎重に行動したいんだ」
「うちの取締役の中には医師会と強い繋がりを持っている人たちがいる」
「特に社長はね、そして、かなり保守的だ」
「俺はこういうことで潰されたヤツを何人も見てるんだよ」

そういう・・・こと・・・だったの

「俺は・・・　男として最低最悪なことをした」
え？
「君に、女性としていちばん辛いことをさせてしまった」
中絶・・・
「俺だって平気でいられるほど冷血じゃないよ」
はじめてみる・・・彼の・・・かすかに寂しそうな微笑み・・・
「俺は残酷なやり方で恋人を捨てて、稀な才能を持った部下、いや、仕事仲間を取った」

あなたは・・・
あなたのやり方で・・・
私を守ってくれていた・・・
「俺は後悔していないよ、どんなに恨まれてもいい、その覚悟でやったからね」
「藤木部長」
「なんだ？」
「正解です！」
「そうか」
藤木さんが苦笑してる
「俺は、結婚したら妻には家庭に入ってもらいたい」
そうね、藤木さんにはそれが似合っている
「君は・・・　家に入ったら１日で逃げ出すだろ」
「10 分で逃げ出します」
爆笑！　ふたりでね

この人と恋をしてよかった
この人の部下で最高によかった！

パスワード

New York から帰国
かっこいい響き
でも、現実は甘くないのよっ

本契約を成立させた・・・で終わりじゃないの。
成立させたがゆえに進めなきゃいけないことがあって部内はバッタバタ！
私も時差ボケが辛いのに時差ボケなんて言ってる場合じゃない！

大山におみやげ買ってきたわよ。
ティファニーのキーリングとニューヨークのデザイナーのポーチバッグ。
日本ではまだ扱っていないブランド、あっちの “友だち” が勧めてくれたの。
「わあ！　素敵ぃぃ！」
「これならタンポン売るほど入るわね」
「やだぁ、タンポンなんか入れませんよぉ」
バタバタの中、大山の顔見るとホッとするのよねえ。
「でも、また必要なときはいつでもどうぞ」
頼りになるから。

そしてね、こんなバタバタの中、社長が退任することになったの。
新社長は専務。
あ、ちなみに、吉田は資料室長に栄転、栄転という名の左遷！　ハッハッハッ
とにかく、それもあって社内がバタバタ・・・で、帰国から 2 週間過ぎた。
まだまだやること山積みだけどねぇぇぇぇ。

どうしようどうしようどうしよう
このクッソ忙しいときにっ
完全 DELETE していたと思っていたメモリ、
とんでもないところに過去のメモリが見つかって、
DELETE するためにはパスワードが要る。
そのパスワードが見つからない！

午後から出社するって言っておいたから早く行かなきゃ！
ニューヨークで買ったパンプス、素敵で履きやすいんだけど、
急いでるときは、どこのパンプスだろうと走りづらい！

アッ！

地面・・・じゃない・・・え？　抱きかかえ・・・られて・・・いる？
メッチャ臭い！
私の身体を抱いている腕が・・・　メッチャ汚い袖・・・　ホーム・・・レス？

なにこの、私の、ホームレス遭遇率の高さぁぁぁぁ！？

「あ、あの、もう、大丈夫・・・なの・・・で・・・」
え
え？
あれ？
あっ！

あああああっ！

見つけた！
パスワード！

「あんた」
ポカンとしてるけど
「ちょっと来て！」

地下道の人通りがまあまあ少ない路地
目の前にいるのは、たった１か月半でどうやったらこんなに汚くなるの？ な服の、
おそらく１か月半お風呂に入ってないよね？ な無精ひげ生えてる汚いったない顔のあいつ。
おそらくあの汚ったない前髪の隙間から私のこと上目遣いで見てる・・・けど、
そんなことはどうでもいい！
「あんた、まだあの三文判持ってる？」
ハ？ みたいな顔してる
「まだ、あんたの名前のハンコは持ってるの？」
う、うん・・・か、持ってるのね
「それじゃ、あんたにやってもらわなきゃならないことがあるの」
わけわかんないみたいだけど、そんなことかまってらんないのよっ

バッグから用紙を出して、あいつに突きつけた。
「これに名前書いて判押して」
オドオドしながら二つ折りにしていた用紙を開いて・・・
「見たことあるでしょ？」
あ、それじゃ上下逆さま！　まあいいっ
「妊娠したの、でも堕すの、だから、そこにあんたの名前書いてハンコ押して」
え？ って顔してるみたいだけど、急いでるのよ！
「早く、書いて」
「あ、あの・・・」
「なに？」
「なんで・・・また・・・　俺？」
「なんでってっ　相手の名前と判が必要なの、だからあんたなの！」
あん？ みたいな顔してるけどっ
「だからっ　その相手っていうのはあんたなの！」
あ、全然わかってない・・・
「だからっ　この、お腹の、なんていうか、これは、あんたの子なの！」
「えっ」
はぁ、やっとわかったか
「お、俺の・・・」
あれ？　わかってない？
「俺の・・・子？」
そう言ってるじゃない！
「そうよ」
「俺の　子？」
「そうよ」
「俺の子？」
ビックリしてフリーズね、いいから早くっ
「安心して、すぐに堕すから、あんたは名前書いて判押すだけでいいから」
「俺の子？　俺の？」
まだそこ？
「いいから、あんたは名前を・・・」
あれ？　なにそのカンジ？
ほら、TikTok で出てくる、妻から妊娠したことを告げられて、
ビックリから感動に変わる的な？
いやいやいや、そういう状況じゃないよね？　どう考えたって違うよね？
「俺の子・・・」
まだ感動に浸ってるの？　なんで感動に浸れるの？　そういう状況じゃないでしょ！
ちょ、抱きつかないでよね？　イヤよ？　これ、ニューヨークで買ったワンピなんだから、
その汚ったない・・・　ちがうちがう、そういうことじゃない！

「だからっ　それに名前書いて判押して！」
「え？」
え？ じゃないでしょ
「堕すの、私も忙しいの、早く名前書いて判押して」
「え？」
そんな絶望的な声で、え？ って言われても、こっちだって困るのよ
あ、今度は何か考えてる、いやいや、あんたが考えなきゃいけないこと何もないから！
「何も考えなくていいから、あんたはこれに」
「あの・・・」
「なに？」
「俺の・・・子・・・だから？」
ハ？
「俺の子だから・・・　生みたく・・・ねえの？」
どういう意味？
「あのね、誰の子だろうと生まない、それどころじゃないの、忙しいの」
「生ま・・ない？」
「そうよ、そう言ってるでしょ、だから名前書いてって言ってるの」
あ、また何か考えだした・・・　いいから！　考えないで名前書いてよ！
「わか・・・った」
ハァァァァ、やっと！

あいつが地べたに座って、申請書を・・・
「あ、それ逆よ、こうよ、そして、ここに書いて」
ボールペン渡したら、下向いたまま受け取って・・・
え？　フリーズ？　フリーズしてる時間ないのよっ
午後から出社って言ってあるから、もう行かなきゃだし、お昼も食べてないし
「これ・・・」
え？　なに？
「これ書いたら・・・」
書いてよ
「俺が・・・　ねーちゃんの子・・・　殺しちまうん・・・だよね」
言い方っ！　そのワード！
「俺が・・・　ねーちゃんと・・・俺の子・・・　殺す・・・」
だからっ　そのワードやめて！
「俺が・・・」
え？　泣いてる？　やだ、泣いてる、メチャ泣いてる！
こついがこんなに泣くの初めて見た・・・　いやいや、それはどうでもいい
「あのね、あんたには何も関係ないから、私の責任だから」
だから書いてっ
「俺・・・」

やだ、どうしよぉぉぉ、私が泣いてるのをこいつが慰めるパターンはあるけど、
こいつが泣いてるのを私が慰めるって、どうすればいいのっ？
だいたい私、泣いてる人を慰めたことないのよ！
こいつが泣いてるのすら止められない私が赤ん坊なんてムリでしょ！　Impossible!
あ・・・
きた・・・
お昼食べてないから・・・

反対側の側溝のところにうずくまって・・・
何も食べてないと吐き気が襲ってくる・・・
何も食べてないから何も出ないけど・・・
吐き気が止まらない・・・
それで胃腸科行ったら異常ないって、「一応産婦人科行ってください」って、
なんのこと？ で、行ったら・・・
これよ・・・

「ね、ねーちゃん」
背中さすってるけどっ？
あんたがグズグズしてるから・・・
「み、水持ってくっか？」
睨みつけてやった
「炭酸ミネラルウォーターあるのっ？」
「え、ね、ねえけど」
「炭酸ミネラルウォーターどこにあるっ？」
炭酸ミネラルウォーターじゃなきゃダメなのよっ
「え、あ、えっと・・・」
どこかにあるなら買ってきてっ
「ね、ねーちゃんの・・・　部屋？」

そういうことか

ハァーーーーー・・・　もうーーーーーっ

気力で立ち上がったっ

「ちょっと、あんた！」
キョトンとしているヒマはないっ
「行くわよ！」
「え？　ど、どこ？」
「いいからついて来いっ！」

捕獲

駅の構内・電車の中・タクシー、デジャブのようなことが繰り広げられたけど、
私はそれどころではないっ　吐き気と闘い続けていたっ

そして　今　私の部屋のドアの前

鍵を開けて
キッチンに走ってゴミ袋取ってきて
あいつの前に無言で突き出すと　コクン
そうよ　脱ぐのよっ
バスルームのドアをバンバンバンッ
あいつがおずおずと三本の指立てて
そうよ　三回洗うのよっ

キッチンに行って冷蔵庫開けて、炭酸ミネラルウォーター出して
そこに薄く切ったレモン指で突っ込んで・・・
ハーーーー　スッキリするうぅぅぅ！
ニューヨーク最後の夜、藤木さんと祝杯・・・のはずが、
お酒が入らない、なぜか身体が拒否る、で、炭酸ミネラルウォーター注文。
その中に素敵にフルーツカービングされたレモンがピックに刺されて乗っていた。
それを飲んだらメッチャスッキリ！
あれは・・・　これだったかぁぁぁ

あ、そうだ、あいつの着替え
キッチンの脇に置いたままのあいつの着替え一式、
袋ごとバスルームのドアの前にドサッ
未練がましく残してたわけじゃないのよ
ニューヨークに発つ一週間前も地獄みたいに忙しかったの！
こんなの頭からスッポリ抜けてたわよ！

あ　会社に電話しなきゃ

「北川です」

「北川さん、大山ですぅ、大丈夫ですかぁ？」
「午後も・・・　ごめん、休むから部長に伝えて」
「北川さん、ゆっくり休んでくださいね」
「そうする」
ゆっくりとかそういう問題じゃないことが発生したんだけど・・・
「北川さんは重要なことをやってくださったんですからぁ、
　あとは私たちがしっかりやらなきゃダメなんですぅ」
え？
「頼りになりませんけどぉ、私もできるだけのことしますからぁ、
　休むときはちゃんと休んでくださいねぇ」
大山・・・　私を泣かせるな！

なぜ大山は事務職なんだ？　あの子は総合職で中枢に入るべきじゃない？
いやいや、今はそんなこと考えている場合ではない。

あ・・・　リビングに入ってきた

え　　カズオ

やだ・・・　なんでカズオなの・・・　カズオなんだけど

あ、今チラッと、床に広げっぱなしのスーツケース見た・・・
しょうがないじゃない！
帰ってきて、忙しくて片付けるヒマなかったんだもん！
ニューヨークで買ってきたワンピとかはシワになるのイヤだから、
クローゼットにかけたし、靴も箱のままシューズクローゼットに入れたわよ。
他の靴をギュッと寄せて入れたんだけど。
仕事関係のファイルは出してローテーブルの上。
あとは・・・　何入ってる？　洗濯物とか？　洗濯物とか？　洗濯物？
そんなのやってるヒマなんてなかったの！

「あのぉ」
「なによ？」
「まだ・・・　キモチ悪りぃ？」
炭酸ミネラルウォーターの瓶を持ち上げて見せた
「それ飲むと大丈夫になんの？」
そうだけど　あんたに関係ないっ
「あのぉ」
「な・に・よっ？」
「なんで、俺・・・　ここにいんの？」

なぜここにいるっ？　なぜここにいるっ？
ハァァァアアッ？
「First of all! 」
あ・・・　英語出ちゃった
戦闘モードになると出ちゃう、まだ抜けてないな
「まず、私は吐き気がした、吐き気がすると炭酸ミネラルウォーター飲みたい」
うん・・ね
「あそこには炭酸ミネラルウォーターはなかった」
うん・・・　そうよ
「あんたに炭酸ミネラルウォーターはどこにあるって聞いたらっ
　私の部屋にあると言ったっ　確かにあるっ　だからここに戻ってきたのっ」
あれ？　これは私の事情か？
なぜこいつをここに連れてきたか
そうよ！
「あんたをあそこに置いたままにしたら、またどこに逃げるかわからないっ」
これは・・・
「捕獲！」
あ、捕獲という言葉がわからない？
えっと・・・
「あのぉ、俺は・・・　捕まえられたっつう・・・」
捕獲わかったの？
あ！　わかるか！　こいつ捕獲されて少年院！
「あのぉ・・・　なんで？」
なんで？　なんで？　なんでっ？
「あんたがさっさと名前書かないからでしょ！」
あ・・・という顔をして下を向く・・・と
泣けばなんとかなると思うなよ！　泣いてないけどっ
あ、またなんか考え出した、何を考えることがあるのよ？　ないでしょ！
「Listen!」
あのね
「I’m not asking you a complicated matter! I’m just・・・」
あれ？
メッチャ戦闘モードだ！
英語しか出ない　ていうか　英語の方がこういうときって・・・
「すげえ！」
ハ？
「わっかんねえけど、ねーちゃん、メッチャかっけー！」
純粋に感心してる場合じゃないでしょ！
Emergency!　緊急事態！　緊急なのよ！
ハァァァア

こいつにはわかんないかなあっ
私の今の状況！
実質主任！　まあ吉田がいたときもそうっちゃそうだったけど？
本当にっマジでっ忙しいの！
吐き気がするくらいにねっ　妊娠してなくても吐いたと思うくらいにねっ
あ・・・
脳貧血・・・
「ねーちゃん！」
来るな！
目をつぶりながら手で止めた
あんたが傍にきたら・・・
「あのね、私」
これは・・・
「寝る」
それしかない
「うん」
立ち上がってベッドルー
ガツッ
「イテッ」
スーツケースに小指ぶつけちゃったぁぁぁ
痛いぃぃぃ
「ねーちゃん！」
来るな！
「大丈夫よ」
何回もやってるから
とにかく・・・
ベッドルームのドア開けて
あ！
「あんた！」
私のこの目を見ろ！
「逃げるなよ！」
「う、うん」
「逃げたら指名手配するからねっ！」
「ハハハ」
笑ってる場合じゃないっ！
「本気よっ！」

バタンッ

私も　バタン

ネコ

あ　　久しぶりに熟睡した
ニューヨーク行く前もバッタバタで、
ニューヨークでは日中脳みそフル回転で夜も回転しっぱなしで眠り浅かったし。
帰ってきてからも、気がついたらソファで寝てた方が多かったしなあ。
今　何時？
3時？　　2時間くらい寝てた？
いるよね？　　あいつ、逃亡してないよね？
わからん　あいつには前科がある
ドアを開けたらいなかった・・・は、ありうる？　　それはダメ！　　困る！

ドアを開けた・・・ら
リビングの床が見える
床っていうか、ラグ？
ローテーブルの上に崩れる寸前みたいに積んでいたファイルが横に積まれていて
テーブルの天板が見える
あ　スーツケースが立っている

あいつか

こういうことじゃないのよ
こういうことじゃないのっ　今あいつにやって欲しいことは　これではないっ
名前を書いて判を押すこと
それだけ！

ベッドルームから出ると　あれ？　　あいつは？　　逃げた？
ン？
廊下の隅の・・・　ネコのベッドとか置いてある前に・・・
あれ？　　そういえば・・・　ネコは？
ネコと一緒にいなかったよね？
え？　　ま、まさか・・・
それで、あいつ、あのワード？
ショックで、あのワードに過敏になってる？

だから泣いた？
そうかも・・・　そうだ！
「あ！　ねーちゃん！」
ヒョコタン走ってきたけど
「起きて大丈夫なんか？」
あんたは・・・　大丈夫なの？
「水持ってくっから座ってなよ」

グラスに入っている水とスライスしたレモン
そうよ、レモンは必須
私はめんどくさいから瓶に指で突っ込んでブシュって毎回こぼしてるけど
それはいい　どうでもいい
さっさと本題に入らないと

「ネコは？」

あ　あああああああっ　何言ってるのぉおおおっ？
絶対こいつに言っちゃいけないワード！

「里親見っかったよ」
「へ？」
生きてた？
里親？　どういうこと？
「どうやって？」
「ねーちゃんとこ出てからぁ、歩いてて、やることねえからさぁ、あちこち歩いてて」
あんたの行動経緯はいいから、先進めて！
「そしたらよ、里親なんとかって書いてたとこがあってよ」
え？
「俺、親って字は書けねえけどボヤッと読めんだけど、里は知ってっからさ」
里は知っている？
里親の里・・・　あ！　美里の里！
そういえばこいつ、私の名前を写経みたいに書いてたことある！
あのときは、こんなのこいつの人生に何の役にも立たないって思ったけど・・・
人生って、いつ、どこで、何が役に立つか本当にわからないわね、ビックリ！
「そんで、中入ってって、俺もこいつも家がねえっつったら、かわいそうつって」
そうね、里親団体なんてやってる人たちは慈悲深いわよね
「みーちゃん預かってくれるっつって」
そう、よかった
「俺、そんでも心配でよ、毎日こっそり覗いててよ」
預かってもらったらそれでもういいじゃない？

「そしたら、どんくれえだったかなあ、ちょいちょいって中入っていいよっつって」
本当に慈悲深い人たちなのねえ
「そしたらよ、決まったよって！」
マジか
「みーちゃんは、なんとかっつう種類で雑種じゃねえし」
そうだったの？
「仔猫だし、便所でウンコもションベンもできるし、えっと健康だから」
え・・・
「すぐ見っかったって」
それって・・・
「メッチャ猫が好きな人みてえだから安心していいよっつって」
そうか　よかった
「帰ろうとしたら、俺にせんべいくれた、へへへ」
こいつは・・・
「だから、ねーちゃん、もう心配しねえで大丈夫だよ」

こいつは・・・
私がウダウダしてなかなか探せなかったのに
自分で　歩いて　いとも簡単に見つけた
ずっと世話していたのも　ケガの包帯替えたり薬飲ませたり
トイレのしつけも　こいつがやっていた
だから、あの猫は　すぐに飼い主が見つかった
見つかりやすくしていたのは　こいつ

なんだ・・・
私が一人で背負っちゃってる気になって
いろいろなこと考えて　頭グルッグルにして
そんなの・・・
何もしてなかったと同じじゃない
何もしてなかったのよ

なにやってたの　私

バカみたい・・・バカみたい・・・

「ねーちゃん？」
来ないで
「あの、淋しいかもしんねえけどさ」
淋しくて泣いてるんじゃないの
来ないで

「みーちゃん、しあわせに暮らしてっからさ」
それはよかったけど・・・　そこじゃなくて・・・

こいつといると・・・
私は・・・
自分が役立たずにしか思えなくなる

心配そうな顔で私のこと見てるけど
「よかったわね」
「うん」
そんな顔して見てるけど
私が泣いたのは　あんたが思ってるようなことじゃなくて
あんたが考えもつかないような
利己的なことなのよ

手

「ねーちゃん、腹へってねえ？」
え？
「俺、にぎりめし作ったから」
デジャブ感が・・・
「にぎりめしなら食えっかなあって」
たしかに・・・　何かお腹に入れないと、このままだと吐き気が襲ってくる

あいつがキッチンから持ってきたおにぎり・・・
私にジャストサイズな大きさ
イヤになる　知り過ぎてて
いや、今は・・・　食べないと
「それじゃ・・・」
あ　塩加減が絶妙すぎる
ごはんのほんのりとした甘さを引き出すんだけど主張しすぎないようにする加減
ハァァァァ　身体がホッとしている
え？　なに？　その顔？　私の美味しいを待ってる？
言わないわよ
「私ね、お腹が空っぽになると吐き気がするの吐くの」
だから食べてるだけよ
「でもね、一度にたくさん食べられないの、食べ過ぎると、吐くの」
「やっぱ大変なんだなあ」
え？
「お母さんてよぉ」
お、お母さん？　あ、いや、そういう “妊婦” 的な目で見ないで！
ちがうから！　お母さんにならないから！
だから、あんたがここにいるんでしょっ！
名前書かせるためにねっ！
「ほんじゃこれ、ラップかけとくからよ、あとで食えそうなときに、あの・・・」
いやいやいや、つわり中の妊婦ケアみたいな・・・
「あ、あんたが食べて」
「え？」
「えっと、あの、つ、次に何を食べたくなるかわからないから」

そんなことかまってもいられなかったからテキト～に食べてたけどねっ
それで吐いたけど　だから胃腸科へ・・・
「へえ、そういうもんなんかあ」
だからっ　その “妊婦” 見るような目で見ないで！
「食べて！」
「うん」
こ・・・　これは・・・
こいつは、どんだけ食べてなかったのっ？
おとといから？　　それ以上よね、この、野良犬がガツガツ食べる的な？
関係ないけど
あ、待てよ
前は、こいつがおにぎり食べてから出ていった・・・
まあ、私が呼び止めちゃったんだけど
今日は、そうはさせない！
食べ終わったら、絶対に書いてもらうからね！

あ　ごはん粒が口の脇に・・・

いいっどうでもいいっ
なんか気になる
そんなこといいっ
気になると気になっちゃう
「あんた・・・」
「ン？」
「ここに・・・　ごはん粒ついてる」
自分がイヤになる
「あ、へへ」
ついてたごはん粒をパクッと食べる・・・と　はいはい
「ねーちゃんてお母さんみてえだな、あっ・・・」
それ以上言うなっ！
お母さんではないっ！
お母さんではないの　私は

なんか・・・　こいつといると・・・　なんか・・・　なんだ・・・もう・・・

来ないで！
泣かないから、号泣しないから、そういうヒマはないのよ

「あのね、ちゃんと私の話を聞いてくれる？」
「うん」

「私、ニューヨークに行って、うちの会社にとってものすごく大きな提携事業を」
あれ？　提携事業わかるかな？
「とにかく、大きなことをまとめてきたの」
「スゲー！」
いや、自慢話してるんじゃないのよ
「すごく忙しかったし、これからもっともっと忙しくなるの」
「うん」
「私は働きたいし働かなきゃいけないし、だから、生めないの」
あいつが私を見てるけど　何を思っているのかわからない
「もし生んだりしたら働けなくなる」
うちの会社は産休制度はしっかりしてるけど　そういうことじゃなくて
「それに、私は育てられない、母子家庭とか無理だし」
それ以前に・・・
「わかるでしょ？　私は仕事ってなったらそれだけになっちゃうから」
あんた、ずっと見てたんだから・・・
「子どもの世話なんて忘れちゃう、わかるでしょ、私は母親にはなれないのよ」
あいつが・・・　何か考えてるみたいだけど・・・
考えたって無駄なのよ
「だよなあ」
わかった？　わかってくれた？
「だよなあ、俺じゃよぉ」
え？　あんた？　関係ないけど？
「俺がよぉ、もうちっとマシなヤツならよぉ」
あんたは関係ないのよ、私の問題なのよ
「ねーちゃんに生んでもらって、俺がその子もらって、育てられんだけどよぉ」
ハ？　もらって育てる？
「仕事もねえしよぉ、住むとこもねえんじゃなあ」
どっちにしても無理でしょ？　無理なのよ　もらって育てるって発想がわからないけど

「ねーちゃん」
「なに？」
「ごめんなあ」
なんで謝るの？
「俺が・・・　どっしようもねえクズだからよぉ」
え？
「ねーちゃんに・・・　辛れえこと・・・　させちまうんだよなあ」
あ　下向いた
「ごめんなあ」
だからあっ
だから・・・あんたが悪いんじゃなくて・・・あんたじゃなくて・・・

「ねーちゃん」
あいつが顔あげた
「俺、書くよ、名前、ちゃんと書く」
そう・・・
「ありがとう」
「書くから・・・　あの、いっこだけ、俺の頼み聞いてくんねえかなあ」
「なに？」
「あの・・・　一回だけ、一回だけ・・・」
上目遣いで私の目を見て・・・
「触わらして・・・くんねえかなあ」
触る？　あ
「私のお腹？」
「うん」
「いいけど、まだ全然膨らんでないし、動いてないし、多分、豆粒・・・くらい？」
「うん」
それくらいなら
「いいわよ」

あいつが私のとなりに座って、ゆっくりと手を・・・
「そこは胃、ここよ」
あいつの手をつかんでグイッと子宮あたりに
「ここかぁ」
「そうよ」
あいつの手が・・・温かくて・・・　温まって　なんか身体が楽になる
あいつの手が・・・撫でるように・・・　頭を撫でているように・・・

この手は・・・　温かくて　イヤになるほど　温かくて・・・
この手は・・・　優しくて　頭にくるほど　優しくて・・・
いつも　いつも・・・　泣きたくなるほど・・・
この手で触られたら・・・　やめてよ・・・　こんなふうに触られたら・・・

あいつの手をつかんで
私のお腹から離して
あいつの手をつかんだまま
「あんたね！」
あいつが驚いた顔で見てるけど
「こんな・・・　こんな手で触ったら」
涙が・・・
「赤ちゃんが忘れられなくなっちゃうでしょ！」
止まらなくなって・・・

「お父さんのこと、忘れられなくなっちゃうでしょ！」
あいつの手が私の手をつかんで・・・
私のこと抱きしめて・・・
「こんなに温ったかい手で触られたら・・・こんなに優しく触られたら・・・」
あいつの胸の中で・・・
「忘れられなく・・・なっちゃう・・・」
あいつの腕の中
「赤ちゃん・・・　殺せなくなっちゃう」
あいつの身体も震えてて
「殺せなくなっちゃうよ・・・」
あいつが私の頭を撫でて・・・
「あんたのせいだからね」
「うん」
あいつも鼻声で・・・
「あんたのせいだからね」
「うん」
「あんたの・・・」
あいつが・・・　ギュッて抱きしめるから・・・
「赤ちゃん・・・」
ああもう・・・
「生む」
私の頭を撫でていたあいつの手が止まった
「生むから」
顔を上げたら　あいつが　驚いた目で私を・・・
「だから・・・」
だから
「そばにいて」
あいつが涙ボロボロこぼしながら　嬉しそうな顔で・・・
「うん」
私のこと抱きしめた

実感がない

私は・・・

バカなの？ バカだよね？ バカですか？ バカよバカです

生む　　って言っちゃった
生む　生む？　　生む
え、ちょっと待って、生む　生む？
生みたくない
生みたくない？
生みたく・・・ない・・・わけでも・・・ない
あいつの子だと思うと・・・なんか・・・なんていうか・・・
生みたい気が・・・気っていうか・・・生みたい・・・な・・・って
なぜ？

あ　ベッドルームのドアが静かぁぁに開いて・・・
「あ、ねーちゃん、起きてたんか？」
ちょっと休むって部屋に入ったから
「大丈夫かぁ？」
身体はね
頭は大丈夫じゃないかも
「あのさ、晩メシ、何食いてえ？　　つか、食える？」
えっとね　今ごはんのこと考える容量がゼロ
「ねーちゃん？」
こいつの顔見たら・・・
「カズオ・・・」
涙出てきちゃったぁぁぁ
「どした？」
って言葉の前に抱きしめるぅぅぅ
なんか　やっぱり　ホッとするぅぅ
ホッとしてばかりじゃダメなんだけどぉぉぉ

あ　なんか・・・

「なんか・・・　梅干し・・・」
「梅干し食いてえ？」
「梅干しが食べたいっていうより、梅干しの香り？　なんか、酸っぱすぎないで・・・」
「えっと・・・　わかった」
え？　わかった？
私だって漠然としたイメージしかないけど？
部屋を飛び出していったカズオであった・・・ってカンジ？
あ、戻ってきた
「ね、ねーちゃん」
「なに？」
「あのぉ・・・　金が・・・」
あ！　そうか！
「リビングのバッグの中」
「ごめんなぁ」
「あ、全然」
あんたにお金のことなんてまったく期待してないから、するわけないでしょ
そしてまた飛び出していった・・・と。
えっと・・・　何考えてたんだっけ？
あ！　生む！
生むって・・・
私が子どもを生むっていうことが想像できない。
まったく想像できない。
仕事なら、企画段階で完成形が頭の中に浮かぶほどになるんだけど、
私が子どもを生むっていうことが・・・　本当に生むの？
いや、生むって言ったんだけど、いっそ生まない？　いやいやいや、それは・・・ねえ。
それに、生む生まないで悩んでるっていうより、単純に？　実感ゼロ。
TikTok でさぁ、どんだけ TikTok 見てんだ？ って話だけど、
妊娠したってわかった女性って、みんな歓喜の涙よね？
こんなに泣いたら明日目が腫れてメイク大変だろうなあって見てただけなんだけど。
こんなんじゃ、生む瞬間でさえ、なんていうの？
タンポン取り替えるときにスポンと外す的な？
タンポン取り替えるのにいちいち感動しないでしょ？　ああいうカンジ？
ああいうカンジしか思い浮かばない
え？　生むの？　これで？　生める？
ていうか、こんな私が生んでいいの？
妊婦資格試験があったら速攻で落ちるわよ？　てか、偏差値ゼロ。
どうするのぉおお？
私・・・　とんでもないこと言ったんじゃない？
今さら、やっぱりムリとか、いや、えっと、どうなんだ？

なにこれ・・・
梅肉とシソとおかか混ぜたおしょうゆ味のごはん。
梅肉とハチミツのきゅうりのサラダみてえの？
それにシソと生姜が載ってる冷ややっこ。
あああああ！　身体がすっごく喜んでる！
「カズオ・・・　あんた・・・　神！」
「あ？」
あ、そういう言い方わからないか
「すっごく美味しい！」
「マジ？」
メッチャ喜んでるけど、私の身体の方が一億倍喜んでるのよ。
ハァァァ、ひっさしぶりにまともなごはん食べた気がする・・・
ニューヨークでもね、確かに美味しかった、美味しかったけど、365 日はムリ。
なんていうの？　日々の？　365 日食べても飽きない？
カズオ・・・　こいつは・・・　すごい！
あんな漠然としたイメージで、よくこれだけのことができるわね。
なんかもう透視レベル？　どういうレベルかわかんないけど。

お風呂から上がったら・・・
「ねーちゃん座ってな、俺、水持ってくから」
「お水くらい自分でできるわよ」
「ねーちゃん、指でズボッと入れんだろ」
えっ
「レモン入ってる瓶いっぺえあったからさ」
そう・・・だけど
「私は忙しくて、だから」
「うん、だから俺やっから」
なん・・・か・・・さあっ
こいつといると自分がダメ人間に思えるんだけどっ？　前からねっ

グラスの中に炭酸ミネラルウォーターとレモン。
ハァァァァ、スッキリするぅぅぅ！
「あんたも入ったら？」
「俺は昼入ったから」
昼入ったって、その後、まあいいけど。
「ねーちゃん」
「なに？」
「あのぉ・・・　もっかい、触っても・・・」

「いいわよ」
はい、どうぞ
嬉しそうな顔しちゃって。
まだ動いてもいないのに　ていうか・・・　本当に中にいるのかな？
いるわよ！　　病院で検査したんだから！

こいつのこの手がくせ者なのよっ
この指っ　エイッ　つかんでやった　ヘッヘッヘ
あっ　つかまれちゃった
顔を見たら・・・
私のこと見てる　だから　その目もくせ者なのよ
ほら・・・　このくちびるも・・・
「アッ、アッ！」
え？　　なに？
ビョ～ンて飛び跳ねて立ち上がったけど？
「ヤベエヤベエヤベエ！」
なに？　　なんなの？
「や、やっぱ、風呂入ってくる」
どうしたの？
あ、そういえば・・・　お風呂もきれいになってたな

いつものように、「おやすみ」って言って・・・
1か月半ぶりだけどねっ　あいつが消えたからねっ
ベッドルームに入って、アラームセットして・・・
明日は会社だ
今日の分、溜まってるだろうなあ
みんな、ごめん！　　明日は二倍で頑張るから！
あれ？
あれ？
これでいいの？
あいつ・・・　キッチンの床だけど？
私もな～んの疑問もなかったけど？
え？　　どういう扱いにすればいいの？
今は・・・　寝よう。

まさかの？

昨日休んじゃったから、メチャクチャ仕事か溜まっている・・・と思ったら、
みんなで手分けしてやってくれていたから、今日の分をやればいいだけになってる。
それでも忙しいけどね、そうだけど、なんか・・・　泣けるぅぅ、泣かないけど。
「北川さ～ん」
あ、大山。
「コーヒーで大丈夫ですかぁ？　　まだ胃が悪いですよねぇ」
あ・・・
「あのね、この辺りで炭酸ミネラルウォーター売ってるところ知ってる？」
「ありますよぉ」
マジ？
「駅ビルの１階に海外系スーパーがあってぇ、そこに売ってますよぉ」
「まさか・・・　レモンは・・・」
「そこにオーガニックのありますよぉ」
マジか！
「あのね、私、今、それしか飲めないのよ」
「そうですよねぇ、胃って治るのけっこうかかりますよねぇ」
そう・・・ではないんだけど、多分しばらく・・・ね
「わかりました！　　しばらくはそれにしますねぇ」
「ありがとう」
「今買ってきま～す！」
マジ？
「ありがとう、助かる」
「私なんてぇ、こんなことくらいしかできないのでぇ」
ハ？　　おまえは・・・　自覚がないのか？
「すぐ行ってきま～す！」
「あ、お金！」
「経費で落とせます！　　フフッ」
「Thank youuuuu!」
まかせて！ って笑顔で走っていった。
私・・・　この会社で大山がいなきゃ生きていけないかもぉぉぉ

お昼は・・・　ガレットっていう気分じゃないいのよ。
麺系食べたいカンジなんだけど、お蕎麦でもないのよ。
ああ・・・　カズオのおにぎり食べたい
ここにはない、あるわけない。
カフェでサンドイッチでいいや。

あ、この店、そうか、そうよね、夏だもの、半袖よね。
あいつ、この暑い中、ずっと長袖着てたから、余計にあんなに臭かったんじゃない？
あ、思い出すだけで吐きそう・・・　忘れろ忘れろ
今着てるのだって晩春？　部屋の中では上はＴシャツ着てるけど、
あのＴシャツだって、もう・・・
スニーカーも！　思い出したくないほど汚ったなくて、おそらくメチャ臭い。
これは・・・
週末は買い出しだ。

「北川くん」
藤木部長？
「こっちへ」
ミーティングルーム？

藤木部長がドアを閉めて・・・
なにかあった？　MAGA 関係？
あったら向こうから直に私に来るんだけどなあ
「明日、正式に発表されるが」
「はい」
「明日から、君は海外事業部企画課・・・」
主任？　やっと主任？
「課長だ」
ハ？？？
「聞いてるか？」
「あの、今なんと・・・」
「企画課長だよ」
え？
エーーーーーーッ？
「か、課長？」
「なんだ、部長じゃなくて残念か」
「え、いえ、あの、なんていうか、主任か、あの、係長もフッ飛ばして・・・」
「そうだ、フッ飛ばしてだ」
藤木部長が笑った。

「今朝の取締役会で決まったんだよ」
なんか・・・　倒れそう・・・
「まあ、主に MAGA 関係の担当になる」
MAGA 関係って・・・　今この会社でいちばん・・・
「頼んだぞ」
「は、はい　　あっ！」
「どうした？」
どうしよう・・・　私・・・
「どうした？」
言わなきゃ、これは、簡単に引き受けられない、だって・・・
「あの・・・」
私個人の問題ではなくなるから
「私、妊娠しているんです」
藤木部長の眉が驚いたように上がった・・・けど
「ですから、ありがたいお話ですが・・・」
「生みたいんだな？」
生みたい？
藤木さんが・・・　優しい目で・・・　穏やかな顔で・・・　見るから・・・
「生みたいです」
あ・・・　涙・・・　ダメ・・・　でも・・・
「私、この子を生みたいんです」
わかった　生みたいんだって　心から　生みたいって・・・
「そうか」
「はい」
「うちは産休制度はしっかりているから心配はないだろ？」
「そうですが・・・」
「それとも、まさか、生んでそのまま家庭に入るつもりじゃないだろ？」
「まさかってなんですか、藤木さん！」
「ハハハ」
「入るわけないですよ」
「だろうな」
「ですから、産休は使いますし、職場復帰もしますが、課長は」
「課長は、なんだ？」
「やはり、まわりに迷惑をかけてしまうので・・・」
「君は、他の女性社員の夢を壊すのか？」
「夢？」
「君が課長になり、出産して、また課長として働ける。
　他の女性社員たちは、そんな君を見て、
　仕事と女性としてのしあわせは両立するとわかる。
　君はそれを見せていかなければならないんだよ」

藤木さん・・・
あ・・・　また涙・・・
「す、すみません、ちょっと気が緩んで・・・」
「君の泣き顔は初めて見るよ」
そうですよねぇ・・・　止まらなくてぇぇ・・・
「けっこう可愛い泣き顔なんだな」
「そうらしいですぅぅ」
「自分で言うなよ」
「私が言ったんじゃないですぅぅ」
「ノロケか」
ノロケ？　いや、ただあいつがそう言ってただけで
「君を相手にできるっていうのは、相当な男なんだろな」
ホームレスですぅぅぅ
「いつか会わせてくれ」
ビックリしますよぉぉ　いろんな意味でぇぇ
「明日、発表されるが、一人で背負い込むなよ」
え？
「それぞれの役職のトップの仕事はな」
「はい」
「部下たちの仕事がしやすいよにすることだ」
仕事がしやすいように・・・
「トップに一人で背負って動かれたら、部下たちは息が詰まる」
確かに・・・
「要は、責任を取るのが長の役割だ、君は向いてるよ」
そうなの？
「それじゃ」
私の肩をポンと叩いて　藤木部長がミーティングルームから出ていった。

課長・・・
なんか・・・　なんだか・・・　実感ない
でも・・・
生んでも働ける！
よかったあぁぁぁ！

ショーシン

玄関を開けると・・・
あれ？　隅にあったネコのセットがない
捨てたのかな？
私はそれどころじゃなかったから、放置・・・というか頭になかった。
「ねーちゃん、おかえり」
あいつがヒョコタン走ってきた。
「ねえ、ネコの、捨てたの？」
「捨てようと思ってゴミ捨て場に持ってこうとしたらよ、廊下でどっかのおばちゃんがよ」
こいつのおばちゃんとの遭遇率も高いな
「それステキねっつって、売ってくれっつって、これ」
千円札・・・
さすがおばちゃん、買い叩いたわね、要らないからいいんだけど
「使ってくれる人がいてよかったわね」
「うん、ねーちゃん、これ」
千円札・・・
「売ったのはあんたなんだから、あんたの儲けよ」
「ほんでもあれはねーちゃんが買ったんだからさ」
「私の中ではとっくに捨ててた、ない、だから、それはあんたが稼いだお金」
「マジ・・・で？」
「マジマジ、お水飲む」
あれ？　俺がやるって言わないな
え？　千円札眺めて感動してる？
あれ？　そういえば私・・・　こいつにただ働きさせてる？
給料払った方がいいのかな？　でも、家政夫さんとして雇ってるわけでは・・・
「ねーちゃん、メシ食う？」
食う食う！

これは・・・
「カズオ、これは・・・なに？」
「そうめん」

うん、確かにそうめんなんだけど、大鉢にドンでつけ汁・・・ではない。
器の中にそうめんも汁もすべてが入っていて、
上にはレモンのスライスとシソと、これは・・・ツナ？
「あっ！」
こ・・・これは！
お昼に私が欲していた、まさにそれ！
ツルッとした舌ざわりとのど越しとシソの香りが癒されるぅぅ。
ツナの生臭さがレモンで消えて食欲出るぅぅ。
私、そうめんて、そんなに好きじゃなかったのよ。
大きい鉢から取ってつけ汁につけて・・・って、めんどくさい。
終いにはつけ汁薄くなっちゃうし。
流しそうめんなんて意味わかんない、流す必要ある？
流しそうめんはどうでもいいけど、一生やらないしやりたくない。
「カズオ、美味しい！」
「マジ？」
「そうめんのこんな、なんていうの？　こうやって食べるのって初めてよ」
「今日そうめん安売りしててよ、でも、多分ねーちゃんはデッケーのから取って、
　汁につけて食うって、めんどくさがんじゃねえかなあって」
な、なぜわかる？
「一緒にしたら食うかなあって」
あんたの中の・・・　料理のレパートリーは　　無限？
ていうか、その創造性はなにっ？
あんた・・・　ナニモノッ？
「ねーちゃん、もう食えねえ？」
「え？　食べられる全然食べられる、美味しいんだもん」
「そっか」
あいつが嬉しそうな顔してる。
「なんかねえ、まあ、あの、妊娠してから？　妊娠してるって知らなかったんだけど、
　今まで好きだったものが食べられなくなったり、考えもしなかったものが食べたくなったり」
「やっぱお母さんて大変なんだなあ」
ん・・・　お母さんという実感はまったくないけどね・・・
「今日のお昼なんて、好きな物を全然食べたくなくて、麺類が食べたいんだけどお蕎麦は違う、
　しまいには、ああ、カズオのおにぎり食べたい！ って思っちゃった」
「え？」
「あ、思っただけ、チラッと思ったってだけ、気にしないで」
「うん」
給料も払ってないのに、これ以上の・・・　あれ？　どういうスタンスで・・・

あ！　そうだ！
「カズオ、私、昇進したの」
「ショー・・シン？」
え？　昇進がわからないカンジ？
「えっとね、課長になったの」
「カチョー・・・」
カンペキにわかっていない顔だ
私の昇進なんて、こいつの世界では、この刻んだシソより価値がない？
「もういい」
「え？　ねーちゃん、もっかい」
何億回言ってもわからないわよっ
「俺、バカだからよぉ」
あのそうめんを創作したこいつが言うとイヤミにすら思えるっ
「なんか、なんつうか、そんでも、ねーちゃんのこと知りてえからよ」
私が大鉢からそうめん食べるのめんどくさいってことまで察知したくせにかっ
「あのぉ、なんつうか、俺でもわかるようにおせえてくんねえ？」
あんたにわかるように？　どのルートで行けばわかるのよっ？
「えっとね・・・」
なんかMAGAとの会議より難しい
えっと・・・　えっと・・・
「あ、土木工事？」
「うん、わかる！」
私がよくわからない、よくっていうか、ほぼ・・・　やってみるしかないけど
「たとえばね、あんたは穴を掘る」
ほら、こういう漠然とした喩えしか頭に浮かばないのよ
「うん」
こいつはわかるのか、そうか
「あんたに、穴を掘れと指示する人がいる」
「あー・・・」
目が上にいっちゃってるけど
「うん！」
わかったか、次・・・
「その、あんたに指示する人に、ああしろこうしろと指示する人がいる」
「あー・・・　うん！」
「つまり、穴を掘っていたあんたが、あんたに指示してる人に指示してる人に突然なる」
「エッ？」
今、椅子から落ちそうになったよね
「ね、ねーちゃん・・・　スッゲーーーー！　マジかよお！　スゲーーー！」
通じた・・・らしい
こいつの中でどういうイメージに変換されているかはわからないけど・・・

「そういうことです」
「ねーちゃん、マジかっけーーー！」
本当にわかったのかなあ？
なんかなあ・・・
26 歳、しかも女性、突然の大昇進、わが社では異例の大抜擢・・・なんだけど、
なんか・・・
こいつの前だと「だからなに？」みたいな感覚になるのは　なぜ？

タッパー

私の体内の水分は炭酸ミネラルウォーターでできている
・・・くらい、ずっとこればっかり。
コーヒーも飲めない、好きなのにぃ。
なんだか、なんていうか、このお腹の中にいるやつに操られている気がする。
実感ないけど。

あ、お風呂から上がって・・・　え？　　あれ？
「カズオ・・・」
「なに？」
「今着てる・・・　それって・・・」
「ン？」
「まさかとは思うけど・・・　まさか・・・　あんたが着てた・・・あれ？」
「うん」
Wh.....aaaaaaaaaaat?
「あ、あ、あんた、あの汚ったなくて臭っさいあれを・・・・」
「ちゃんと洗ったからよ」
ニッコリ？　ニッコリ？　ニッコリ？
「なんで捨てないのよぉぉぉおおっ！？」
「洗えばまだ着れっかなって」
洗えば着れる？　洗えば？　そういう問題？
私の洗濯機で、あの地獄のように汚ったなくて臭っさいホームレスの服を・・・
猫のオシッコついたタオル洗われるより一億倍　イヤーーーーッ！
マジで洗濯機買い換えよう　ムリッ
あ　気持ち悪くなってきちゃった
「ねーちゃん！」
傍に来るな！
って言いたいけど、もう背中さすってる
この吐き気はつわりではないっ
ハァァァ・・・　少しおさまった・・・けど
私の隣に座っているあいつをチラッと・・・・
なんていうの、Tシャツ、オフホワイト、きれいに言ってみたけど、白感もはやゼロ！
首回りとか、まだらなカフェオレ？　薄茶いろいのが取れてないっ
全体的に？ 薄く擦り切れてて・・・

ジャージパンツのひざ、これ穴よね？　小さいワンポイントじゃないわよね？
あいつの顔見ちゃった
なんだその邪気のない顔はっ？
「なんで・・・捨てないの？」
さっきも聞いた気がする・・・
「ねーちゃんが買ってくれたやつだから」
なにそれぇぇぇ？　思い出の品だから捨てられません的なのはいいからぁぁぁ
「あ、マジでもう臭くねえよ？」
ほれってカンジでＴシャツつまんで私の方に　なに？
「臭くねえって、ほれ」
私に嗅げと？
いやいやいや　イヤーーーッ！　顔にくっつけないでっ！
「な？」
な？ じゃないっ
睨みつけてやった・・・ら、なにそのニヤニヤ？
私は怒ってるんだけどっ？
もういいっ
「ねーちゃん」
あんたとは口ききたくないっ
「ねーちゃん」
うるさいっ
「触ってもいい？」
今っ？　この状況の今っ？
はらわた煮えくりかえってるから、この中のも煮えちゃってるかもよっ！
「ねーちゃん」
わかったわよ、父親の権利は守ってやるわよ、ほら、触れ！
あいつの手が・・・
毎日毎日触ったって、まだそんな変わらないわよ

しあわせそうな顔しちゃって
そんなに可愛い？
私は・・・　実感ない、胃の調子が悪いくらいにしか思えない

なんかさあ
その手は今までは私の頭撫でたり私が泣いているときに
抱きしめたりするとき用だったよね
いや、～用っていうのは、あれだけど
それが今では赤ちゃん撫でてばっかり
ていうか、私って容器？
こいつの赤ちゃんを保存してる容器？

容器越しに撫でてるカンジ？
ここから出たら直に撫でられるのにってカンジ？
私　　ジャマ？
しあわせそうな顔のまま私の顔見たけど
「ねえ」
「あ？」
「あんたにとって、私って・・・」
顔の表情が無なのが自分でもわかるけど
「タッパー？」
「・・・・　ハ？」
「なんでもない、寝る」

ベッドルームのドア　バンッ

なんだこの思考のハチャメチャさと感情の起伏の激しさ？
妊娠してるから？
検索・・・って、あ、携帯リビングに置いたままだ
男はいいわよね
一瞬の快楽とお腹が大きくなるのを外から眺めてるだけでしょ
女は・・・
食べたいもの食べられなくなったり飲みたいものが飲めなくなったり
食べないと吐き気がして吐いて
子どもができた喜びなんて・・・　私は感じてない　具合悪いだけ
これからお腹が大きくなって・・・　お腹が大きくなるってどんなカンジなの？
少なくともニューヨークで買った服は当分着ることはできないわよ
それで出産？
映画やドキュメンタリーに出てくる出産シーンて、泣き叫んでるわよ？
拷問されてる？ くらい叫んでるわよ、きっとそれくらいなのよ
ムリ！　怖くてムリ！　全身麻酔かけて寝てる間に出して欲しい

ドアが静かぁぁに開いて　あいつが顔出した
「ねーちゃん」
今来ない方がいいわよ
私は混沌の中で溺れかけてるから
「怒ってんだよな？」
だから混沌に溺れてるのよ
「俺がこれ着てっから？」
それは・・・
あ、勝手にベッドに座るな
「俺は、なんつうか、着れりゃいいっつうか、だから、あの、ごめんな」

そこじゃないのよ
あんたのそういう感覚・・・なんか・・・
確かにさっきはメチャ怒ったけど、あんたのそういうとこ・・・　嫌いではない
え？　いやいやいや、染まってはいけない、こいつのホームレス感覚に染まったら、
私の美意識が崩壊する、私が崩壊する
「ねーちゃん、今なんか考えてるよな？」
考えてます
「カズオ」
「なに？」
「もしも、もしも私に赤ちゃんができてなかったら・・・」
　　私・・・何言ってるの？
「あんた、戻ってきた？」
　　そんなこと聞いてどうするの？
なにその顔？　あんたこそ何か考えてるじゃない
「だって、あんた、出ていっちゃったもんね」
　　そんなこと・・・
「私が寝ている間に出ていっちゃったもんね」
あいつの口元が歪んで・・・
「あんたが出ていっても、私が平気でいると思ったの？」
　　止まらないよ・・・もう・・・
「私、あんただらけになっているこの部屋で、それに圧し潰されそうで、
　だけど泣けなかったの、泣けないの、涙が出てこないの、だって・・・」
あ・・・もう・・・
「私はあんたがいないと泣けないの！」
あいつの手が・・・　私のこと・・・　あいつの腕が・・・　私のこと・・・
「私とあんたをつないでるのって・・・　赤ちゃんだけなの？
　赤ちゃんいなかったら・・・　あんた、また出ていっちゃうの・・・」
あいつが・・・　ギュウッて抱きしめて
「ねーちゃんの・・・」
あ・・・　鼻声・・・
「ねーちゃんの顔見たらさぁ、俺、ぜってえ出ていけねえって・・・
　ずっと・・・　ねーちゃんのそばにいたくなっちまうって、そんなん・・・なあ」
鼻声で・・・
「でも、やっぱダメだ、ダメだなあ、俺」
笑おうとしてるけど
「ねーちゃんのそばに・・・　いたくてよぉ、俺、どっしようもねえよなあ」
あいつの身体が震えてる・・・から、グイッて身体離して
絶対泣いてたよね？ な、あいつの顔睨みつけて
「だったら約束！」
小指出したら、あいつも小指出した

「二度と黙って出ていかないで」
あいつがコクンと頷いた
「ウソついたら・・・」
マジでっ
「この子、殺す！」
「ねーちゃん」
あいつが恐怖におののいた顔で
「俺、死んでも出ていかねえ」
でしょうね！

塩むすび

ゆうべはね、カズオが「おやすみ」って言って、
私も「おやすみ」って言ったらカズオがドア閉めて、
サイドテーブルのランプ消して・・・
え？ って思っちゃった。
カズオがキッチンで寝るのがデフォルトって　　どうなの？

まあ、今はそれはいい　いいのかな？　まあいい。
明日はカズオの服の買い出し。
でもねえ、メンズのショップがわからない。

にしても・・・
このおにぎり・・・
今朝出がけにカズオが「ねーちゃん、これ」って。
「なに？」って聞いたら、
「昨日、ねーちゃん、昼ににぎりめし食いたくなったつってたから」
えええええっ？　マジで作ってくれたの？　感動！
で・・・
スーパーの袋に入った私のジャストサイズより小さめのおにぎり・・・　10 個。
私が仕事しながら食べると思ったのかな、思ったんでしょうね。
できればそうしたいけど、会社ではムリなのよ。
しかもどこで食べる？
お弁当なんて持ってきたことないから、まあ、このフリースペースでいいか。
「北川さ～ん！」
あれ？　大山
「今日は駅ビル行かないんですかぁ？」
「う、うん、まあね」
「あ！　お弁当？」
「お弁当っていうか、おにぎりだけなんだけどね」
「そうですよねえ、胃か悪いときって・・・　あっ！」
え？　な、なに？
「塩むすび！」
貧弱よね、でも私はカズオのこれが好きなんだけど、貧弱です、はい

「北川さんて・・・　通ですね」
通？　なにが？
「塩むすびってぇ、おむすびの究極形ですもんねぇ」
そうなの？
「私なんてぇ、おむすびの素とか入れてぇ、ごまかしちゃいますけどぉ」
作るだけえらいと思う
あれ？　おにぎりを凝視している？
「食べる？」
「いいんですかぁ？」
10 個もあるのよ
「いただきま～す！」
私も・・
「えっ！」
ど、どうした？
「これは・・・」
な、なに？
「この絶妙な塩加減！」
あ、やっぱり？　だよね？
「北川さんて・・・　やっぱりタダモノじゃないですね」
なにが？
「こんな絶妙な塩加減の塩むすびを作れるなんて・・・　すごいです！」
「あ、いや、私が作ったんじゃないのよ」
「え？」
あっ　ヤバい！
「ということは・・・　料亭？」
料亭？
「そうですよねえ、こんな絶妙な塩かげんで、この一口サイズは料亭ですよねぇ」
えっと、そうじゃなくて
「わざわざ料亭で作ってもらうなんて、北川さん、やっぱりすごいですぅ！」
ちがうのよ
「しかも、料亭で作らせたとわからないようにスーパーの袋に入れるイヤミのなさ！」
これは、カズオが入れただけでさ・・・
「どこの料亭ですかぁ？」
え・・・　えっと、料亭・・・カズオ？
「あ、すみません、隠れた名店ですよねぇ」
ま、まあ・・・　隠れては・・・いるか　ていうか・・・なんていうか・・・
「私もいつか隠れた名店で塩むすび作ってもらえるようになりたいですぅ」
“女性社員に夢を”・・・
「大山ならすぐに、うん、すぐになる」
「嬉しいですぅぅぅ！」

あ、そうだ
「大山、メンズの服を売ってるショップって知ってる？」
「メンズ？」
えっと・・・
「し、知ってる子でね、20 歳でね、なんていうか、こういうショップは初めてで・・・」
「ああ！　東京のファッションに触れたいカンジのぉ？」
東京のファッションていうか、ファッション自体知らないっていうか
「私のカレシがけっこうファッションにはうるさくてぇ」
携帯で探してる・・・　サササッと手早い・・・
「ここと ぉ、ここと ぉ、ここが、特におススメです」
「これは・・・　どこにあるの？」
「渋谷と表参道に近い原宿っていうか、裏原？」
ウラハラ・・・　聞いたとこはあるけど、およそ縁がなかった
「どういうカンジがいいですかぁ？」
汚くて臭くなけれはなんでもっ！
「ここはぁ、ちょっと攻めてますけどぉ、北川さんのお知り合いならぁ・・・」
お知り合い・・・っちゃ、まあお互い知ってるけど
「ここなんかぁ、シンプルだけどぉ、オシャレでぇ、リーズナブルですよぉ」
そこだな
「そこがいいわ」
「URL 送っておきますねぇ」
「ありがとう」
「ご予定は？」
ご予定？　予定？　あれ？　予定・・・日
え？　ちょっと待って・・・
このお腹の子は・・・　いつ生まれるんだ？
先生が何か言ってた気はしたけど、私は妊娠したってことで頭いっぱいに・・・
「北川さん？」
「あ、えっと、まだ・・・」
わからない・・・
「今日から 2 週間サマーセールやってるみたいなのでぇ、その間に行くとお得だと思いますぅ」
あんたは・・・
グーグルより一億倍有能だな
「ありがとう」
「北川さんてぇ、本当に優しいですよねえ」
「ハ？」
「そのお知り合いの男の子の服のことまで心配してるしぃ」
心配っていうか、あれじゃひどすぎるってだけで・・・
「私もいつもお世話になってますしぃ」

いや・・・　世話しているのは・・・
大山、あんたと、その “お知り合いの男の子” で、
私が世話になっちゃってるのよぉぉぉ！
「あ、私、炭酸ミネラルウォーターとレモンの補充買ってきますねぇ」
ほらね。

あ、そういえば・・・
今朝、新人事の発表があって、一緒に MAGA のプロジェクトやってくれてる人たち、
すっごく喜んでくれて、大山なんか涙浮かべてて・・・
でもね・・・
カズオに伝わらなかったから、なんていうのかなあ？
そんなに大したことじゃないかもって思っちゃう？
いやいやいや、藤木部長に言われたとおり、みんなが動きやすい課にしていかなきゃ。

ハァァァァァ　やっぱりカズオのおにぎり最高！

あ！　待てよ・・・
メンズショップ行く前に・・・
そこに出かけられる恰好にしておかねば。
あれでは・・・・　入れてもらえない

昼休み、あと 30 分？
駅ビルだ！

白 T と、ブルーグレーの薄手のジャージパンツ。
下着もいるわよ、見てないけど絶対見たくない状態だと思う。
スニーカー！　これなら爽やか！
まあ、これくらいだったら、渋谷とか表参道ギリか。
あれ？　これってなんだっけ？　あ、ギョサン！　ブルー可愛くない？
ちょっとゴミ捨てとかにいいんじゃない？　これも買おう。

ほらぁっ！
課長になったのに、やってること平のときと変わんないじゃ～ん！
仕事じゃないけど。
こっちの方がめんどくさいっ。

表参道

山手線の中、あと二駅で原宿。
私の隣に座っているカズオ、白のＴシャツ、ブルーグレーのジャージパンツ、
そして・・・　ギョサン。
山手線に乗り換える前の電車で気づいたのよ、気づくの遅かった。
なんでギョサン履いてくるかなあっ？　　スニーカーでしょ！
まあいい、とにかく、服を買う！

ここを真っ直ぐ行って表参道近くを左よね、うん、そうね。
あれ？　　カズオ？
え？
私の後ろに隠れて目だけキョロキョロさせて怯えて歩いている。
異次元か？　　そんなに異次元か？
こいつには異次元・・・か、そうか。

ここだ！
あれ？　　このショップのロゴ、ニューヨークで見たことがある。
どこだっけ？　　ソーホー？
けっこうオシャレなショップが並んでるところだったから、
さすが大山・・・のカレシか。

うんうんうん、なかなかいいじゃない？
カジュアルだけど品があって、さりげなくエッジが効いてるカンじがいいわね。
しかも 40 パー OFF！
このスモーキーピンクのシャツ可愛い！　　可愛いけど男っぽくてよくない？
ジーンズもいいかもね、そうよね、あっちの・・・
「ね、ねーちゃん・・・」
なに？　　え、耳打ち？
「ここ・・・　ヤベエ」
ヤベエ？
それは、ヤベエ、カッケー！ のヤベエ？　　それとも何かマズイことのヤベエ？

「なにが？」
「メッチャ高けえ」
高い？　いやいやいや、、この辺りの他のショップに比べたらリーズナブルよ。
素材がしっかりしていてこの値段、まして 40 パー OFF。
「俺・・・　怖くて着れねえ」
怖くて着れない？？？
もしこいつにアルマーニのスーツ着せたら怖くて死ぬかな？
着せないけど、さすがにアルマーニは。
この値段で怖い・・・
となると、こいつにはスーパーか、駅ビルの量販店しか着せられない？
え・・・
思わずカズオの顔見ちゃった。
どうすればいいのよ？　ここまできて？
すまなそうな顔してる
そっか、そうだね
「わかった、出よう」
ホッとした顔
出ようとしたら出口近くで・・・
マネキンが着ている白のちょっと丈長めの T シャツの・・・　裾に・・・
あ、ネコ
「カズオ、これ見て」
小さな刺繍
「あんたのみーちゃんに似てない？」
「あ、似てる、似てんなあ」
「あんたとみーちゃんは恋人だからねえ」
「え？」
「これ欲しいなあ、あんたのみーちゃん T シャツ」
カズオのこと見上げたら
「みーちゃん T シャツなら、俺・・・　うん」
頑張って着るってことか。
40 パー OFF で 4,870 円、これがカズオが頑張れる限界値か。
「これ、欲しいんですけど」
近くにいたスタッフさんに言うと、
「こちら現品限りで新しいものはないんですけど」
「いいです、これで」
「わかりました」
「あ、着ていきます」
カズオが「え？」って顔したけど、これは譲らないわよ。

試着室から出てきたカズオ。

「似合うわよ、みーちゃんＴシャツ」
さすが素材がいいから白Ｔでも量販店のとは違う、全然！

次は・・・　こっちだ！

「ね、ねーちゃん、あの・・・」
ここはどこ？ でしょうねえ。
「あんたの髪を切るの」
「あ？」
「そのまま伸ばし放題にしてたら落ち武者よ」
「オ、オチムシャ？」
わからなくていい。
「ミサトッチ～！」
オカマヘアスタイリスト・シンシン、相変わらずハッデハデ！　似合ってるけど
「今日はメンズカットで予約入ってるけど？」
「うん、あの、これを・・・ね」
「ヤッダ～！　可愛～い！」
肩に手を置かれ　カズオ完全に固まる　初オカマに固まる
「ミサトッチったらぁ、こんな可愛い子、どこで拾ってきたのよ」
駅の地下道で・・・

椅子に座らせられたカズオ
猫背になって固まっている　ちょっと笑える　プッ
「今日はどんなカンジにしたい～？」
シンシンが話しかけても固まってるから聞こえてないな。
「あんまり短くしないで」
「ワタシ、彼に聞いてるんだけど？」
聞こえてないのよ
わかっててやってるよね、シンシンっ？
「前髪が伸びすぎてるから少しカットして、でも、短くはしないで」
シンシンが首をクネッと私の方に向けて
「男を自分好みに変えたい女」
「ち、ちがうわよ」
シンシンが意味ありげに微笑んでウインクした！
オカマっていろいろ鋭い・・・
「ミサトッチ」
「なによ？」
シンシンが驚愕って顔で私の方を見たけど？
「トリートメント、いちばん高いの使っていい？」

あ・・・　そんな・・・なのね
「うん、もちろん」

カットしてるシンシンは神。
メッチャ男！　そしてメッチャ繊細な女！
私が学生時代でシンシンがまだ独立する前からだから、
長い付き合いよね、腕はすごいのよ、外見は別の意味ですごいけど。
あ・・・
きそう・・・
ヤバ・・・
トイレ行こう
「ね、ねーちゃーーん！」
へ？　なにその捨てられそうになって母を呼ぶ悲痛な声的なのは？
そっか、私がいなくなると不安か、だよね、シンシンと二人きりは・・・ね
「シンシン、炭酸ミネラルウォーターある？」
「あるわよぉ、ワタシのとっておき！」
シンシンが奥から持ってきたのは、おお、さすが！
これって一本千円するやつよ。
「なんなら水素水もあるわよ、持ってくる？」
「いらない」

シンシンがトップを真剣な顔でカットしながら
「ミサトッチ」
「なに？」
「あんた、妊娠してる？」
ハ？
「な、な、なに言ってるのよっ」
「な～んかホルモン変わってない？」
でしょ！ みたいな顔でこっち見ないでよ！
鏡に映ってるカズオがカットした毛だらけの顔で私を・・・見ちゃダメ！
「な～んか違うのよねえ」
オカマの感覚の鋭さは侮れん・・・
こっちも攻撃してやる！
「シンシン、太った？」
「えっ？　やだあ！　太って見える？　ねえ、太ってる？」
「知らない」
シンシンは太ることに恐怖を感じるのよ　フッフッフッ

シャンプー台から戻ってきたカズオ

タオルのターバンが笑える　プッ
私がニヤニヤしてたら、カズオの眉が八の字になって情けな～い顔・・・が笑える

ヘアドライしてるから、な～んとなくタブレットで雑誌見て・・・
このバッグ、素敵だけど、まあ私もいろいろ持ってるけど、
結局使うのってガボッとファイルやノート入れられるやつばっかりなのよね

「ミサトッチ」
なに？
「できたわよ！」
え・・・
「ワタシの最高傑作！」
これは・・・
前髪とサイドが後ろにきれいなラインで流されて・・・
なんかなんていうか・・・
このままメンズ雑誌に載れんじゃね？ みたいなイケメンがいる！
「ステキでしょぉぉお！」
えっとね
えっと
「これはカズオじゃない！」
グシャグシャって手で・・・
「イヤー！　私のスタイリングが壊滅よぉぉ！　ミサトッチったらぁ！」
「もっと自然なカンジにして」
「わかってるわよ、あんたがぜ～ったい気に入らないだろうなあって、やってみたの」
シンシン、あんたのそういうとこ、嫌いじゃないけど、めんどくさいっ。

前髪も下ろされて自然な流れになって、ちょっと短くなった髪で
みーちゃんＴシャツ着て表参道歩いてるカズオ。
ほら、通り過ぎる女の子たちがカズオを見る見る！
こいつは自覚ないのかな？
今、自分が表参道にいても全然違和感ない見た目だって。
ギョサンですら抜け感に見えるわよ。
でもねえ・・・　なんだろ？
そうだ、夕食、せっかく表参道に来たから食べて帰る？
美味しいイタリアンのお店があるのよ。
でもねえ・・・
「カズオ」
「ン？」
「夕食・・・　カズオのそうめん食べたい」

「うん」
嬉しそうにニッコリしたから

帰ろう！

縫う

なんだろう　なんかおかしい
あのメンズショップで、カズオが高いから着るのが怖いって言ったとき、
前だったら、私の部屋で汚い恰好して欲しくないから着ろ！ ってキレたと思う。
うん、絶対キレた。
でも、あのとき、カズオの顔見て、そうだなあ、これがカズオだなあって。
あの猫の刺繍がついたＴシャツだって、パッと刺繍が目についただけで、
あのネコに似てるって思っただけで、そしたら、カズオに着て欲しいなって、
あのネコとカズオが私の傍で遊んでた空気が好きみたいな？
あの刺繍がなかったら買わなかったと思う。
シンシンのところでも・・・
シンシンのカットとスタイリングは最高なのよ。
カットの流れを活かした最高のスタイリング。
最初にシンシンが見せたカズオのスタイリングはパーフェクトだった。
カズオもメッチャかっこよく見えたし。
前だったら、できれば毎日来てスタイリングしてくれない？ って言いたくなるほど。
でも、なんか・・・　なんか、これってカズオっぽくなくてイヤだなって。
なんだろう　なんで？

カズオがまたタオルで髪ゴシゴシ乾かしながらリビングに・・・
あんな風に髪乾かしてるの見たら、シンシン泣くわよね、フッ
ほら、ボッサボサ、カットがいいからそれなりに見えるけど。
駅ビルで買ったＴシャツ着てる、あれ？　　ひざに穴の開いてるジャージパンツ？
「あっ！　　ね、ねーちゃん、ごめん、あの、ボケッとしちまって」
私の視線を感じたのね
「それって・・・」
「あ、えっと、ち、ちげえのに」
「臭くないのよね？」
「あ、う、うん」
「だったらいいわよ」
「へ？」
「なんか・・・　あんたらしいから」
なんだろ・・・　ホッとする

ホッとする？　って・・・　なにこれ？
「ねーちゃん」
「なに？」
「でも、これは・・・」
って、カズオがキッチンにヒョコタン走って・・・　戻ってきて
「これは・・・　捨てた方がいんだよな？」
ああ・・・　まだらに薄茶の擦り切れたＴシャツか・・・
「臭くないのよね？」
「あ、うん」
「だったらいいわよ」
「エッ？」
なんで？　なんでいいと思ってるの私？
なんか・・・　おかしい・・・
「ねーちゃん」
あ　いつの間に隣に座った？
「具合悪りぃの？」
「なんで？」
「なんつうか、なんか・・・」
あんたまで首ひねらないでよ
「だったら、私が捨てろって言ったら、あんた、捨てるの？」
「ねーちゃんが捨てろっつったら、俺は全然いいよ」
捨てろという気が・・・　どこを探しても・・・　ない　　なぜ？

隣りに座ってるカズオのひざの穴に目が行ってしまった
私　え？　いやそれは　でも　なんか
「あのね」
「うん」
「私ね、オシャレとか服とかコーディネートとか、そういうのには・・・」
何言い出してるの？
「たとえばね、服のデザインは最高、でも、ボタンがイマイチでね」
やめた方がよくない？
「信じられないかもしれないけど、仕事忙しくなってからは全然やらないけど、
　めんどくさいし、それどころじゃないから、でもね」
吐き出すだけ吐いた方が楽かな？
「ボタン買ってきて付け替えたりしたの、大学時代とかはね」
カズオを見たら　何が言いたいのかわからないって顔してるけど
「ちょっと待ってて」
ベッドルームに入ってクローゼットの奥のソーイングセット取り出して・・・
リビングに戻ってきて・・・
またカズオの横に座って・・・

「カズオ」
「うん」
「信じられないかもしれないけど・・・」
「あ、うん？」
「私・・・　裁縫うまいの」
ほら、ビックリした顔した　ビックリよね、でも美の追求のためなのよ
「ちょっと・・・いいかな？」
「ン？」
「この穴、いいかな？」
「あ？」
「今、メチャクチャこの穴を繕いたい衝動にかられてるの！」
「あ、えっと、そ、そんじゃ、ぬ、脱げば・・・」
「これくらい、脱がなくても縫えるのよっ！」

ソーイングセットの中からジャージパンツの色に合う糸を・・・あった！
針に糸を通し、穴のところの布目を合わせて引きつれないように縫うひたすら縫う
玉結びが外に出ないようにして、ハサミでギリで切って・・・
完成！　完璧な縫い目！　美しい！　我ながら美しい縫い目！
「すげえ・・・」
え？　あ、いたのね、いるわよ、無の境地になってたわ。
「ねーちゃん・・・　すげえ！」
「これくらいは、たいしたことないの、めんどくさいからやらないけど」
今のは、ただ衝動に突き動かされただけ
「俺・・・　こんなんしてもらったの、はじめてだよ」
私だって、自分のもの以外を縫ったのは初めてよ
「施設にいたときも、穴開いてもそのまんまだったしよ」
施設？　施設にいたの？　まあ・・・　流れからいけばそうだろうけど
「ねーちゃんが・・・　俺のひざん上で・・・　縫ってくれてんの見てたら・・・」
あれ？　鼻声？
「なんか俺・・・　こんなしあわせでいいんかなって・・・」
笑って言おうとしてるけど
「なんか俺・・・」
前髪が前よりは短くなってるから・・・　涙が見えちゃうね

カズオが私の縫った縫い目を大切そうに指で・・・

そっか・・・　そうなんだ
私は・・・　こういうカズオが好きなんだ
表参道の服や最高のカットより
ひざに開いた穴を縫ってもらったことがしあわせって思うカズオが

だって私　今やもう　カズオがどんな格好してたってカズオだなあって思うだけ。

「カズオ」
「ン？」
「もしも、今、あんたが、あの地下道に座って汚ったなくて臭っさい服着てても」
カズオが真っ赤になった目で私を見てる
「あんたの服の穴、縫える自信ある」
カズオが必死に笑おうとして・・・
「ねーちゃんは・・・よぉ！」
私に抱きついて
おそらく泣いてる　てか　泣いてる

本気で言ったのよ
あんたのならね　自信ある！

産婦人科

とてつもなく眠い
昨日も気がつくとソファで寝ていて一日が過ぎちゃった。
コーヒー飲みたい！　でも飲むと吐く・・・
そんなことは言ってられない、今日も仕事の予定ビッシリ。
予定か・・・
予定・・・　あ？　予定日！　予定日知らないのよ、予定日知らないってどうなの？
どうしよう　病院行くしかないわよね　どこ？
この前の病院は・・・　どうなの？　中絶申請書もらってきちゃったけど？
でも、あの先生よかったのよね、穏やかで落ち着いてて、人生の相談もできそうな・・・
産婦人科に人生相談はできないけど、できればしたいけどね
あそこに行くか？　行くしかないよね、他探すのもめんどくさいし。
オンライン予約・・・　明日の９時　できた！
なんかもう・・・
正直、仕事に専念したい！

玄関のドア開けると・・・
「ねーちゃん、おかえり」
こいつの顔見ると
「ただいま」
ホッとする

なにこれぇぇぇ
そうめんを使ったジャージャー麺風のやつ！
ピリッと唐辛子が効いて、きゅうりのシャキシャキ感がたまらない！
「そうめんばっかでごめんなあ、安売りんときいっぺえ買っちまってよ」
「全然いいの、メチャクチャ美味しい！」
「マジ？」
嬉しそうな顔しちゃって
あ、そうだ

「カズオ、私、明日、産婦人科行ってくる」
「エッ？　ねーちゃん、具合悪りぃの？」
「予定日聞きに行くのよ」
「予定・・日？」
「赤ちゃんがいつ頃生まれるのか」
「あ・・・　そっか、そっか」
そういえば・・・　待合室に待ってるダンナさんが何人もいたな・・・
こいつ、来たいかな？
でもねえ、待ってるだけだしねえ
いちおう言ってみる？
「あんたも来る？」
「えっ」
「イヤならいいのよ、どうせ待ってるだけだし」
「行きてえ・・・けど、ねーちゃん・・・　いいの？」
「いいの？ って、なにが？」
「俺が一緒に行っても・・・」
「ハ？」
「前んときは来るなって」
前のとき？
「でも、俺、行っちまったけど」
あ！　中絶したとき！
そこほじくり返すかなあっ！？
しかも、あのときはあんたはただのホームレスで
「あのときと立場が違うでしょ！　あんたが父親でしょ！」
「そっか」
なに下向いてニマニマしてるのよ？
「一緒に行っても、おそらくずっと待合室で待ってるだけだと思うけど」
「うん、待ってっから」
嬉しそうに・・・
あ、こいつは、あのときも何時間も外で待ってた・・・
今度は中で待てるわよ、よかったわね　フッ

一夜明けて・・・
只今、産婦人科の待合室。
ビックリすることにね、私はビックリだったけどね、
こいつ、みーちゃんＴシャツ着てスニーカー履いてきたの、今はスリッパだけど。
こいつにしてみたら、タキシード的な？　そんなカンジよね？
「なんでそれ着たの？」って聞いたらね、

「やっぱちゃんとしたカッコじゃねえと、ねーちゃんに恥かかしちまうかなあって」
私はもはやこいつがあのまだら薄茶のＴシャツ着ててもな～んとも思わないけど。
待合室で待ってるだけだし。

「北川さ～ん」
「はい」
「内診から行いますので２番に入ってください」
「はい」
「ご主人はこちらでお待ちください」
ご主人？
あいつを見たら・・・　固まっている
あいつは・・・　私のご主人ではないんです　このお腹の子の父親ですけど・・・

内診が終わって、また待合室。
「北川さ～ん」
「はい」
「診察室にどうぞ」
「はい」
「ご主人もよろしければどうぞ」
え？
あいつを見たら・・・　目ひんむいて固まってる
いろいろ違うんだけど、まあ、父親だから
「ほら」
「あ、うん」

「出産希望でよろしいんですね」
「あ・・・　はい」
この前は、「中絶申請書くださいっ」って立ち上がったから、先生も・・・ね。
「内診の結果は異常ありません」
よかった
「順調ですよ」
「あの」
「はい？」
「すごく眠くなったり、何も食べていないと吐いたりするんですけど」
「つわりですね」
「そうですか」
そうだとは思ってたけど
「妊娠中はホルモンのバランスがガクンと変わりますので、情緒が不安定になって、
　急に怒ったり泣いたり落ち込んだりすることもあります」

え？　それは・・・　いつもと変わらないような・・・
「妊娠は、お母さんにとっては命がけですよ」
い、命がけ？
「まあ、それくらい母体にとっては大変なことだということです」
「はぁ」
「北川さんは妊娠 8 週目の終わりですから、16 週あたりからが安定期になりますね」
16 － 8 ＝ 8・・・　あと 8 週も続くの・・・　16 引く 8 もパッと出てこなかったし・・・
「北川さんの予定日は・・・」
きたきたきたきた
「2 月の・・・」
13 だけは言わないで！　13 はやめて！　私は 13 日生まれで苦労したのよっ
「17 日かな」
ホッ・・・
「ただ、前後 1 週間のズレはありますから、だいたいその辺りと思っていてください」
ハッキリ決めて欲しいんですけどっ
「37 週から 40 週が正期産ですから、早まっても 37 週以降であれば心配ありません」
40 週・・・　そんなに長いの・・・
「エコーで赤ちゃん見てみますか？」
「ハ？」
「お腹の中の赤ちゃんが、まあだいたいですが見られますよ」
どうしよう・・・　でも、実感ないから見た方がいいか
「お願いします」
「ご主人もどうぞ」
え？
あ！　すっかり忘れてた　いたんだ

診察台に寝て、お腹にベタベタのジェルみたいなものを塗られて・・・
お腹の上を何か四角いものでグリグリ・・・
なにこれ・・・　よくわからない・・・
「ここかな」
え？
これは・・・
「これがへその緒ですね」
これは・・・
「これが赤ちゃんです」
私には・・・

宇宙服着て宇宙遊泳している宇宙飛行士に見える

これは・・・　人間？

え？
グズッて・・・・
カズオが・・・
目をウルウルさせて感動して見ている！
マジ？
これで感動できる？
感動ポイントはどこ？
「心音も聞いてみましょう」
なにこれ？
グオングオングオンって・・・　心臓の音？　私の腸が動いてる音とかじゃないの？
「しっかりとした心音ですよ」
「そう・・・ですか」
えっ？
カズオの頬に涙？
どうすれば、あのわけわかんない音で泣けるの？

なにこの温度差？
私がおかしい？　泣くべきだった？
だって　泣きポイントがまったくわからないんだもん・・・

また診察室の椅子に座って・・・
「ご主人もいらしてるので、妊娠中の性生活についてご説明しますね」
ハ？
「性生活は、いつでもなさって大丈夫です」
えっと・・・
「ただ、激しいものや激しい体位は避けてください」
あいつがどんな顔して聞いてるのか・・・　見れない、あいつの方見れない
「お腹が張ったり、出血があった場合は避けてください」
先生！　私とこいつは一回しかしていないんです！　それでできちゃったんです！
「あと、望ましい体位は・・・」
もうヤメテーーー！

次は異常がなければ４週間後。
また会社遅れて行かないとかあ、休日診療ってないかなあっ？
あ、いやいや、私がちゃんと妊娠診察に行くことで他の女性社員が・・・　そうだった。

カズオの帰りのチケット買って・・・
「それじゃ、私は会社に行くから」
さっきの先生の話でカズオの顔がまともに見れないっ
「ねーちゃん」
「え？　　なに？」
「ありがとな」
「なにが？」
「なんつうか・・・」
頭ボリボリ掻いてるけど
「いろいろ」
いろいろ？
「ありがとな」

カズオ・・・
あんたが感動していたとき
私は宇宙服着た宇宙飛行士みたいって思ってたの
それは　　ごめん
でも　そうにしか見えなかったし
今も

感動ポイントがわからないのよ！

あ、早く行かなきゃ。

感動ポイント

玄関のドアを開けると・・・
「ねーちゃん、おかえり」
カズオがヒョコタン走ってくる。
「ただいま」
午前中一緒にいたけどね

なにこれぇぇぇ
冷しゃぶ！　豚肉の冷しゃぶ！　野菜もさっと茹でてあって、
ポン酢で食べるとサッパリするぅぅぅ。
「なんかよ、赤ちゃんいるときは、豚肉食った方がいいらしくてよ」
「そうなの？」
「うん、豚肉の・・・ビタミン・・・なんとかっつうのがいいって」
「あんた、そんなことどこで知ったの？」
「これ」
それは・・・　『妊婦さんのお食事ガイド』パンフレット？
「こんなのどうしたの？」
「病院の待合室にあって、もらっていいかって聞いたらいいよつってくれて」
私は　そんなもの目にもとまらなかった
「漢字んとこはわかんねえけど、絵ぇかいてっから、なんとなくはわかっかなあって」
カズオがお母さんになった方がいいんじゃない？
「やっぱ、なんつうか、俺にできることって、こんくれえしかねえからよ」
こんくれえって、私は絶対できないけど？
「あ、でもよ、病院の人が、ツワリんときは、食べてぇもの食っていいって」
いつそんな情報を入手した？　待ってるとき？
こいつはナニモノっ？

お風呂入った後はねえ、楽になる。
炭酸ミネラルウォーター・・・
あ、ダメダメ！
あの宇宙服着てる宇宙飛行士が

炭酸ミネラルウォーターの中に浮いてるの想像しちゃった。

カズオがタオルでゴシゴシ髪乾かしながらリビングに入ってきた。
おそらくこいつは一生ドライヤー使わないな。
「ねーちゃん」
「なに？」
「今日は、ありがとなぁ」
「なにが？」
「俺のこと、病院に連れてってくれてよ」
「あんた父親なんだから」
「うん」
照れちゃって　フッ
「あのさ」
床見ながら？　こっち見ない？　いいけど
「あの・・・　なんつうか、赤ちゃん、見てさ」
あんたは感動してたけど・・・　ごめん、同じ温度で感動できなくて
「あのさ、俺、あんときさ、あの、俺が出てく前の・・・あの・・・晩に・・・」
え？　起源まで遡る？
「俺さ、あんとき、夢じゃねえかなって、マジ夢かもしんねえって」
しっかり子どもできてるけど？
「メッチャしあわせで、このまま死んでもいいなって、つか、死にてえなあって」
あんなときに死なれたら私が困るわよ
「そんで、そんときに、あの、そんときの、子どもがいるって・・・
　なんつうか、あれは夢じゃねえんだって、ほんとに俺は、ねーちゃんと・・・」
それ以上は考えないで
「そんで、ねーちゃん、生んでくれるっつって」
言ったわよ、言っちゃったから、今、つわりよ。
「今日さ、赤ちゃん見たらさ、ねーちゃんと俺の子はほんとにいるんだって。
　あんときの子がいるんだって、それを、ねーちゃんがさぁ・・・
　ねーちゃん、メチャ辛くて毎日辛くて、そんでも、ねーちゃんのお腹ん中で・・・」
あ、鼻声・・・
「俺、そばで見てっからよぉ、ねーちゃん辛れえの見てっから・・・
　この子は、ねーちゃんが守ってくれてんだなあって、あんなに辛れえ思いして、
　ねーちゃんがお腹ん中で守ってくれてんだって思ったら・・・　俺・・・」
え？　そういう感動？
「心臓の音聞いて、なんかよくわかんなかったけど」
あ、やっぱり？
「そんでも、なんかすげえ強え音でさ、先生もしっかりした音だっつってさ、
　生きてんだなあって、ねーちゃんがこの子を生きさしてくれてんだって思ったら・・・」
そういう・・・観点か

「だってよぉっ　俺みてえなんとは別世界だと思ってた人がよぉっ」
え　なんでキレ気味？
「俺がメッチャ好きな人が、俺とそのメッチャ好きな人の子どもをよぉっ　あっ・・・」
私がここにいることに気づいたのね　うん
ていうか、今さら照れるとかそういう段階じゃないよね
「えっと、あのぉ、なんつうか・・・」
何を言えばいいかわからないよね　はいはい
「あんたのこと、連れてってよかった」
聞かなかったことにしよう　めんどくさいから
「うん、ありがとなぁ」
「あんた、ご主人って呼ばれてたわね」
「あ！　ご、ごめんなさい！　マジごめんなさい！」
いやいやいや、土下座しようとするなよ
「固まってておもしろかった、ハハハハ」
「ねーちゃ～ん、笑わねえでくれよぉ」
って言いながら私の隣に座る・・・と
「ン？」
ほら、確信犯
「なに？　ねーちゃん？」
すっとぼけて
「触る？」
「いいの？」
「あんた、父親でしょ」
嬉しそうな顔しちゃって

カズオの手が　私のお腹をいつもみたいに優しく撫でて・・・
「ここにいんだなあ」
うん　宇宙飛行士・・・
「ちゃんといたもんなあ」
いた　宇宙飛行士・・・
カズオの手が・・・
私の手をつかんで・・・
顔見たら・・・

なんか　そうなると思ったんだよね
先生が・・・　説明したとき・・・

「えっと、ベッド、ベッドで・・・」
「あ、う、うん」
て言ったらヒョイって　え？　これは　お姫様抱っこ？

すっごいスピードなんだけど？
私の身体をベッドの上にそっと置いて・・・
「あの・・・　マ、マジ？」
「え？　なに・・・が？」
「ね、ねーちゃん、いい？」
「いい・・・けど」
あ・・・　カズオの目が・・・　この目に・・・　ヤラレる・・・
こいつは・・・
こいつに抱かれるたびに・・・　妊娠しちゃいそう・・・

カズオが腕枕して、私を見ながら・・・
「ねーちゃん」
「なに？」
「どうしよう」
え？　なになになに？　その不安そうな顔？
「俺・・・　もうムリ、かも、しんねえ」
「な、なにが？」
「俺、あの、なんつうか、必死こいて、ぜってえダメだって」
「何の話？」
「あの・・・　ねーちゃん抱きてえって、そういう・・・」
え？　あ、それ？
「でも・・・　もう、ガマンできる、なんつうか、自信ねえ」
我慢してたの？
全然知らなかった、ていうか、そういうの？ 考える余裕もなかったし
「俺、がんばっけどよ、ねーちゃんがヤダっつうことしたくねえしよ」
顔がメチャ真剣で　　ごめん　ちょっと笑える
「でも、あの、そういうときは引っぱたいていいからよ」
「引っぱたいたら、止められる？」
「なんとか、なんとかすっから」
もうその顔が、なんとかできない顔だけど？
ダメだ、真剣過ぎて　笑っちゃう
「え？　なんで笑ってんの？」
可愛いから
「お腹が張ってるときと、出血してるときはダメ・・・でしょ？」
「うん、ぜってえ、ねーちゃんと赤ちゃんのこと守っから、ぜってえ守っから」
「だったら止めなくていいわよ」
「マジ？」
「うん、マジ」
嬉しそうな目が・・・　またあの目になって・・・

あ・・・

こいつ・・・　かなり・・・　溜まってたな・・・

位置は

アラームで・・・
目を開けたら　　え？　　カズオがいない
そのパターン？　　ああいうことしたら出ていくパターン？

ベッドルームのドア開けて・・・
リビングにはいない
キッチンの・・・　え？
なんでキッチンの床で寝てるの？
「カズオ」
「ん・・・あ・・・　あ、ねーちゃん、どした？」
「あんた、なんでここに寝てるの？」
「ねーちゃんが眠ってから、起こさねえように」
「じゃなくて！」
「へ？」
「あんたの寝る場所は、私の部屋！　　あのベッドルーム！　　私のベッド！」
「えっ」
「なに？　　イヤなの？」
「ね、ねーちゃん・・・　いいの？」
「あんたがイヤなら無理にとは言わないけど」
「エーーーーーッ？　　マジッ？」
「顔洗ってくる」
なんかもう、あいつは自分の立ち位置をどこに・・・　いいけど

「それじゃ、いってきます」
「いってらっしゃ～い」
なにニヤケてるのよ!?
なんかムカつく
「カズオ、ちょっと」
「え？　　どした？」
メッチャ濃厚な Kiss してやった
はい、腰砕けで　床にドンッ

「いってきま～す！」
ドアをバタンッ
26の女舐めるな　フッ
あ、リップ直さなきゃ。

なんかブラがキツイ。
妊娠すると胸が大きくなるのかな？
エ～、ワンピのシェイプが・・・　あれ？　お腹が大きくなるってことは・・・
今持っているワンピは着られない・・・
まさか・・・　マタニティドレスとか着なきゃいけないの？
やっだぁぁぁぁ
ていうか、社内、少なくとも課内の人たちには、いつか言わなきゃいけないわよね。
いつ？
まだいいわよ、お腹も大きくなってないし。
時期を見て言うとして、出産休暇取らなきゃいけないしね。
出産休暇は取るけど・・・　育児休暇必要？　私、育児しないと思うけど？
おそらく生まれたらカズオに丸投げ・・・
だって育児なんて私にできるわけないでしょ！
できないって言ったのに、カズオが生んで欲しいって言ったから！
あれ？
カズオの寝場所が私のベッドルームになったということは・・・
私とカズオの関係は・・・　なに？
同棲？　世間的にはそうなる？
同棲となったら・・・　それでもいちおうカズオの住民票は私のところに移して・・・
あれ？　あいつの住民票って・・・　あるの？
家がないからホームレスだったのよね。
どうすればいいんだ？
検索・・・
えっと、つまりは、家を借りて誰かが保証人になれば住民票を作れる・・・か。
あいつは家を借りる必要はないから、私の住所で私が保証人になればいい！
クリア！　わかんないけど
え？　ホームレスって住民票がないから生活保護が受けられないの？
それはおかしいでしょ、いちばん必要でしょ。
まあ、私が社会の歪に異を唱えてもしょうがないし、そんな余裕ないんだけど。
「北川さ～ん」
あ、大山
「今日も塩むすびですかぁ」
「ええ、あ、食べる？」
「いただきま～す」

カズオ、あんたのおにぎりのファンができたわよ。
「何なさってたんですかぁ？」
「ん・・・　ホームレスの住民票を・・」
あっ
「ホームレスの？」
「えっと、どうやらホームレスは住民票がないから生活保護が受けられないらしい」
「北川さん、社会のことにまで目を向けてるんですねぇ！」
「まあ、なんていうか、他人事じゃないっていうか・・・」
他人事じゃなくてまるまる私事なのよ
「私なんてぇ、自分のこともメチャクチャなのにぃ、北川さんすごいですぅ！」
いや、私の方がメチャクチャだと思う、確実にそう
「あれ？　北川さん、バスト大きくなってません？」
「あ、うん、そう・・・かな」
「何かサプリ飲んでるんですかぁ？」
「ううん、なんていうか、自然の・・・」
摂理？　わかんないけど
「え～、うらやましいですぅ、北川さん、もともとかっこいいバストなのに、さらにってぇ」
羨ましいなら変わって欲しいくらい・・・
マタニティドレス着てくれない？
「あ、そういえばぁ、吉田資料室長、結婚したそうですよぉ」
吉田のことなんかどーーーでもいい
「他のことはいい加減なのにぃ、扶養手続きだけはしっかりやりに来たって経理の子がぁ」
「扶養手続き？」
「奥さんが専業主婦だったり、お子さんができたときの、あの扶養手当ですよぉ」
扶養手当・・・
およそ縁のない言葉だったから、音として認識して生きてきた
扶養手当・・・
カズオがいるようになってからもべつに支出が増えたってこともないし、
むしろ、あいつがやり繰り上手だから支出が減ってるけど。
必要ないっちゃない・・・
でも、子どもが生まれたら？
今でも子ども一人や二人養ってはいけるけど・・・
教育資金・・・　どれくらいいかかるの？
子どもだけ扶養手当もらうってことは・・・　私はシングルマザー扱い？
子どもの父親一緒に住んでるけど？
なんかいろいろゴチャゴチャするぅぅぅ！
いちばん簡単なのは・・・
あいつの住民票を私の住所にして、ついでに結婚？

でも、あいつ、私と結婚したいかなあ？
私だったら私とは絶対結婚したくない！

なんか・・・
一人のときの方がいろいろ楽だったな・・・

あ、昼休憩終わっちゃう。
ブラ、どうするぅ？

ハンバーガー

「ねーちゃん！」
カズオがヒョコタン走ってきた。
「ごめん、遅くなって、ちょっと、必要なものがあって、帰りに・・・」
「よかったぁぁ」
多分、私がボヤッとしてるから事故に遭ったんじゃないかと心配していたのよね
どうせボヤッとしてますよっ
「ねーちゃん、どっかで具合悪くなっちまったんじゃねえかって」
あ、そっち？

トマトとシソの和風冷製パスタ風そうめん。
身体がリコピン欲していたのがわかるぅぅ
「カズオ、メッチャ美味しい！」
「マジ？」
そうめんで冷製パスタ風なんて、私には永遠に思いつけない発想。

あ、そうだ。
「あんた、住民票はある？」
カズオが斜め上見て・・・
「えっと、それがあっと、セーカツホゴっつうのが受けられるってやつ？」
よく知ってるわね、そりゃそうよね、切実に必要だったものね。
「そうよ、他にもいろいろな手続きに必要なの」
「でもよぉ、俺らみてぇのが作んのはむつかしいって、おっちゃん言ってた」
「おっちゃんて誰？」
「仲間の、あ、浮浪者の」
ああ、なるほど、なかなか知識のある人ね、そのおっちゃん
「でも俺、そういうのねえからって困ったことねえなぁ」
いや、困ったのどん底レベルだったよね、あんたホームレスだったよね？
「わかった、作ろう、あんたの住民票」
「へ？」
「私が手続きするから」
「でも、それってすげぇむつかしいって、おっちゃんが」
「おっちゃんは一旦忘れて」

「あ、うん」
「あんたの住民票をここの住所にするから」
「ここ？」
「私の部屋、あんたは私と住んでるわけだから」
「ねーちゃん、そんなむつかしいことやんねえでいいよ、おっちゃ、あ・・・」
そうよ、今おっちゃんの出番ではないのよ
「私が困るの、これからいろいろ手続きするのに必要だから」
「あ、うん」
あと、もうひとつあるんだけど・・・
「あのね」
「ン？」
「結婚・・・する？」
「ケッコン？」
「そう、結婚」
「誰が？」
誰がって、他に誰がいるのよ？
「私とあんた」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　エッ!?」
頭の中で処理するのに時間かかったのね
「イ、イヤならいいのよ、私だって私みたいな女とは、でも、子どものことを」
「ねーちゃん・・・　バカじゃねえの？」
ハ？
なにその本物のバカを見て恐れおののくみたいな顔？
「俺と結婚するって、なに考えてんだよ？」
ちょっと待って、私がチョー非常識みたいな言い方、なによっ？
「ねーちゃん、俺、仕事もねえし、住むとこもねえんだよ？」
なんで私、こんな説教されてるみたいな言い方されなきゃならないのよっ!?
「ねーちゃん、アッタマおっかしくなっちまってんじゃね？」
そこまで言うっ？　頭おかしいまで言うっ？
「つまり、あんたは私みたいな女と結婚するのはイヤだってことね？」
「え、そ・・・そんなんじゃ・・・ねえけど」
「私みたいな掃除・洗濯・料理ができない女はイヤってことでしょっ？」
「俺はねーちゃんにそんなことやって欲しいなんて思ったことねえよ！
　マジ、ひとっ欠片もねえよ！」
ひとっ欠片もって・・・　まあ、そうだろうけど、言い方どうなのよっ
「だったらなんで私と結婚したくないのよ？」
「ねーちゃんのことがイヤっつうことじゃねえよ、イヤっつうより・・・」
ハッキリ言えばいいでしょ！
「俺と結婚するっつうのが、なんつうか、おっかしいじゃん」
「どこがおかしいのよっ？」

「俺、稼げねえよ？　ねーちゃんのこと養ってけねえんだよ？」
「私はあんたに稼いで欲しいなんて思ったことない！　ひとっ欠片もねっ！」
こっちだって言ってやるわよっ　ひとっ欠片っ
「あんたが仕事も住むところもないのは、ここに連れてきたときから知ってるわよ！」
「そんじゃ・・・　なんで俺と結婚すんの？」
こいつは・・・
結婚してこいつに稼いでもらおうと私が思ってると、思ってるのっ!?
「あんたこそバカじゃないのっ？」
「そんなんわかってんじゃん、俺バカだってよ」
あんたのバカと私のバカの意味が違うっ
「夫に稼いで欲しいと思うなら、あんたと結婚しようなんて思わないわよ！
　私はホームレスの子どもを妊娠してるのよっ？　ホームレスの子を生むの！
　ホームレスに稼いで欲しいなんて思うバカがいるわけないでしょ！」
「あ・・・」
やっとわかったか！　バカじゃないの!?
「え？　それじゃ・・・　ねーちゃん、俺と結婚してくれんの？」
「そう言ってるでしょ！」
「エーーーーーーーッ？」
なに目えひん剥いて驚いてるのよっ？
「ねーちゃん・・・　俺・・・　怖くなってきた」
怖い？　私と結婚することが怖い？　私ってそんなに怖い？
「ねーちゃんは、俺にとっちゃ、なんつうか、ポスターん中のハンバーガーだからよ」
あああああ、またわけわかんないこと言い出した、前は北斗の拳だった
「ポスターの中のハンバーガーって・・・　なに？」
聞いても理解できる自信はないけどね
「仲間とよ」
「仲間？」
「あ、浮浪者の」
ああ、はい
「メッチャ腹減ってどっしようもねえときによ、なに食いてえって話しすんだよ」
はあ
「ラーメン 100 杯食いてえとかよ」
100 杯は・・・　死ぬわよ
「そんで、おめえは何食いてえって聞かれてよ、俺は地下道に貼ってあるポスターの、
　でっけえハンバーガー食いてえなあっつってよ」
んっと、着地点はどこなのかな？
「うめえんだろうなあっつってよ、でも、ぜってえ食えねえことはわかってんだよ」
「で？」
「だから、ねーちゃんは、ぜってえ食えねえけど食いてえなあっつうポスターん中の」
「あんた食ったよねっ？」

「へ？」
「食ったから、子どもできたよねっ？」
「あ！」
「どうする？　もう食べちゃったけどっ？」
「あ・・・　あの・・・　マジ？」
「マジってどういうことっ？　何に対してのマジっ？」
「あの、マジで・・・　俺と結婚・・・してくれんの？」
「だからっ、その話をずっとしてたんでしょ！」
あんたがポスターの中のハンバーガーとかわけわかんないこと言い出す前からっ
「マジで・・・　マジで・・・　マジ？」
「マジですっ Œ １００！」
「んで・・・　結婚したら・・・　俺、なにすればいいの？」
「今までどーーーり、掃除・洗濯・料理してくれればいいのっ」
「そんでいいの？　マジで？」
はいはいはい、マジマジマジッ
「私と結婚したいのしたくないの、どっち？」
「ねーちゃん」
なにその呆れたみたいな笑い顔？
「そんなん決まってんじゃん、してえに決まってんじゃん」
「決まってるなら早く言ってよ！」
「だって、ねーちゃんは俺にとっちゃポスターん中のハン」
「あんたは食った！　もう食った！」
「あ、うん」
「それじゃ、結婚するってことでいいのね？」
あれ？　なんか考え出した、なに？　今度はなに？　フライドチキン？
「あのさ・・・」
なになになに？
「ねーちゃんは・・・　なんで俺と結婚してくれんの？」
それは・・・
「あんたが私の理想の夫だから」
「・・・・・・・・・・エーーーーーーーッ？」
本気で言ったんだけど？
「ねーちゃんの理想、メッチャ低すぎんだろ、ヤベエよ！」
わかってないわね　フッ
「私くらいの女になるとね、一周まわって、あんたが理想になるのよ」
「え・・・　ど、どこ一周すりゃそうなんの？」
どこって・・・
「まあ・・・　宇宙？」
まったくわからないって顔してるけど、いいわよ、わからなくたって
え？　なに？　その上目遣い？

「なによ？」
「ねーちゃんが・・・」
私がなに？
「宇宙一周してくれてよかったなって」
うん、してないけどね、まあそれくらいの感覚よね
それくらいじゃないとホームレスと結婚したいなんて死んでも思わないわよ！
私はしたいけどね、ホームレスっていうか、こいつとね。

初めての夜

とにかく、住民票を作るにも婚姻届け出すにも戸籍謄本が必要なのね。
カズオの本籍ってどこ？
森下駅のトイレで捨てられてたって・・・　森下駅？
いやいやいや、駅が本籍はありえないわよ。
施設にいたって言ってたわよね？　そこ？
えっと、とにかく、カズオがいた施設に問い合わせれば・・・　わかるかな？
なんかもう、こういう役所関係のことってめんどくさい！
いっそ事実婚でよくない？
ダメダメダメ、子どものことやこれから先のこと考えたら・・・
えっと・・・
あ・・・　眠い・・・ちょっとだけ・・・ソファに・・・

「ねーちゃん」
ン・・・
「ねーちゃん」
あ・・・　カズオ・・・
「ちゃんとあっちで寝ねえとよ」
こいつがいなければ・・・
私は朝までソファで寝てる　いつもそうだったから　一人だったから
「どした？」
具合が悪くなっても　自分でなんとかしてた　一人だったから
「あっちに運ぼっか？」
運ぶ？　あ、超高速お姫様抱っこ？
「大丈夫、もう寝・・・」
あれ？
今夜から　カズオも私の部屋・・・だった
「あの、あんたも、一緒に、い、行く？」
「え？　あっ！」
あんたも今思い出したのね
「えっと、ここ片づけっから」
「そ、そう」

「お、終わったら、あの」
「わ、わかった、それじゃ、先に」
なんかわかんないけど、ベッドルームに走ってドアバタンッ
なんなのこの明治時代の初夜的ぎこちなさっ？
明治時代の初夜がどんなだったか知らないけど・・・
あ、そうだ
大きいサイズのブラ買ってきたのよ、これ以上大きくなったらマタニティコーナー？
チラッと見たけど、なんかいろいろな装備？　あれを買わなきゃいけないの？
まだいい、まだ考えなくていい。
あ、カズオが来るからこのブラたちを・・・
でも、どうせこのブラたち、カズオが洗うのよね？
だったらいっかぁ！
いやいやいや、いちおう初日でブラがドーーンはないでしょ。
クローゼットに入れておこう。

あ・・・　ゆ～っくりドアが開いた
「あのぉ」
カズオが顔だけ出して・・・
「えっと・・・　オジャマしや～す」
え？　なんで超軽量ひとりキャンプ用ベッドマットと毛布持ってきた？
私の方チラッと見て照れてるカンジでベッドの横の床に敷いてるけど？
私の部屋で寝るということを、単なる場所移動ととらえている？
いい、放っておこう、めんどくさい。
「消すわよ」
「うん、ねーちゃん、おやすみ」
「はい、おやすみっ」
パチッ
なんだろ？　まあいいけど。

ン・・・　あれ・・・　なんか・・・狭ま・・・　え？
カズオが私の隣で眠ってるんだけど？
しかも、私は真ん中で寝てたから端っこで・・・　いつ？
まだアラーム鳴ってないけど、もう朝だよね　いつ入ってきたの？
まあいいけど
カズオの寝顔を見るのって初めて
キッチンの床で寝てるのをチラッと見たことはあるけど、こんな至近距離は初めて
寝顔　可愛いな　メッチャ可愛いな
これからはずっとこの寝顔見られるの？

えぇぇぇ　メッチャしあわせぇぇぇ
こいつと結婚するのかぁ
あ　目を開けた
「あああああっ！」
って、マンガみたいに飛びのいて・・・
床にドッスーーンッ！
「ちょ、だ、大丈夫？」
「あ、う、うん　　あ！　　ご、ごめんなさい！」
「何が？」
「ね、ねーちゃんのベッドに、あの」
「いいわよ、私のベッドセミダブルだから二人寝られるわよ」
「え？」
「ほら」
壁際に寄ってスペース作ってやった
「マジ？」
「だって結婚するんだから」
あいつが「俺はとろけてます」って顔でベッドに入って私のこと抱きしめた
「いつ入ってきた、不法侵入者？」
「え・・・」
「白状しろ」
「ねーちゃんが・・・　眠ったなって思って、チロッと、チロッとだけって」
「そのまま眠っちゃった・・・のね？」
「うん」
カズオが少し腕を緩めて・・・
私の顔を見て・・・　あの目で・・・　そして・・・
こいつのくちびるは・・・もう・・・
こいつの・・・

ピピピピピピピッ

二人同時にビクッ
アラーム・・・

「えっと・・・」
「うん、うん、ねーちゃん起きる時間」
カズオがメッッッチャ頑張ってる真剣な顔が・・・　笑える
「私、着替えるから」
「うん、俺は、あの、うん」
急いで部屋から出ていった。

メイクして・・・　コーヒー飲みたいけど、炭酸ミネラルウォーターにレモン。
「ねーちゃん」
「なに？」
「なんでメイクすんの？」
ハ？　前もこんな会話したことあるわよね？
「ねーちゃん、スッピンの方がメチャ可愛いじゃん」
「カズオ、私のスッピンを可愛いと言ってくれるのは嬉しいけど、
　スッピンで会社に行ったら戦えないのよ」
「か、会社で、たたかう？」
「そうよ、女にとってはね、スッピンで外に出るのは裸で外を歩くようなものなの」
「マジ・・・か！」
「そうよ、まあ、人によるけど、私はねっ」
「そっか」
「なに？　私のメイクした顔は嫌い？」
「メイクした顔もすっげえきれいに決まってんじゃん」
やめて、せっかくメイクしたのにニヤケてとろけるから。

「それじゃ」
「いってらっしゃい」
「いってきます」
あれ？
いってきますの Kiss した方がいいかな？
振り向いて、あいつの顔見たら・・・
確実に期待している
やめておこう、リップ直すのめんどくさい。

ドアをバタンッ

私はあいつとお腹の子のために働いてきます！

覚悟が・・・

病院の待合室。
もちろんカズオもいるわよ、もちろん。
みーちゃんＴシャツ着てる、もはや病院用になってるみーちゃんＴシャツ。
「北川さん、内診しますので２番にお入りください」
「はい」
「ご主人はこちらでお待ちください」
カズオは私をチラッと見て照れ臭そうに頭掻いてる・・・けどっ
まだだから！

診察室、もちろんカズオも横にいる。
もはや子宮ごとカズオに預けてカズオだけ来ればいいのにって思うけどね。
「今は12週の終わりですね」
まだまだ先は長い・・・
「赤ちゃんもお母さんも問題はありませんね、順調です」
よかった
「あと３週ほどで安定期に入ります」
「安定期とは？」
「流産の確率が低くなる時期です」
流産・・・
この子は流産させられないっ
私の横で妊婦の私より真剣に先生の話を聞いているヤツのために！
「安定期に入ったら、両親学級があるので、参加されるといいと思いますよ」
「両親学級・・・って、何でしょうか？」
「妊娠中の過ごし方や陣痛のときの対処の仕方、赤ちゃんの沐浴の仕方などを学べます」
え・・・　めんどくさい
「立ち合い出産は望まれますか？」
立ち合い？
「うちは立ち合い出産ができますので、ご夫婦で相談して決めてください」
「立ち合いって、あの・・・　父親が立ち会う・・・あれ・・・ですか？」
「原則はそうですね、お母さんのお母さんが立ち会うこともありますが」
あれか！

TikTok で何回か流れてきた、夫が出産に立ち会って血を見て気絶しちゃうやつ！
看護師さんたちが大慌てだったわよ、出産中に迷惑過ぎる！　やらない！
「俺、立ち合いたいっす」
ハ？
おまえ・・・　勝手に発言するなよ！
「お父さんが立ち会いをご希望なら、両親学級はせひ参加なさってください」
「はい！」
いやいやいや、私の意見はっ？
目で必死にやめてって訴えてるのに・・・　こっち見ないっ！　見ろよ！
「あの、夫婦・・・で、相談してから決めます」
「俺、立ち合いてえよ」
あんたはっ　黙ってろっ！
「お父さんが立ち合う場合、見学という感覚では困ります」
そうよ！
「ビデオを撮るためなどという軽い気持ちではなく、共に出産しているという覚悟で」
「覚悟あります！」
先生の話を最後まで聞けっての！
ほらぁ、先生がちょっと戸惑ってるわよ！
「俺、覚悟あります！」
あんたが強い意志を先生に表明してもさあっ
「そうですか」
としか、先生も言えなくなっちゃってるじゃない！
「では、問題がなければ、4 週間後ということで」
「ありがとうございます失礼します」
さっさとこいつをここから出さなければならんっ

駅まで無言。
あいつが何考えてるのか知らないけどっ　私は怒ってるのよっ。
勝手にあんなこと言って！
私の意志は無視っ？　なにそれっ？
って怒ってるうちに駅に着いたけど。

カズオのチケット買って、無言で渡して、私は会社に向かう電車のホームへ
「ねーちゃん」
「なによ？」
「俺、ハンパな気持ちじゃねえから」
ハ？
「俺、マジで覚悟あっからよ」
だからなにっ？

「生むのは私よ！」
「俺、ねーちゃんのそばにいてえんだよ」
「そばにいられたって」
「ねーちゃんと一緒に生むくれえの覚悟してっからよ」
「だったら、あんたが生めばっ？」
覚悟覚悟って
「そんなに覚悟があるならあんたが生めばいいでしょ！」
私は・・・
「私にはまだそんな覚悟ないの！　怖いの！　すごく怖いの！」
あ・・・　ダメだ・・・　涙・・・
「会社行ってくる」
走ってホームに・・・

なによ!?
覚悟あるとか
そんな簡単に覚悟なんて言葉使わないでよ！
私には・・・

「ねーちゃん！」
ガシッと肩つかまれた
「な、なに？」
あいつが・・・　何か言いたそうな目で・・・優しい顔で・・・
「なによ？　会社行くんだから」
あいつが優しい目で・・・　私のこと見ていて・・・
「ねーちゃん」
今何言ったって聞きたくない
「もう行くから！」
あいつが・・・　優しい声で
「ねーちゃんさ、勘違いしてんだよ」
「ハ？」
「先生は、ねーちゃんに覚悟しろつったんじゃねえよ、俺に覚悟しろっつったんだよ」
あんたが覚悟したって、私は・・・
「前に先生言ってたじゃん、妊娠は命がけだって」
そんなこと・・・　覚えてない
「ねーちゃんは、もう覚悟してんだよ、すげえ覚悟してんだよ、命がけのよ」
「そこまで思ってないわよ！　だから、出産の覚悟が・・・　怖いのよ・・・」
「だから俺がいんじゃん」
「ハ？」
「ねーちゃん、俺をねーちゃんのダンナにしてくれんだろ？」
「え・・・　そうだけど・・・」

「そしたらよ、俺、ねーちゃんが怖えってときにそばにいれっじゃん」
え？
「ねーちゃんが怖えときによ、俺、ねーちゃんのことひとりにしたくねえからよ」
え・・・・　あ・・・やだ・・・
「ねーちゃんが怖えときは、俺、必ずそばにいる、いるからよ！」
「カズオ・・・」
こんなところで・・・だからあ・・・抱きしめたら・・・もっと・・・
「ねーちゃん」
「な・・・に・・・」
「俺のこと、ねーちゃんのダンナにしてくれるって・・・　ありがとなぁ」
やめてよぉぉ・・・　メイクがもう・・・　あ！
「みーちゃんＴシャツにメイク付いちゃったあ」
「落とせっから」
そうね、そうだった
「このまんまつけときねえなあ」
やだ、そんな・・・
「ちゃんと落とさないと、両親教室のときに困るでしょ」
「え？　あの、いいの？」
「ちゃんと覚えてよ！　私は・・・　ムリだから」
「うん、ぜってえ覚えっから！」
「あんたのせいでメイク落ちちゃったわよ！」
「メチャきれいだよ」
そ　んな　ストレートに
「そ、それじゃ、私は、稼いでくるから」
「うん」
「あんたと子どもを養う覚悟はあるのよ！」
「お願いしやっす！」

ああもうっ　好きだ！　　って思うのが悔しい！
あ、早く行かなきゃ！　あ、メイク！
もうっ　忙しい！

住民票

いろいろね、とにかくいろいろやったの、やってたのよ。
カズオがいた施設ともやり取りした、私がね、カズオは意味わかんないから。
カズオの本籍は、最初に預けられた乳児院の住所だった。
カズオは自分が乳児院にいたことも知らなかったけどね。
その住所の市役所でカズオの戸籍謄本をもらってきた。
それから、とにかく、いろいろ、あちこち、そういうことを扱っている団体とか、
相談やサポートしてくれる事務所とか、とにかく、ありとあらゆることをやって、
今日、9月1日、ようやく、やっと、カズオの住民票が作れたの！

今、区役所の中。
カズオが自分の住民票を渡されて、ジーーッと見ている。
やっと・・・
よかっ・・・た・・・

あ・・・　　え・・・　　どこ・・・
「ねーちゃん！」
カズオ・・・　えっと・・・　病院？
「先生！　ねーちゃんが！」
走っていっちゃった
私・・・どうしちゃったの？
あ、先生・・・
え・・・　いったい・・・
「脈も落ち着いてきましたし、もう心配はないでしょう」
「あの・・・」
なにがあった？
「過労による貧血を起こしたようですね」
過労？
「妊娠中ですから、あまり無理をなさらないように」
そんなに無理は・・・
「今晩は入院して様子を見ますが、このまま異常がなければ明日には退院できるでしょう」

あ！
「あの、赤ちゃんは？　赤ちゃんは大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ」
先生の穏やかな声で・・・　ホッとして・・・　涙・・・
「赤ちゃんのためにも、ご自分の身体のことをもっと優先してくださいね」
「は・・・い・・・」

過労？　そんなに働いた？　いつもどおりで
「ねーちゃん」
あ、カズオ
「俺・・・」
「そんな顔しなくてもいいわよ、ただの過労だって先生が」
「ただのじゃねえよ！　ねーちゃんぶっ倒れて意識なくてよ、俺・・・」
「あんたが運んでくれたの？」
「役所ん人が救急車呼んでくれて」
救急車乗ったのか・・・　一生縁がないと思ってた
「ねーちゃんの診察券見したら、ここに連れてきてくれたんだよ」
「ごめんね、心配かけて」
「ねーちゃん、こんなんなるまで・・・」
「泣かないでよ、死んだわけじゃないんだから」
あ！　会社！　午後から出社するって言っておいたから
「カズオ、私の携帯取って」
「な、なにすんの？」
「会社に連絡しなきゃ」
「ねーちゃん！」
え　なに？　なんでそんな怖い顔するの？
「こんなんなってんのによ！」
カズオがこんなに怒ってる顔・・・　初めて見る・・・
「でも、あの、連絡しないと、会社の人たちも心配するから・・・」
「やった！　連絡した！」
え？
「ねーちゃん、ぜってえ会社んこと心配すんだろなあって」
カズオがジャージパンツのポケットから・・・
なにこれ？　なんか汚ったない・・・　あれ？　私の名刺？
「カズオ、これって・・・」
「ねーちゃんが俺にいっちゃんはじめにくれたじゃん」
え・・・　あ！　指輪のとき？　あれを持ってたの？　ウソ！
「ここが番号なんだろうなって、でも、俺かけてもなんつったらいいんか、
　つか、ねーちゃんの携帯、よくわかんねえし、そんで、病院の人にかけてもらった」
そんなことまで・・・

「ねーちゃん、ごめんなぁ」
え？　なんであんたが謝るの？
「俺がこんなんだからよぉ」
こんな？
「ねーちゃん、ぶっ倒れるまで働かなきゃなんねくてよぉ」
いやいやいや、いつもどおりよ、残業もしてないし
「でもよ、ねーちゃん、俺、住民票あっからさ」
ああ、そうだった、やっと今日できたのよね
「セーカツホゴ受けられっから」
ハ？
「それによ、前ぇに職安行ったときによ」
職安て・・・　あ、ハローワーク？
「俺みてえな、なんつうの、あ、障害者！」
障害者・・・　カズオを障害者だと思ったことないけど・・・
「障害者雇ってくれっとこがいくつかあんだよ」
んっと・・・？
「そういうとこも、やっぱ住民票ねえと雇ってくんなくてよ」
そうなんだ・・・
「でもよ、俺、もう住民票あっからさ、雇ってもらえっかもしんねえじゃん」
えっと・・・　就職したいってこと？
「だからよ、もしも、ねーちゃんが働けなくなったらよ」
ハ？
「俺、セーカツホゴ受けても、えっと障害者雇ってくれっとこで働いたりよ、
　俺、なんとかすっから、ねーちゃんのこと、ぜってえ守っから」
え・・・
「ねーちゃんみてえには稼げねえけど、俺、ぜってえねーちゃん守っからさ」
あんたは・・・
「だから、ちっとは、なんつうか、えっと」
あんたは・・・
「俺、ねーちゃんのダンナになるんだからよ、ちっとは頼ってくれよ」
照れて頭掻いて・・・
「あんたは・・・　もうっ・・・」
なんかもう・・・　また泣かせるんだからぁぁ
「ねーちゃん？」
心配そうに私の手をにぎって・・・

住民票ができて　考えたのは　私を守ること
生活保護が受けられて　障害者雇用の会社に雇ってもらえるって
考えたのは　そうやってでも私を守ろうって　これで守れるって

「カズオ・・・」
「どした？」
カズオがそっと私のこと抱きしめて
「カズオは・・・　最高の・・・　最高に頼れる・・・　私のダンナ様」
「最高っつのは・・・　ちっと、なんつうか」
「カズオは・・・　私の理想の夫、本当に理想の人」
「だからよぉ、ねーちゃんの理想メッチャ低すぎだっつうの」
耳元でカズオが笑いながら言うけど・・・
「私の理想は宇宙一高いのよ！」
「ねーちゃん、宇宙まわりすぎだよ」
カズオがギュウッて
「ねーちゃん、もう・・・　俺がいんの、忘れないで」
「忘れるわけないでしょ・・・　カズオがいてくれなきゃ・・・」
ホッとできない
こんなにホッとして泣けないのよ

名字

退院しました。
もう大丈夫だって言ってもカズオがうるさいからさっきまでベッドで寝ていて、
今、ソファでゴロンとしてま～す。
ローテーブルの上には婚姻届けの用紙。
倒れる前にもらっておいたのよ、よかった。
そして、カズオの印鑑一揃い、実印・銀行印・認め印。
必要な書類も揃ってる。
カズオの住民票ですべて揃ったから、ホッとして気が抜けて倒れちゃったのかな？

本籍は・・・
ふつうは夫の本籍になるらしいけど、私はそれでもいいっちゃいいけど、
これから先、いちいちいろいろめんどくさいから、この部屋の住所にした。

名字・・・
森下・・・
森下美里
え？　なんか可愛くない？
北川美里より、美里がピッタリハマるんだけど？

「ねーちゃん、なにしてんの？」
仕事はしてませんから安心してください
「カズオ、これ、書かないと」
「これって、あの・・・　結婚・・・の？」
「そう、婚姻届け」
「これ出したら・・・　ねーちゃんと俺・・・　け、結婚？」
「そうよ、正式に夫婦です」
「マッ　ジッ　か！」
「やめる？」
なにその子犬がキュ～ンって訴える的な上目遣い？
「はいはい、書いて」
ン？　どうした？　用紙をジーーーッと見てるけど？
「ねーちゃん」

「なに？」
「これ・・・　何書いてんのか、ほっとんどわかんねえ」
あ、そういうことか。
「あんたはこの上の名前とこの下の名前だけ書けばいいから」
「うん、わ、わかった」
カズオがカズオなりに？ 丁寧に名前を書いてる

森下一男

最初に名前かかせたとき・・・
まさか婚姻届けにも名前書かせるとは思わなかったなあ。
思うわけないじゃない！

「ねーちゃん」
「なに？」
「結婚したらよ・・・　名字って・・・」
「あんたはそのまま、私が森下になるの」
「えっ？」
「えって、ふつうは夫の名字になるんだから」
「ねーちゃん、マジで・・・　いいの？」
「私は老舗の跡取り娘でも伝統芸能の跡継ぎでもなんでもないから」
あ　何言ってるかわかんないのか
「北川でなければならないってわけじゃないから」
「そんでもよぉ」
なに？
「俺の名字、駅の名前だよ？」
そこ？
「私は森下一男と結婚するから、私にとって森下はあんたの名字でしかないけど」
「マジッ？」
「マジだけど」
「なんか・・・　新発見つうか」
なになになに、またヘンな喩え出さないでよ！
「俺は駅ん名前だっつってイジメられてたからよ」
え？
「あんた、いじめられてたの？」
「うん、まあ施設の子っつうのもあんだけどよ」
「何されたの？」
「便所に頭突っ込まれたり、雨ん中スッパにされたり、教科書破かれたり？」
な　ん　だ　と？
「そんで、学校行けなくなっちまってよ」

そりゃ行きたくなくなるわよ
「中学もいちおう入ったんだけどよ、小学校１年から行ってねえから、
　何やってのんかぜんぜんわっかんなくてよ、3 日で行かなくなっちまった、へへ」
笑ってるけど・・・

だから読み書きできないのか、そうか、謎が解けた
今さらだけどね　結婚するって決めた後だから　どうでもいいんだけど
いやいやいや、どうでもいいはカズオに申し訳ないか
そうよね、そんなイジメを受けてたなんて・・・　笑って言ってたけど

「ねーちゃん」
「なに？」
「やっぱ俺の名字はやめた方がいんじゃねえかなあ」
「なぜ？」
「やっぱさぁ、なんつうか」
「私ね、つくづく思うんだけど」
本気で思うんだけど
「あんたが捨てられたのが森下駅でよかった」
「ハ？」
「東京駅だったら、ちょっと、東京美里はさすがにイヤよ、あと、天王洲アイル？」
「ねーちゃんは・・・」
なにその呆れたみたいな顔で？
「メチャ・・・　ウケる」
笑ってるけど？
「カズオ」
「ン？」
「私、森下美里」
ドキッとしたでしょ、今絶対したよね？
「可愛くない？　　森下美里、可愛いでしょ？」
「ねーちゃんはよぉ！」
私に抱きついて
「なんでも可愛いよぉぉぉぉ！」
デレッデレ
森下で決まりだな。

次は・・・　保証人二人。
私の頭の中に浮かぶのは・・・　二人だけ。

保証人

「もう大丈夫なのか？」
ミーティングルームに藤木部長と二人きり
「はい、ご心配おかけしました」
「あまり無理するなよ」
「はい、気をつけます」
「で、俺に頼みたいことって？」
「婚姻届けの保証人になっていただきたいんです」
藤木部長の眉がちょっと驚いたように上がった。
「結婚するのか」
「はい」
「そうか、おめでとう」
「ありがとうございます」
「俺でよければ喜んで保証人になるよ」
「ありがとうございます！」
藤木部長に婚姻届けを渡した。
藤木さんの目が・・・　カズオの欄を見て・・・　生年月日で止まった
ン？ って目になって・・・　えっ？ って目になって・・・
「ご主人になる方は・・・」
「20 歳です」
ビックリした目でゆっくり顔をあげて私を見て・・・
「そうか」
と、また婚姻届けに目を・・・
「ご主人になる方の・・・」
「そこには無職と書いていますが、専業主夫です」
「専業主婦？」
「掃除・洗濯・料理、全部やってもらっています、職業訓練受けているのでプロ並みです」
「おまえは・・・」
おまえ？　藤木さんにおまえって言われたことないけど？
なに？　その驚いた顔？　初めて見るけど？
「よくもまあ・・・」
なに？　なになになに？
「ピッタリな男を見つけたなあ！」

「あ、は、はい」
「正直、君が結婚するのには不安があった」
ハ？
「共働きで、果たして君が・・・」
何が言いたいかは、よーーーくわかってますっ
「立ち入った話だが・・・　どこで出会ったんだ？」
「この駅の地下道です」
「なるほど、たまたま出会ったということか」
「ホームレスでした」
「・・・・　ン？」
「ホームレスを私の部屋に連れてきちゃったら、理想の夫だったんです」
え？　あの藤木さんの脳みそがストップしている・・・！
「へえ」
理解していないのに「へえ」って言う藤木さんを初めて見た！
「まあ、とにかく、帰りまでいいか？」
「はい、お願いします」
「それじゃ」
藤木さんがミーティングルームのドアを開けて・・・　振り返った
「おまえ・・・」
え？　また、おまえ？
「もう一人の保証人は、あいつか？」
「はい」
藤木さんが笑い出したけどぉお？
「おまえの人材発掘の才能には、俺もかなわないよ」
ハ？　どういうこと？

「つまりぃ、たとえてみればぁ」
大山には事の次第を全部話したわよ、藤木さんとのことはバッサリ省いたけど。
「北川さんがぁ酔っぱらってぇ、勢いで連れてきちゃった野良のワンちゃんがいてぇ、
　あんまり汚いから洗ってあげてぇ」
私は洗ってないけどね、絶対あれは触りたくない状態だったからね
「ごはん食べさせてあげてぇ」
私の方が食べさせてもらってるけどね
「そうやってるうちにぃ、可愛くなっちゃってぇ、自分のワンちゃんにしたってことですね」
そうね、ものすごく簡潔でわかりやすいっちゃわかりやすい
「すご～い！　運命の出会いですね！」
「そう・・・なの？」

「ワンちゃんとの出会いって運命ですから！」
ワンちゃんではないのよ、人間よ、言ったよね？
「そのワンちゃん、じゃなくて、ホームレスさんは、今はお仕事は？」
「専業主夫」
「エーーーッ！　北川さんにピッタリじゃないですかぁ！」
「そ、そう？」
「そうですよぉ！」
藤木さんも大山も同じことを言うなら・・・　やっぱりそうなのね
私がいちばんそう思ってるけどね
「私、北川さんがぁ、会社のひとつやふたつ作っちゃうイメージはできるんです」
どうすればそんなイメージができる？
「でもぉ、ごめんなさい、北川さんが家事をしている姿が全然想像できなくてぇ」
でしょうね　想像できたら逆にビックリよ
「北川さんて、やっぱりすごいです！　この世のあらゆるジャンル？
　そういうの、ま～ったく無視して、理想の男性を見つけるなんて！」
えっと、褒めてるのかな？
「そのホームレスさんてぇ」
「あ、カズオね、カズオ」
「あ、カズオさんて、ひとつも文句言わずに家事をやってくれるんですかぁ？」
「喜んでやってる」
「えぇぇぇ！　羨ましすぎますぅ、私のカレシなんて文句ばっかりですよぉ」
まあ、ふつうは、そうなのかもね　ふつうがわからなくなってるけど
「料理も作ってくれるんですかぁ？」
「そうね、ほら、大山が気に入ってるおにぎり、あれは・・・彼が」
「エーーーーーッ？　あの匠の技をっ？」
いつから匠の技という名称に？
「北川さん・・・　ガラクタ市で国宝見つけたってことじゃないですかあ！」
たとえが・・・　ピッタリ過ぎるけど、ガラクタ市って、まあ確かにそうね
「北川さんの能力って怖いくらいですぅぅ！」
どんな能力よ？
「あの、それでね、もうひとつ、大山には先に言っておきたいことがあるの」
「はい」
「私・・・　妊娠してるのよ」
「ハァァァァ、よかったぁぁぁぁ！」
え？
「私、北川さんがコーヒー飲めなくなってぇ、炭酸ミネラルウォーター飲むようになって、
　あれ？ って思ったんですぅ、私、おねえちゃんが子ども二人生んでるのでぇ」
なんと鋭い！
「最近はお腹が少し膨らんでいらしてぇ」
そ、そうなのよ、ハイウェストのスカートにしてごまかしてるけど

「もしかしたら、北川さん、ご自分が妊娠してるのに気づいてないんじゃないかって」
ハァアアアア？
「おしえていいものかどうか悩んでたんですぅぅ」
「私が・・・　自分が妊娠してるのを知らなかったと思っていた・・・のね？」
「はい、でも、気づいていらしてよかったですぅぅぅ！」
まあ・・・　喜んでくれているから・・・　スルーでいいか
「それじゃ、保証人になってくれる？」
「もう・・・　嬉しすぎですぅぅ」
あ　涙流してるし
「それじゃ、よろしく」
「はい！」
「あ、もうひとつ」
「はい？」
「大山、社内の総合職の試験受けてみる気はない？」
「わっ私がですかぁぁっ？」
「イヤならいいのよ、強制するつもりはないの、でもね、私は将来的に、
　大山に私の直属で中枢で一緒に働いて欲しいと思ってるの」
「北川さん・・・」
「ゆっくりでいいから、考えてみて」
「考えることなんかないですぅ！　　がんばりますっ！」
「本当？」
「私、北川さんの傍で働くのが楽しいんです！　　そばにいたいです！」
「大山～、ありがとう！」
二人で手を取り合っちゃった

えっと、これで、あとは届けを出すだけね。

入籍はいつ？

さて・・・　婚姻届け
いつ出す？
今夜でもいいんだけどね、いつでもいいんだけどね。
婚姻届けを出した日が結婚記念日ってことになるの？
記念日とかどーーーでもいんだけど。
どうせ忘れちゃうし。
カズオはどうしたいのかな？
どうせ「ねーちゃんの好きにしていいよ」って言うわよね、でも聞いてみる？
「カズオ、婚姻届け、いつ出したい？」
「俺は、ねーちゃんが出してえときでいいよ」
ほら！
明日、会社に行く前に出してきちゃう？
「ねーちゃん」
「なに？」
「ねーちゃんは、なんつうか、け、結婚式とか、してえって思ってんの？」
「ないないない、全然ない」
「マジで？」
「あんなの見世物になるだけでしょ？　もしくは自己満？　招待される方も迷惑よ」
「そっか」
「あんなことに何百万も使うくらいなら、グレードアップした新婚旅行とか、
　新しい家電買うとか、将来の貯蓄にまわすとか、その方が有益よ」
「そっか」
え？　まさか、こいつ・・・　結婚式したいの？　20歳だからそういうの夢見てる？
「カズオは・・・　結婚式したいの？」
「俺は・・・」
私がさんざんけなした後じゃやりたいとは言いにくいか
「もし、俺に金があったら・・・」
やりたいの？
「ねーちゃんがウェデングドレス着てんの見てえなって」
えっ？
私のウェディングドレス姿が見たい？
「本気で言ってる？」

「マジだけど、俺にはそんな金ねえしよ」
「私よ？　私がウェディングドレス着るのよ？　本気で見たいと思う？」
「え・・・　マ、マジだけど、そんでも俺には金ねえからよ」
私のウェディングドレス姿を見たいなんて、こいつ・・・　変わってる・・・
私は想像すらしたことないけどね、およそ似合わないでしょ、想像もできないけど
「ねーちゃん、俺は、ただ、見てえなって思っただけだからよ」
思ったんだ・・・　見たいって・・・
どうする？
こいつにとっては、まあ私もだけど、一生に一度のことだしねえ・・・
でも、結婚式は・・・　絶対イヤだな・・・　ウェディングドレスだけって・・・
あ！　写真？　レンタルで借りて写真撮る？
「カズオ、写真撮ろうか」
「写真？」
「レンタルでドレス借りて写真撮るの」
「マジ？　俺、ねーちゃんのウェディングドレス着てんの見れんの？」
「私だけじゃないわよ、あんたもよ」
「えっ？　俺もウェディングドレス着んの？」
「違うわよ、あんたは花婿の恰好して写真撮れば・・・」
そうよ！
「この子にも見せられるでしょ？」
「あ？　・・・・　あ！　そっか！」
「あなたのパパとママが結婚したときの写真よって」
カズオが感動した顔してるけど、どんな想像で感動してるのかわかんないけど
「でもよ・・・」
なに？　やっぱり想像したら見たくなくなった？　それはそれでいいのよ
「金かかっだろ？　俺は金ねえしよ」
「あんたにお金のことなんかひとっ欠片も期待してないって言ったでしょ！」
気に入ってるのよ、ひとっ欠片　フッ
「それにね、写真撮るだけなら、結婚式の・・・　おそらく１億分の１しかかからないし」
「いいの？」
「いいわよ」
「マジかよぉ！　俺、ねーちゃんのウェディングドレス着てんの見れんのかよぉぉ！」
そんなに嬉しい？
メッチャ期待外れになると思うけど、ごめん、先に謝っておく

えっと、こういうことは・・・　あいつだ！

「絶対そうなると思った」
シンシン・・・　どうしてこいつは FaceTime 使いたがるかなあっ

「どこのレンタル衣装屋がいいか教えてよ」
「そういうの全部ワタシにまかせてくれたらヘアメイク代だけにしてあげる」
「本当？」
「ワタシそういうの大好きだから！」
あんた乙女だもんね
「ワタシからのウェディングプレゼントよ」
「シンシン、あんたにも人の心があったのね」
「あんたよりは 1mm は人間に近いわよっ」
「できれば土日がいいのよ」
「土日って！　ワタシの稼ぎどきよ？」
「だからヘアメイクには行くからいいじゃない」
「そういうことじゃないわよ！　えっとね・・・　13 日の土曜日は？」
結局いいんじゃない、土曜日でも
「あら？　ミサトッチ！　9 月 13 日って、あんたの誕生日じゃない！」
あ・・・　すっかり忘れてた
え？　てことは・・・
「カズオの誕生日でもあるのよ」
「なにそれぇぇぇ？　その日以外考えられないってことじゃない！」
まあ・・・　そっか
「ついでに入籍もその日にすれば？」
ついでにって、入籍の方がメインだっつうの
「どうせあんたのことだから、記念日なんて忘れちゃうでしょ？」
私のこと知り過ぎてるオカマって・・・　憎い
「フィッテングしなきゃいけないから、次の土曜日に来て」
「フィッテング？　レンタルするだけでいいのよ」
「今はレンタルでもフィッテングするのよ！」
そうなの？
「しかも、あんた、カエルみたいに腹が膨らんでるんでしょ！」
言い方っ！　まだそこまでじゃないし！
「もちろんカズッチも連れてきてね」
カズッチ・・・　いつからあんたの中でカズオがカズッチになった？
「あと写真館か写真撮ってくれる人知らない？」
「だからあっ、そういうの全部ワタシにまかせてって言ってるの！」
「はいはい」
花嫁の母みたいに張り切ってんなあ

FaceTime OFF

「カズオ、入籍は 13 日、写真も 13 日、シンシンが決めたから」
「お、おう」

なんでシンシンが決めるのよ？

翌日、私は課内の人たちに、13 日に入籍すること、来年の 2 月に出産することを報告。
あのね・・・　みんな、なんと～く私の妊娠には気づいてたみたい。
「もしかして？」くらいだったらしいけど。
だったら言って！　必死に隠そうとしなくて済んだわよ！
まあ・・・　言えないわよね。

お昼はカズオのおにぎり。
最近ちょっと食欲が出てきたから、ミニミニなおかずもついてるの。
「赤ちゃんの分まで食わねえとよ」って。
「北川さ～ん！」
「大山、食べる？」
「匠の技！　いただきま～す！」
「おかずもいいわよ」
「えっ？　この肉団子、生姜が効いてて美味しい！」
すごいわよねえ、ゆうべのハンバーグ作るときに取り分けて肉団子。
私は晩ごはんの残りを詰めてくれればいいって言ったんだけど、
「働いてるねーちゃんに残り物なんて食わせらんねえ」って。
まあ、カズオの男気？
駅ビルのガレットが好きだった自分が遠くに感じる。
あ！　そろそろカズオの秋物買わなきゃ、あそこの量販店で。

9 月 6 日土曜日　フィッテングの日。
シンシンが指定したレンタルウェディングドレスの店でシンシンと待ち合わせ。
カズオと私は別々の部屋でフィッティングしたから、
お互いにどんな服を着るのか知らない、知ってるのはシンシンだけ。
って、なにこれ？

入籍・撮影

9 月 13 日　土曜日。
シンシンに「10 時には店に来てちょうだい！」って言われてるから、
朝イチでカズオと二人で区役所に行って・・・
「受理しました、おめでとうございます」
え・・・　受理・・・
結婚・・・した・・・
思わずカズオの顔見たら、カズオも私を見ていて、
なんか照れ臭くなって目をそらしちゃった。
区役所の玄関出て・・・
カズオがギュッて私のこと抱きしめた。
「ねーちゃんと結婚した」
「うん」
「ねーちゃんと・・・」
「森下一男の妻です」
って言ったら、カズオが私の顔を見て
「マジかよぉぉぉおお！　エーーーーーッ！　マジかよぉぉおお！」
放っておいたら永遠に続きそうだったから、
「ほら、行くわよ」
ってカズオを手を引っ張った。
私だって、メチャクチャ嬉しいけど・・・
あんたみたいに遠吠えみたいな表現できないのよ、ていうか、やりたくないし。

「ミサトッチ～！　カズッチ～！　おめでとう！」
朝 10 時にシンシンはキツイな。
「カズッチから始めるから、ミサトッチはあっちの部屋に入ってて」
「なんでよ、見たいわよ」
「ダ・メ！」
その迫力ある顔近づけないでよ、わかったわよ。

シンシンの個室。
服はハデッハデなんだけど、美的感覚は合うからホッとする。

ああ・・・眠い・・・　ソファに・・・

「ミサトッチ！」
え？
「なに寝てんのよ！　あんたの番よ！」
はいはいはい
あれ？
「カズオは？」
「先に運んだわよ」
運んだ？　どこに？　写真館？　まあいいけど

鏡に映ってる私
サイドにねじりが入って後ろの下の方でまとめてあるから、もんのすごく品がある！
「あんた、プリンセスよりヴィランズだから縦ロールはやめておいいたわよ」
縦ロールにしたらマジで殴ったわよ、シンシン
シンシンが選んだヘッドドレスはちょうど後ろのシニョンに刺して広がるようになっている。
「あんたがティアラなんてつけたら魔界の女王よ」
ティアラは絶対イヤだったからいいのよ
シンシンが選んだドレスは、V字のハイウェストで下はタイトなひざ丈で、
ほんの少しだけ透けてる長いドレープで覆われて、重たく見えなくてメッチャ品がある。
「あんたがフリフリのドレス着たら仮装大」
「いちいちうるさいなあっ！　照れなくてもいいわよ！　あんたのチョイス最高よ！」
「あっそ」
ツンデレオカマ！

えっとね・・・
なにこのリムジン？
そして、なんで私とシンシン二人きりなの？
「シンシン、あんた、店はいいの？」
「今日は臨時休業よ！　うちの店のサイト見なさいよ！」
そこまでする？
そして、この車はどこに向かっているの？

かなり高台に来たけど・・・　なにこの古いチャペルみたいな廃墟？
え？　外に・・・　なにあの機材？　そして何人もの人？
「シンシン、なんなのあれ？」
「ミサトッチ！　ほらほら、来るわよ！」
「何が？」
「王子様」

ハ？
白い大きなバンが止まって・・・
中から・・・
え？　えっ？　あれは・・・　だれっ？
前髪とサイドが後ろに流れて・・・
白いスタンドネックのシャツにホワイトジーンズに濃紺のハーフロング丈のジャケット・・・
王子様・・・
「あんたの好みは無視したけど、あんたの好みでしょ」
悔しいけど・・・　そうね・・・
なんていうか、抜け感があざといくらいパーフェクト！
「あんたの番よ！」
え・・・
車のドアが開いて・・・
ローヒールのパンプスで・・・
私の方を見たカズオが・・・　え？　なんでよろけた？　ヘン？　なに？
悪いけど、これが私の精一杯だと思う、申し訳ないけど
なんで口ポカン？　あんたのイメージのウェディングドレス姿と違う？　違うよね
「お・・・」
おかしいの「お」？
「お・・・お・・・」
「なに？」
「お姫様・・・」
ハァァアア？
シンシン、何か飲ませた？　一服盛った？　カズオがヘンなこと言ってるわよ！
「カズオ？」
「え、あ、え・・・」
「大丈夫？」
「あ・・・」
え？　なんで泣きそうになってるの？　シンシンに何かされた？
「メッチャ・・・　きれい・・・」
半泣きで言う？
さっきの王子様感はどうした？　てか、今も感はあるからシャキッとしなさいよ！
「カズオだってかっこいいわよ」
「ハァ？　俺ぇぇ？　俺、自分が何着てっかわかんねえ」
カズオだ！　さすがカズオだ！
「ねーちゃん、なんで笑ってんの？」
「だってぇ、カズオなんだもん」
「俺、カズオだよ？」
「うん、そうなのよ、カズオなのよ」

カズオなの

カメラに向かうと、
「やっだあ！　二人とも凶悪犯の写真みたいな顔よ！」
とか言われて、適当にその辺散歩しろって言われちゃった。

なんだろ、なんか照れ臭くて、お互いにチラッと見ては目をそらして・・・

「森下夫妻！」
え？　あ、そうか、そうだ
「次行くわよ！」
「次？」
「早くこっちのリモに乗って！」
次ってどこよ？
ていうか、この機材とこの人たちなんなのよ？

ここは・・・
山下町の地下道の入り口・・・
「ここで出会ったんでしょ」
なぜシンシンが知っているっ？
まさか？
カズオを見たら・・・　あ・・・って顔してる、おまえか！
「あの、この前、シンシンさんが・・・」
なるほど、私は絶対に口を割らないってわかっている
シンシンに問い詰められたらどんな有能なスパイでも口を割る　私以外はね
ましてカズオは・・・
「いいわよ、ここで出会ったんだから」
カズオがホッとしたみたいな顔になった。
「さあ、お色直しよ！」
え？　お色直しのドレスなんて・・・
あれ？　シンシンがカズオのジャケット脱がせて、
シャツのボタン胸元上くらいいまで開けて、
ライトブルーのダメージジージャン着せて・・・
あ！　髪の毛クシャクシャって・・・
「ミサトッチ、あんた好みにしたわよ」
そうね・・・　なんかカズオっぽくなった
ていうか・・・　シンシン、天才よ、あんた！
「次はミサトッチよ！」
え？ と思う間にヘッドドレス取られてシニョンも取られて、

カズオと同じライトブルーのダメージジージャン着せられて、
スカート部分のドレープはがされた！
「ちょっと！　お腹見えちゃうわよ！」
「ミサトッチ！　妊娠はね、女しかできないのよ！」
あんたはできるのなら妊娠したいのね、絶対ヤメテ　キモい
「堂々とそのカエルみたいに膨らんだ腹見せなさい！」
まだそこまで出てないわよ！
「さあ！　下りるわよ！」
どうでもいいけど、この機材担いだ人たちはなんなのよ？

いつもの地下道が、なんだか今は違って見える。
「おい！　カズじゃねえのか？」
え？　誰？
「あ！　おっちゃん！」
カズオが駆け寄ったのは・・・　ホームレス軍団の中、4～5 人だけど。
「なんだおめえ、すっかり見違えちまってよ」
「俺よ、結婚したんだよ」
「おめえ、ホラ吹いてんじゃねえよ！」
「俺も信じらんねえんだけどよ、マジでよ結婚してもらってよ」
カズオはホワイトジーンズで地べたに座って・・・
なんだろう　こいつは・・・
どんな恰好してても どんなときも・・・　カズオだなあ
あ！　そうだ！
「シンシン、頼みがあるの」
「えぇぇっ！　ワタシ、あんたの使いっ走りじゃないわよ！　私のギャラ高いのよ！」
って言いながら走っていった。

シンシンが両手に大きな紙袋抱えて戻ってきた。
「皆さ～ん！　これはカズッチからの引き出物で～す！」
そう言って、カズオの “仲間” たちに渡した。
カズオがビックリした顔して私を見た。
そうよ
「ねーちゃん、あれ・・・」
「ポスターの中のハンバーガー」
カズオが笑って私を見ている
「あんたはもう食っちゃったからあげないわよ」
「俺はもう食っちまった、メッチャ・・・」
え？　なんで泣いてるの？
「ねーちゃん・・・　ありがとなぁ・・・　みんなによぉ・・・」
「カズオの仲間なら、妻の私がもてなすのが務めです」

「ねーちゃんはよぉ！」
「好き？」
「メッチャ好きに決まってんじゃん！」
ギュウッて・・・

最後にカズオの仲間たちと記念撮影。
なんだか・・・　実質的で気に入ったわ。
シンシンがウルウルしてるのよ。
「シンシン、悔しいけど、あんたすごいわよ！」
「あたりまえでしょ！　　ワタシの全精力注いでやったわよ、ヴィランズの女王様！」
ツンデレオカマ！

誕生日のプレゼント

「俺、晩メシの材料買ってくっから、ねーちゃん少し寝てな」
日常に一瞬にして戻るってカンジでホッとする。

家に帰ってきたのが５時。
朝から５時まで非日常だったから疲れたぁぁ、楽しかったけど。
でもね、まだ終わりじゃないのよ。

今日はカズオの誕生日・・・
まあ、私の誕生日でもあるけど、私は誕生日とかどうでもいいの。
誕生日のお祝い？　特にサプライズ？　あれは勘弁して欲しい。
さすがに社会人になってからはないけど、大学時代は地獄だったわ。
あれって、わかるわよ、やるなあ、やるんだなあって。
二人くらいの友だちに「食事に行かない？」って誘われると、やるね！ って。
そして、二人に連れられてドアの前・・・
ああ・・・　この中にいっぱいいるんだなあ、ここを開けたら・・・
「ハッピーバースデー！」って言われるんだよねえって思いながらドアを開けて、
はい、そのとおり！ になって、私、うまく反応できないのよ。
心の中では「帰りたい」しか思ってないから。

あと、プレゼント。
気持ちはありがたい、ありがたいけど、反応に困るのよ。
まったく趣味じゃないアクセとかもらってもね、どうする？
逆に私にクロムハーツを選んだ理由を聞きたい、フリルのついたカチューシャ？
「わあ！　素敵！」って言える？　言える人は言えるんでしょうけど私は言えなかった。
コスメもね、これ最高だからってもらったオイルは以前ひどい湿疹できたやつって言える？
「私とおそろいのチーク」って嬉しそうに言われても、肌の色タイプ違うよね？ みたいな。
わかってるのよ、プレゼントの贈りがいのないヤツよ、私は。
いっそ、トイレットペーパーとかね、ティッシュの方がずっとありがたい。
私は欲しいものは自分で買うから！

私のことはいい、カズオよ。
悩んだ悩んだプレゼント。
ちょっといい服を買ったところで「怖くて着れない」って言うわよ。
量販店の服となったら、プレゼントじゃなくて必需品の支給よ。
男性用アクセなんかすると思う？　するわけないわよ！
結婚指輪までいかなくてもね、ペアリング買おうかなあってチラッと思ったの。
でもね、私が「これ絶対ステキ！」っていうのは、あいつが「怖くてつけられない」よ。
物欲が無のヤツへのプレゼントってどうすればいい？　無よ？

あ・・・　急激に・・・　眠く・・・

「ねーちゃん」
え・・・
あ、眠っちゃってた
「晩メシできたけど食える？」
「うん、お腹空いて吐きそう、あ、吐かないけど」
なんだかんだでほとんど何も食べてなかったからね

おお！　今日はオムライス！
お久しぶり、カズオの絶品オムライス！
「ねーちゃんの誕生日だから」
え？　あ！　前に私が言ってたこと
小さい頃誕生日にオムライス作ってもらったって・・・　憶えてたの？
「カズオォォ」
「ねーちゃんの誕生日にはぜってえこれだなって」
「ありがとう、嬉しすぎるぅぅぅ」
え？　ていうか、カズオの誕生日でもあるんだけど・・・
私の手料理は・・・　期待してないわよね、無理だってわかってるわよね。
ひとっ欠片もね、はい、そうよね。
「ああもう！　美味しすぎるぅぅぅ！」
「マジ？」
メチャ嬉しそうな顔しちゃって
あ・・・　そういえば・・・　こいつ・・・　そうだった！
「あんたさ」
そうよ、こんなときにこんなこと言うのなんだけど
「出ていった日に、冷蔵庫にオムライス入れていったわよね」
「あ？　・・・・・　あっ！」
「私、捨てたからね」
「うん・・・」

「あんな冷たくなったオムライスなんて食べたくないの」
「うん・・・」
「私は、カズオが作ってくれたオムライスをカズオの傍で食べたいの」
スプーンで一口すくって
「こうやってね！」
パクッて
「わかった？」
「うん」
カズオがちょっと照れたように笑った。

「あの・・・　ねーちゃん」
「なに？」
「あのさ、前にみーちゃんのベッドとか売ったときによ」
みーちゃんのベッド？　ああ！　おばちゃんに買い叩かれたやつ！
「ねーちゃん、その金は俺の金だっつってくれたろ？」
「私の中ではあのときにはすでに存在してなかったし」
「ねーちゃんが買ったから、ほんとはねーちゃんの金なんだけど」
「あれはゴミになるものを売ったあんたの儲けって言ったでしょ」
「うん、だからよ、なんつうか、これは}
カズオが白い小さな袋をテーブルの上に置いた。
「まあいちおう、俺の金で買った、ねーちゃんへの誕生プレゼント」
私のために・・・　自分のお金使ったの？　ていうか、今まで使わなかったの？
白い袋の中からチラッと見えるのは・・・　お守り？
「この下の道ちょっと行ったとこに神社があってよ。
　俺はそういうの信じたことねえっつうか、よくわかんねえっつうか。
　そんでも、ねーちゃんに赤ちゃんできてから、たまに行って、
　つっても、金払わねえで頭下げてるだけなんだけどよ」
そんなことをしてくれたの？
「これはちゃんと買ってきたから」
安産祈願？　おそらくそうね。
袋から・・・　水色の・・・　え？
「カズオ・・・　これ・・・　交通安全祈願・・・なんだけど？」
「うん」
えっと・・・　なぜ？　ここは安産祈願じゃないの？
「出産んときはよ、俺、そばにいれっじゃん、ぜってえ守っからさ。
　でもよ、ねーちゃんが会社行ってるときはよ、俺、そばにいれねえじゃん？
　そこはもう神さんに頼むきゃねえなあって」
こいつは・・・
「ねーちゃんボヤッとしてっからよ、俺、マジ心配でよ」
なんなのよ・・・　私のこと・・・

「俺、ちゃんと聞いたからよ、これ売ってた着物着た人によ、
　これ、ぜってえマジで効くんかっつってよ、ぜってえ効くっつうからよ」
そりゃそう言うだろうけど・・・　聞いたんだ・・・
「だから、俺がそばにいれねえときのためっつうか」
なんなのよ・・・
こいつ・・・　私のこと守ることしか考えてない
「女の人には赤かピンクだよって言われたんだけどよ、
　ねーちゃん、水色が好きじゃん？　　ブラも・・・　あっ」
そうよ・・・　ブラもパンティも水色か白よ　あんたが洗ってるから知ってるわよね
私の好きな色まで・・・
ヤバイ・・・　こんなプレゼント・・・
私のことを守ることしか考えてないあんたの・・・
「嬉しい・・・」
あ・・・　涙・・・
「マジ？」
私が泣くとすぐに抱きしめるんだからぁぁ
「カズオ、ありがとう」
顔をあげたら
「うん」
こいつは・・・　私がプレセントもらって喜ぶことすら期待もしてない
ただ　私を守りたいだけなのね
「私からもカズオにプレゼントがあるの」
「お、俺に？」

テーブルの上に置いた携帯を　カズオが不安そうな顔で見ている。
「ねーちゃん・・・　これって・・・」
「あんたの携帯」
「ね、ねーちゃん、俺・・・　ぜってえ使えねえよ」
「使わなくていいの」
「あ？」
「見てて」
私は自分の携帯からカズオの携帯に電話した。
「おおおおお！　　鳴ってっけど！　　森下美里って出てっけど！」
「そこの緑の電話のマークを押してみて」
「えっと・・・　これ？」
「そうよ」
カズオがこわごわ押して・・・
「もしもし、カズオ？」
「え？　　あ、ど、どうすりゃ・・・」
「耳にあてればいいのよ」

「あ、うん」
私はヒソヒソ声で・・・
「カズオ、美里です」
「うぉぉおおお！　ねーちゃんだ！」
「切るときはそこの赤い電話の絵を押せばいいの」
「ねーちゃんからのは切りたくねえなあ」
「今は教えてるだけだから押して！」
「あ、うん」
ピッ
「これで、私が遅くなるときにカズオに電話できるでしょ？」
「俺に・・・　ねーちゃんが電話・・・してくれんの？」
「そうよ」
「マジ？」
「私が遅くなると死ぬほど心配するんだもん」
「そりゃすっだろ！」
「だから、これで教えるから、私は無事で、仕事で遅くなるだけだってね」
「メッチャ・・・　メッチャうれしい」
嬉しいよりホッとしたって顔だけど。
「あとね、いちおうね、使わなくていいけど、いちおうね」
電話の連絡先を見せて・・・
「ここに、病院の電話と私の会社の電話も入れておいたから」
びょういん・かいしゃの横にあの病院とうちの会社の写真もつけておいた。
「まあ、これは、もしもってときで、カズオは何もしなくていいから」
「わ、わかった」
「私が遅くなるときだけ電話するから」
「うん！」
カズオが連絡先を見ていて・・・
「これが・・・　ねーちゃんだよな」
「それは読めるでしょ？」
「森下美里」
そう言って照れ臭そうに頭を掻いた。
「ねーちゃん、ありがとなぁ」
「私がボヤッとしてるからって、あんたが心配するからよ！」
そりゃそうじゃんみたいな顔して見てるけど？

カズオは私を守ることを考えていて　私はカズオを安心させることを考えてた

「あ！　ねーちゃん！　もひとつあんだよ」
なに？
カズオが冷蔵庫から・・・

小さなミニ苺ケーキ
「これも俺の金で買ったから、ねーちゃんの誕生ケーキっつうか」
半額シールが貼ってある！　さすが主夫の鑑カズオ！
そして、私が苺好きってことも把握している！
あ！　そうよ！
「カズオ、これ、二人のケーキ、誕生日もだけど、ウェディングケーキ！」
「あ？」
「ウェディングケーキ！　二人でカットしよう」
「うん」

一緒に果物ナイフで半分にカットしたミニケーキ。
「カズオ、あ～んして」
「え？」
「ほら、あ～ん」
カズオがデレッデレに照れながら口あけたから
半分そのままつっこんでやった！
「ブフォッ　ええあん！」
フッフッフッ
あ・・・
こいつ・・・
口移しって・・・
「うめえ？」
いたずらっ子みたいに笑ってる
腹立つっ
「こっちはどう？」
メッチャ濃厚 Kiss してやった
美味しいのね　目がイッちゃってるもの
27 の女舐めるな　フッ

ひとつ年とったな

呼び名

カズオの携帯、あれよ。
今、会社のフリースペース、もう月曜日。
昨日は土曜日の疲れが出ちゃってほっとんど寝てた、私はね。
なんだっけ？　あ、携帯。
カズオが出ていった前の日に買ったやつ。
クローゼットの奥に突っ込んであったの、すっかり忘れてた。
それを見たときにね、思い出したの。
そうだ、この携帯、カズオを心配させないように買ったんだって。
それだけだったの、それしか思い浮かばなかったの。
私との連絡手段、ていうか、私からの連絡通路？
それができて、カズオが安心したからよかった。
今・・・　何してるのかな？　電話してみる？
いやいやいや、あれは緊急用だから
でも・・・　せっかく渡したんだから、ちょっとだけ
ピッ
あれ？　もう取った？　コール鳴った？　無言？　つながってる？
「もしもし？　カズオ？」
「ねーちゃん？　マジねーちゃん？　ねーちゃんだよな？」
私しかいないよね、あんたの携帯に電話するのは
「今日遅くなんの？」
「え、ううん、今日は・・・　いつもどおり」
「エッ？　そんじゃなんかあったんか？」
「なにもないけど」
「そんじゃ、なんで？」
こいつの頭の中では、携帯は完全に緊急事態発生時用でしかないのね
「えっと、あんたがちゃんと電話を取れるかチェックしてみただけ」
ウソだけど
「うん、できた！　俺、ちゃんとできた！」
文明に初めて触れた原始人が頭に浮かんだ・・・
「何してたの？」
「洗濯もん干してたよ」
主夫！

「ねーちゃんのブラとパンツも今ちゃんと洗ってっから」
分類しているのね、パンツって、パンティ・・・　いいけど
ていうか、そういうこと言わなくても・・・　いいけど
「それじゃ、切るから」
「うん」
「また、あとで」
「うん」
「切るわよ？」
「うん」
「あんたから切ってもいいのよ」
「え・・・　俺は・・・」
できないのね
「そう、それじゃ」
「うん」
これは・・・　永遠に続くな
ピッ
ダメだ、これは、緊急用にした方がいい、キリがない　私がね
携帯なかったときは、会社にいるときにカズオが何してるかなんて考えたことなかった

ダメ！　仕事に集中できなくなる！　緊急用！　あくまで緊急用！

「北、じゃなくて、も、森下さ・・・ん」
戸惑っている大山

そうなのよ、今朝、出社してから、特にうちの課の人たち、戸惑いっぱなし。
つい北川って呼んでバツの悪い顔したり、先輩で「北川」って呼んでた人なんか、
めんどくさくなったらしくて「課長」って、あんたも別の課の課長だろ！ みたいな。
「北川でいいです！」って言ったらみんなホッとしてたわよ。
公式な書類では森下だけど、判も森下を押すけど、会社での呼び名は北川でいいわよ。
取引先の人たちも北川で記憶しちゃってるし。

「あのぉ、も、森下さん」
「大山、北川でいい、いや、あんたはもう美里って呼んでいいわよ」
「えっ？」
「まあ、こういうオフの時間は、もう美里でいい」
「ファーストネームで呼ばせていただけるなんてぇ」
「どうしたの？」
「あ、美里さん」
早やっ
「13 日って美里さんの誕生日でしたよねぇ」

おいおいおい、プレゼントとかやめてよね・・・
「喜んでいただけるかどうかぁ、わからないんですけどぉ」
私も喜べるかどうかわからない・・・
「これ、私からの・・・　お誕生日と結婚のぉ？　　お祝いですぅ」
白いショッピングバッグ・・・　何が入っているのか開けるのが怖い・・・
「あ、えっと、ありがとう」
このまま受け取って持って帰ろう
「開けてみてくださ～い」
ハァァァァ　勘弁してぇぇぇ
ピッてシール剥がして・・・
ン？　　これは・・・
白いフタと下がなんていうのかな・・・
「ティファニーカラーにしてみましたぁ」
そうそう、それ！　　私の好きな色の組み合わせ！
「これは・・・　なに？」
「お弁当箱ですぅ」
お弁当箱！
「美里さん、いつもスーパーの袋に入れてらしてぇ」
カズオが入れるからね
「何か特別なこだわりがあるのかなあって思ったんですけどぉ」
何もない
「この前のおかずもホイルに包んでらしたのでぇ」
カズオがね
「もしかしたら、お弁当箱を持ってらっしゃらないのかなあって」
持ってない
お弁当を会社に持ってくるという概念もなかったから
「これならぁ、匠の技も入りますしぃ、仕切りがないので使いやすいかなあって」
「大山！」
「はい？」
「私は、今まで誕生日プレゼントもらって嬉しかったこと一度もないけど」
「い、一度も？」
「これは本気で嬉しい！」
「えぇぇ、本当ですかぁ？　　嬉しいですぅぅ！」
カズオも喜ぶだろうなあ
「あとぉ、これはお弁当箱用バッグです」
おおおお！　　シンプルな白にティファニーカラーの持ち手！
「お洗濯できるように二枚！」
大山！　　おまえ、デキる！　　デキすぎる！

玄関のドアを開けると・・・
「ねーちゃん、おかえり」
ホッとする
「ただいま」

「マジかあ！　弁当箱なんて、俺初めて見た」
カズオに大山からのプレゼントを渡しています
「ねーちゃん・・・　俺、こんなスゲーやつに入れる弁当作れっかな？」
「いつもどおりでいいのよ」
漆の重箱じゃないんだから
「でもよぉ、俺のにぎりめしじゃ、なんつうか、申し訳ねえっつうか」
いっそもうスーパーの袋でいい！ って言いそうになる
「私はあんたのおにぎりとあんたのおかずが好きなの」
「えっ？　マジ？」
何百回言えばわかるのよっ？
「ほら、これだとおにきりが潰れないでしょ？」
「えっ！　あああ！　ねーちゃん、ごめんなぁぁ」
なにが？
「今までぶっ潰れてたんか？」
そうではないけど
「だよなあ、ねーちゃんにぶっ潰れたにぎりめし食わせらんねえもんな」
「そ、そうね」
ぶっ潰れてたことはないけど
「明日からこれに入れっからよ、ねーちゃん、安心していいよ」
着地点が見つかったか　まあそれならそれでいい
スーパーの袋のおにぎり、潰さないように持ち歩くの大変だったから

いつもどおりにカズオが作った美味しい夕食食べて
いつもどおりにお風呂に入って
いつもどおりに炭酸ミネラルウォーター飲んで・・・
な～んか　結婚したって実感ないなあ
まあ　こういうものなのかな　結婚て

あ　カズオがお風呂からあがってきた

「ねーちゃん」
「な・・・」
あれ？
「ねーちゃん？」

あれ？
「ねーちゃん、どした？」
これは・・・
「カズオ・・・」
「どした？」
「私は・・・　あんたの・・・　なに？」
「え、あの、お、お、お、奥さん」
メチャ照れてるけど
「そうよね」
「うん」
嬉っれしそうに頷いたけど
「私のこと・・・　名前で呼んで・・・　いいのよ」
「えっ？」
えって
「私は、あなたの、つ、妻なんだから」
「エーーーーーーッ」
そんな恐怖におののいた顔する？
「お、俺・・・　え？　　あ、んっと、あの、な、ななんて呼べば・・・」
「美里でしょ、名前ってるでしょ」
「えぇぇぇぇぇぇ」
そんな困った顔する？
「それは・・・　俺・・・　できっかなあ」
そんな難しいこと？
なんか考えてる　またなんか考えてる　こいつが考えるとろくなことない
「ねーちゃん・・・」
いや、だからさ
「俺・・・　頭ん中で呼んでっとこ・・・　今、マジで心臓バクバクすんだけど」
あんたさ・・・
「あんた、前に、私がこのソファでうたた寝してたとき、私の名前呼んでたわよね？」
「えっ」
「2 回も」
なにその犯罪を暴かれた犯人みたいな顔？
「耳元でっ　ミサトって　呼んでたわよねっ」
「あのぉ・・　あんときは・・・　なんつうか・・・　出てかなきゃなんねえって・・・
　だから、なんつうか・・・　ちっと、なんつうか、名前呼びてぇなって・・・」
「今は堂々と呼べるけどっ？」
「ねーちゃん」
だからさっ
「ぜってえ俺のことからかってんだろ」
ハァァアアッ？

「あなたは私の夫だから、私の名前を呼んでいいと言っているだけですけどっ」
「メッチャ・・・　えぇぇぇぇ」
あきらめよう
うん　あきらめる
べつにいい
ねーちゃんで

名前呼ぶってそんなに難しいかなあっ

あれから考えてみたの、想像してみたっていうか。
たとえばね、会社から帰って玄関開けて・・・
カズオがヒョコタン走ってきて
「ねーちゃん、おかえり」って言うと、
な～んかホッとするの。
でもね、「美里、おかえり」で想像すると、
なんか意味もなくムカッとするのよ。
「ねーちゃん、メシ食う？」だと「食べるぅ」なんだけど、
「美里、メシ食う？」だと「食べるに決まってるでしょ！」
「ねーちゃん、ボヤッとしてっからさぁ」
まあね、心配してくれてるのよね
「美里、ボヤッとしてるからさぁ」
想像しただけで殴りたくなる、ていうか速攻離婚よ。

カズオがね、妥協案を提案してきたのよ。
妻の名前を呼ぶのに妥協案提案ってどうなの？ って思ったけど。
「あのよ・・・　あの、最初っから美里ってのは、なんつうか、照れるっつうか」
まあ、こいつになりに真剣に考えたのね
「最初は・・・　みーちゃんってのは？」
「それこそ、今や本当にネコの名前だからイヤよ！」
「そ、そんじゃ・・・　美里ちゃん？」
「ちゃんづけしないで！」
「えっと、そんじゃ・・・　美里さん？」
メッチャ距離できるよね？　知り合って初期くらいだよね？
「もういい」
それしか言えなかった。

結局、私もあいつが「ねーちゃん」て呼ぶのに慣れちゃってるっていうか。

最初の頃の THE ホームレスのときの「ねーちゃん」は、

ああいう人たちって女の人を「ねえちゃん」って呼ぶでしょ？
そんなカンジだったけど、今は・・・　ニックネーム的な？

ところがね・・・
ゆうべよ
まあ、ほら　ベッドの中・・・でね　そういう・・・ね
だんだん・・・　なんていうか・・・　まあ・・・　盛り上がる？
盛り上がるっていうか・・・　あいつが・・・　そうなっていって・・・
「ミ・・・サ・・・ト・・・」
え？ って
それでどんどん・・・　あいつが・・・　なっていって・・・
「ミサト・・・ミサト・・・」って
その言い方が・・・　とってもSexyでドッキーーーン
あいつが・・・　なんていうか・・・　ね？
そのときにも「ミサト・・・」って
ヤバかった　Sexy過ぎて
初めて私の名前を呼んだみたいなカンジじゃなかったの。
すご～く言い慣れてるみたいな？

それで分析したの、こんなこと分析するのもなんだけど。
もしかしたら・・・　こいつは・・・　こういうとき
自分でも意識しないで頭の中で私の名前呼んでたんじゃない？
それが、ほら、単純なところがあるから、私が名前呼んでいいって言ったから、
これまた無意識で声に出しちゃった・・・としか思えない。
声に出したことも自覚ないみたいだったもの。
言わなかったけどね、そんなこと言えないでしょ？

あ　目を覚ました

「ねーちゃん」
眠そうな目でそう言って私のこと抱きしめる

これがカズオだから
うん　いい　それでいい
もういいですっ

ビースラ

妊娠23週目、いわゆる妊娠6ヵ月の終わり。
お腹立派に出てます、胎動あります。

私ね、最初の胎動・・・　ハッキリわからなかったの。
なんか腸が動いてる？ と思ってたのね、何回か。
でも、なんか今まで感じたことのない動きなんだけどなあって。
やっと気づいた、胎動だって。
わかるわけないじゃない！　初めてなんだから！
今はね、動くと「カズオ！　動いてる！」って呼ぶわよ。
最初の、なんていうの、感動を感じさせてあげられなかった罪滅ぼし？
お腹触って、とろけるほどしあわせそうな顔するのよ。
私はね・・・
ああ、やっぱり赤ちゃんいるんだってやっと実感できたの、遅いけど。
私の体内に私とは別の生き物が生息している
SFみたい

先週、両親学校に行ったの。
いわゆるプレパパたち？
「妊婦の疑似体験」とかで胸とお腹が出てる体験ジャケット？ を装着されられてた。
戻ってきたカズオが私の手をギュッてにぎってずっと私の顔を見続けたのよ。
「なに？」
「ねーちゃん・・・」
「なによ？」
え？　なんで目を潤ませてるの？
放っておこう　めんどくさい

家に戻ってカズオが言ったの。
「ねーちゃん、俺、あの、なんとかっつうジャケット」
疑似体験ジャケット？
「あれ付けたらよぉ、ねーちゃん、こんな辛れえ思いしてんのかって」
あれは臨月近くの状態じゃないの？　10kgって言ってなかった？

「ねーちゃん、俺ができっことはなんでもすっからよぉ」
あんたすでになんでもやってるけどね
「ねーちゃん・・・　スゲーよ」
こいつの感動ポイントがときどきわからないのよ

にしてもさ・・・
ウェディングの写真まだできないのかなあ？
もう１ヵ月半？　そんなにかかる？　デジタルの時代よ？
シンシン忙しくて忘れてる？
「ミサトッチ〜！」
電話かけたら、かけ直すって FaceTime。
「ちょうどさっき送ったのよ」
ああ、そうなのね
「ねじ込むの大変だったんだから」
ねじ込む？
「できないならワタシのコーナーやめるわよって言ったら死に物狂いで」
「なんの話？」
「届いたらわかるわよ」

ねじ込むって・・・　なに？
シンシンのコーナー？
とにかく明日には届くってことね

で・・・　今日　届いた。
なにこれ？
ファッション雑誌 Be w/　私たちはビースラって呼んでるハイブランド雑誌。
シンシンがこの雑誌にコーナー持ってるのは知ってた。
で？　で？　でっっっ？

なんで私とカズオのウェディング写真が載ってるのよっ？
『ボーダーレスウェディング』ってなに？
“抜け感でウェディングのイメージを一新” って　なにっ？
シンシンッ！
電話！
「届いたぁ？」
「あんたねっ　なにこれっ？」
「ビースラよ」
「じゃなくて！　なんで私とカズオの写真が載ってるのよっ？」

「大丈夫よ、絵コンテとテーマと記事はできてたの、あとはあんたたちの写真だけで」
「雑誌に載せるなんて言ってなかったじゃない！」
「サプラ～イズ！」
「私がサプライズが大嫌いなのは知ってるでしょ！」
「カズッチには言っておいたわよ」
「え？」
「意味はまったく理解してなかったみたいだけど」
あんた・・・　わかっててカズオに言ったよねっ？
「カズッチのモデル料 10 万でいい？」
モデル料っ？
「あのルックスならもっと払ってもいいんだけど、シロウトだからね」
「あんたさっ」
「なあに？」
「私がマジで怒ってるのわかるわよねっ？」
「そんなの想定内よ」
「シンシン、絶交する！　本気よ！」
「ミサトッチ、ワタシも真剣なの！　ワタシが提案したかったイメージはね、
　プロのモデルじゃウソくさいだけで陳腐にしかならないの！
　私はリアリティを求めてたの！　これはワタシのターニングポイントでもあるのよ！」
「だからって、私に一言もなしで勝手にこんなことするなんて最低よ！」
「言ったらあんた絶対やらないでしょ」
「あたりまえでしょ！」
「ミサトッチ、たまにはワタシのこと助けてよ」
なにそのトーン？　ビッチ感どうしたのよ？
「見せるしかないときがあるのよ、どんなにいいイメージでもね、
　言葉で言っただけじゃ通じないの、このテーマはワタシがずっと・・・」
え？　シンシンが泣いてる？
「あんたたちの写真を見て、編集部も初めて OK してくれたのよ」
そ・・・それは・・・　よかったって言えばいいの？
「3 年よ？　3 年！　私がこのテーマを提案し続けて 3 年でやっと実現したの！」
仕事での・・・　企画を通す難しさは・・・　私もよくわかってるけど・・・
「お願い、ミサトッチ、何かあったら必ずワタシが責任取るから」
え・・・　そんな真面目仕事モードでこられると・・・
「あと、カズッチのお仲間にも了承とお礼しておいたから」
「え？　いつ？」
「あのとき」
私が知る前に・・・　あの軍団は知っていた・・・　なによそれぇ？
「カズッチのモデル料の振込先送っておいてね」
振込先？
「あと、その号、明日発売」

ハァアアアッ？
「もっと早く言ってよ！」
「こっちもねじ込んだからギリだったのよ！」
ねじ込むって・・・　そういうこと？

あ　カズオが買い物から・・・　何も知らないで・・・　かわいそうに・・・
「ねーちゃん？　　どした？」
これ
「具合悪りぃんか？」
ちがう
「ねーちゃん？」
抱きしめるけどぉぉ
何も知らないあんたが哀れで泣いてるのよぉぉぉ

しょうがない　見せるしかない　現実を

「ほら」
シンシンのコーナーの４ページ
「おおおおお！　　ねーちゃんの写真だ！」
いやいやいや、あんたも載ってるでしょ？
「やっぱお姫様みてえだなあ」
そこじゃなくてさ
「なんか俺、また泣きそうだよぉ、メッチャきれいだぁ」
私は泣いたわよ　まったく違う理由でねっ
「あ！　　おっちゃんたちもいるじゃん！」
そのおっちゃんたちは、その後すぐに私たちより先に事情を知ったんですってよ
「メッチャ笑ってんじゃん！」
こいつは・・・
「あんたも載ってるでしょ！」
「あ？」
ほら！
「俺？」
そうよ！　　ここにもここにもここにも！　　ピンで写ってるのもあるわよ！
「なんか・・・　ごめんなぁ」
「なにが？」
「ねーちゃんのジャマしてるみてぇでよぉ、ねーちゃんだけの方が」
「私たちのウェディング写真でしょ！　　あんたがいなかったら意味ないでしょ！」
「そ、そっか」
あれ？　　あれ？　　こっ　これは・・・
「ね、ねーちゃん、これ・・・」

廃墟の裏で　こっそりKissしてる

盗撮でしょっ！　　これは盗撮よっ！

カズオが真っ赤になって私を見てるけど
そうねっ　あんたがKissしてきたのよねっ
あんたのせいよっ
いや、こいつは悪くない
シンシンだあああ！

どうか　どうか　知り合いが誰も誰一人見ませんように！！！！

「美里さ～ん！」
大山
「見ましたよ、ビースラ！」
だよね・・・　大山好きそうだもんね・・・　あの雑誌
「すごいですぅぅぅ！」
もう・・・　それ以上何も言わないで・・・
「美里さんは美の女王様みたいでぇ」
お姫様って言わないところが的確に見ている、さすがよ大山
「ご主人が・・・」
ご主人？　　あ、カズオ
「クラックラするほどイケメンでぇぇぇ、王子様っていうかぁ」
やっぱりそこは王子様か、そうよね　普段は量販店のヨレッとした服着てるけどね
「奇跡のコラボですぅ！」
コラボ？　　いや、ただの夫婦なのよ
「しかも、La Moda ShinのShinさんてレジェンドじゃないですかぁ！」
「そうなの？」
「あそこって新規の予約取らないんですぅ」
「行きたいなら取ってあげるけど」
「エッ!?　ほ、本当ですかぁ？」
「ただね、あいつはね、メッチャビッチのドSのオカマよ」
「美里さんと気が合いそうですね！」
え？　　どういうことかな？
「ますます行きたいですぅ！」
ますますって
「まあ、腕は天才的だから」
騙すのもねっ

やっと　あのときの機材や運んでる人たちが何者なのかわかったわよ
雑誌の撮影だったか

今度またやったら　マジ殺すっ！

貯金

床に座って真剣な顔で何かを考えている・・・横顔はたしかにイケメン。
哲学的なことを考えているのではないかというような表情。
何考えているんだろう？
いや、よそう、聞いてろくなことはなかった。
でも・・・　もしかしたら、たまに？　　おお！ みたいなこと考えてたりして？
なわけない、よそう。
でも・・・　なんかメチャクチャ気になってきちゃった。
「カズオ」
「あ？」
「何を考えてるの？」
「俺のパンツ、穴開いてっけどまだイケっかなあって」
ほら！　　聞いてろくなことないってわかってたのに、なぜ聞いたっ？
「このケツのあたるとこによ、チコッと」
「買えばいいでしょ！　　新しいの買いなさいよ！」
「ほんでもまだもうちっとイケッかなあって・・・」
「私、あんたのパンツを買うくらいは稼いできていると思うけどっ？」
「あ、うん、ほんでも、まだイケッかなあって」
こいつのイケないはどこっ？
このままでは、こいつの服は・・・
擦り切れて穴の開いたきちんと洗濯してあるホームレスの服。
そんなものがどんどん溜まっていく・・・
「そのパンツ・・・　今履いているの？」
「今日洗って、しまってっけど」
「出せ」
「え？」
「今すぐ持ってこい！」
あいつがベッドルームに走っていった。
そうよ、私のクローゼットの一部をあいつに提供したのよ。
私のクローゼットの中にあいつの穴の開いたパンツが入っているなんて・・・

これか
ここが擦り切れてピッて・・・

なぜ見てしまった私っ？
気になる　気になって　気になると
「カズオ」
「あ、うん？」
「あんたが私に火をつけたんだからねっ」
世間一般で使われている意味とはまったく違うけどねっ

なんていうのかな？
こういうのを見るとね、挑戦？　自分への挑戦状？
どこまで私はこれを繕うことができるのか的な？
なんで私こいつのパンツ繕ってんのよっ？
違う、もはや私にとっては、こいつの擦り切れたパンツを繕うではなく、
この穴をいかに美しく繕えるかという・・・　挑戦！
できた！　完璧！　この美しい縫い目！　勝った！　何にかはわからないけど
「ねーちゃん、ありがとなぁ」
ウルウルした目で見てるけど、正直あんたのためではなかった。
「次に穴が開いたら絶対に捨てなさいよっ！」
「う、うん、わかった」
どうしてこいつは極限まで擦り切れたものを着るの？
まあ、そういうヤツか。
でも、ホームレスのときと違ってお金がないわけじゃないでしょ？
私への遠慮？　むしろ迷惑なんだけど、夫が擦り切れたパンツ履いてるなんて、
まるで私が虐げているみたいじゃない！
お小遣い渡せばいいのかな？　これは自由に使っていいみたいな？
あれ？　そういえば・・・　そうだ！　シンシンからの・・・
すっかり忘れてた！

「これって・・・」
カズオが自分名義の通帳を見ている
「前にねーちゃんが作ってくれた・・・」
「そうよ、あんたの預金通帳」
「俺の 10 円入れたやつ！」
「そうね」
カズオが私へのプレゼント買った残りの小銭から 10 円出させて作ったのよ。
「シンシンが、あんたのモデル料だって先週振り込んでくれたの」
「もでるりょー？」
「ほら、あの雑誌に」
忌まわしいあの雑誌にっ
「写真載ったでしょ？　あれの・・・　出演料？」

「しゅつえんりょー？」
「お礼！」
「へ？　俺、なんもしてねえよ？」
そうよね、まさかあんな雑誌に写真載せられるとはね、勝手にねっ
「慰謝料！」
「あ？」
「なんでもない、とにかく、あの写真を使わせてくれてありがとうっていうお礼」
「俺・・・　バカだけどよ、そんでも、それは・・・　逆じゃねえかなあって」
逆？　なにが？
「ねーちゃんのウェディングドレスの写真撮ってもらってよ、お礼すんのは俺なんだけど、
　金ねえからよ、ほんでもシンシンさん、ただでいいつってくれてよ」
「あたりまえよ！　この紙媒体の印刷物が売れない昨今、あの雑誌はけっこう売れてて、
　しかも、あの号は電子版も含めて爆売れで、シンシンも雑誌社も大喜びよ！」
「ねーちゃん・・・」
え？　なんでシュンとしてるの？
「俺・・・　なんか悪りぃこと言ったんだよな？」
「あ・・・　違うの、カズオのことじゃないから」
何を言っているのかわからなかったのね、そうね、私も興奮しちゃった。
「なんていうか、雑誌に載るとね、まあ、そういう・・・」
ダメだ、慰謝料って言葉しか浮かばない！
「とにかく！　それはあんたが稼いだお金なの！　中を見なさい！」
あ、カズオがビクビクしながら・・・　ごめん、あんたが悪いんじゃないのよ

見ている
ジーーーッと見ている
あ　指で0を・・・　一・十・百・千　え？　そこで止まる？
もう一回一の位から始めた　一・十・百・千　なんでそこで止まるのっ？
あんたの世界には千の位までしか存在しないのっ？
「ねーちゃん・・・」
言うよね　絶対あの言葉　言うよね　怖いって
「俺・・・　なんつうか・・・　わかんねえ」
新しいパターン？
「10万円よ」
「やっぱ・・・　マジか・・・」
やっぱということは・・・　数えられてはいたってことよね
なぜかこいつは数字は大丈夫なのよねえ
いやいやいや、今はそれではない
「あんたのお金だから、あんたの好きに使いなさいよ」
「え・・・　んっと、そ、そんじゃ、今月の生活費？」

「それは私が稼いでます！」
なにそのメチャクチャ戸惑った顔？　首ひねって、なに？
「あの・・さぁ」
「なに？」
「俺・・・　仕事してたときあるっつったじゃん」
「そうね」
それでケガしてクビで・・・
「そんときの給料よか多いからよ」
エーーーッ？　月給10万未満て、どんなブラック企業よっ？
企業ではないのか、どこで働いてたの？　聞いたことなかった
「写真撮ってもらっただけで、こんな大金・・・　もらっていいんかな？」
え？
なんか・・・
なんで？　なんか・・・　涙が・・・
「ね、ねーちゃん、なんで泣いてんの？」
カズオが私を抱きしめて
「俺が、なんか悪りぃこと言ったんだよな？」
言ってない　全然言ってない
「ごめんな、ねーちゃん」
あんたは謝ること何もしてない
「あんたに・・・　今、あんたに・・・」
教えられた
働くってどういうことなのかを

10万に満たない給料を稼ぐために
働けなくなるほどの大怪我するほどの仕事で
それをやってきた　それが仕事だって
そうやって稼いだお金を丁寧に使って生きてきて

働いてお金をもらうってどういうことかを
あたりまえのことを　みんなわかってるようで忘れてることを
あんたはちゃんと知ってる

あんたはお金の使い方がわからないんじゃない
私が働いて稼いできたお金を丁寧に使ってくれている
それがあたりまえだから　あんたにはあたりまえだから

「カズオ」
見上げたら　心配そうな目で
「あのパンツ、もう一回穴が開いたら・・・」

「ン？」
「私でも繕えない、もうペラッペラに擦り切れてるから」
「うん」
「私のこの裁縫の腕をも超えるなんて・・・　最強のパンツ」
「ねーちゃん、おもしれえ！」
笑ってるけど・・・
私の夫は最強にすごい男。

カズオの口座の 10 万円は　もしも私に何かあったときに使うって　カズオが決めた
「ずーーっと使わねえまんまがいいなあ」って

リサイクル

6ヵ月から臨月の妊婦に、出産した後何をしたい？ って聞いたら、
おそらくほとんどが「仰向けかうつ伏せで寝たい」って言うと思う。
私は絶対そう。
仰向けに寝るとね、この8ヵ月のお腹がズドンと圧迫してきてね、
息は苦しいわ心臓ダクダクで死ぬかも？ くらいになるの。
このお腹じゃうつ伏せなんて不可能だし。
今、課内のみんなは、まさか私が「仰向けに寝たい！」と思ってるなんて、
絶対想像してないと思う、真剣に企画書に目を通してると思ってるわよ。
真剣だけどね、真剣に仕事してるけどね。
妊娠したら仰向けに寝られないとは知らなかったわよ。
前かがみになってると苦しいから、ときどき椅子の背もたれに背中くっつけるの。
お腹が出てるからメッチャえらそうな態度に見えるわよ、そういうつもりないけどね。

先週は2回目の両親教室。
陣痛のときに夫がどうサポートするかとか、呼吸がどうとか。
いちおう頭には入れたけどね、実際にできるかまったく自信ない。
終わった後、カズオはプレママさんたちに囲まれて情報交換？
なぜ私ではなくカズオを囲む？　　わからなくはないけど。
私はね、プレパパさんたちと情報交換、仕事のね。
「実は弊社は御社のご提案をぜひ取り入れたく・・・」みたいな。
名刺もらっちゃって、私も渡したけど、両親教室に名刺持ってくる私もどうなの？
バッグに入れたままにしてたからだけどね。
仕事一件取ったわよ、うちの課じゃないけど。
早速担当に連絡したらビックリされた、なかなか進まなかった事案だったんだって。

もう8ヵ月だから、そろそろ赤ちゃん用品の準備も始めた方がいいらしいの。
赤ちゃん用品・・・　およそ私の人生に縁がないと思っていた。
どうせならね、海外の雑誌や映画に出てくる白い素敵なベビーベッドがいいな。
服はね、ハイクォリティで品のある？　　やっぱりハイブランドかな。
私の子どもだもの、一流品で揃えたいわよ！

でも・・・　赤ちゃんのベッド、どこに置く？
私の部屋、1LDK よ、私一人用だもの、一人用にしては広い方だけど。
引っ越す？　引っ越すしかない？　やるなら今のうちよね、臨月では遅すぎる。

玄関のドアを開けると・・・
「ねーちゃん、おかえり」
ホッとする　お腹は重たいけど
「ただいま」

夕食はカキフライ！　大好き！
私の好みっていうのもあるけど、貧血にいい食べ物らしいの。
前回の診察のときに貧血が強くなってるって言われたの。
食事で改善するようにって。
サプリでよくない？ と思ったんだけど、先生は食事で摂るのがいちばんだって。
そうなるともうカズオよ。
イラスト付きのパンフレットもらって、前のめりになって先生の話聞いてた。

でもね、レバーだけはムリ！　絶対ムリ！
カズオにもレバー出したら口きかないって言ったわよ。
小さい頃に食べたら全身蕁麻疹出てすごい下痢が続いてからダメ。
「ねーちゃん」
「なに？」
「山口さんがよ」
「山口さんて・・・　だれ？」
「スーパーで知り合いになった３人子どもいる人」
それは・・・　ママ友というヤツか？
「俺が声かけてよ、そっから仲良くなったっつうか」
ナンパしたのか？
「やっぱよ、なんつうの、子ども持ってる先輩つうかさ、いろいろ知ってっかなって」
ほとほと・・・　感心する感心しかない
「ほんでよ、山口さんがよ、ベビーベッドとか服とか、そういうのは・・・
　なんつったかな、いらねえやつを持ってて、いんのを買う店・・・」
「リサイクル・・・ショップ？」
「あ！　それそれ！　そこで買った方がいいつってよ」
初めての赤ちゃん・・・　私の赤ちゃんのものを・・・
リサイクルショップでだとっ？
「ね、ねーちゃん？　どした？」
「ちょっと・・・　クラクラしちゃって」
「貧血か？　貧血ひでえのか？」

「それじゃない、それは・・・　大丈夫」
「やっぱレバー・・・」
なんだと？
「あ、なんでも・・・ねえ」
目で察したか
「えっと、赤ちゃんはすぐデカくなっから・・・」
ごめん、カズオ、今あんたが一生懸命しゃべってること、全然入ってこない
リサイクルショップって！
ショック過ぎる！　ありえない！
初めての子よ？　どこの誰が使ったのか着たのかわからないお古を着せる？ 使う？
確かに合理的かもしれない合理的なんでしょうよっ。
でもね、合理的だけがいいってものでもないでしょ？
いつもは合理的な私が言うのもなんだけど。
「ねーちゃん」
「え？」
「どうする？」
「なにが？」
「明日」
「明日は・・・　土曜日だから休みよ？」
「うん、だから、山口さんが連れてってくれるっつうんだけどよ」
「連れて行く？　どこへ？」
「リ、リサ・・なんとかっつうとこ」
エーーーーーーッ？　そこまで話が進んでたのぉぉおおおっ？
「えっと・・・　ここ押したら繋がるって」
それは・・・　私とカズオの緊急用通路・・・
「どうして・・・　そこに・・・　山口って入ってるの？」
「山口さんが携帯持ってっかって言うから、持ってるっつったら、入れてた」
勝手に・・・　私の知らないところで勝手に・・・
「あんた一人で行けばいいでしょ！」
「そんでも、ねーちゃんが行かねえと、どれがいいんか」
「お金なら出すから！　勝手にして！」

ベッドルームに走って　ドアバッターーーン！

わかってるわよ！　カズオはそういうヤツよ！　お金を丁寧に使うヤツよ！
でもねっ
なんかいろいろイヤ！　なんかいろいろイヤなの！

「ねーちゃん」
来ないで

「ねーちゃん」
隣りに座らないで
「ごめんなぁ」
なんで謝るのよ？　謝れば私の機嫌がよくなると思ってるのっ
「俺が、ねーちゃん怒らせたんだよな？」
どうでもいいっ
「あのさぁ、山口さんと話ししてくんねえかなあ」
なんで私がっ？
「山口さん、ねーちゃんと話ししてぇって番号入れたんだよ」
入れさせたのはあんたでしょ
「俺、この携帯は、ねーちゃんの緊急のときのやつだから使えねえっつったんだ」
結局入れさせたでしょ！
「山口さん、ねーちゃんと話したら、番号消していいからつってよ」
消したからって、私以外の電話番号を入れた事実は消せないわよ
「ねーちゃん！」
え？　なんで土下座？　できてないけど
「頼むから！　一回だけ！　電話してくんねえかな」
なんでそんなに・・・
「きっと、ねーちゃんの方が話わかると思う」
「ハ？」
「お願いします！」
やだもう・・・
「ね、ねーちゃん？」
条件反射みたいに抱きしめないでよ
「なんで・・・　そんなに・・・　真剣なのよ・・・」
「なんでって、ねーちゃんと俺の子で」
そうだけど・・・
「俺、なんもできねえからよ、ちっとでもなんかできねえかなって」
あんたは私より真剣に・・・
「ねーちゃん、一回だけ、一回だけ、電話してくんねえかな」
そんな真剣な目で見ないでよ・・・
「それじゃ・・・」
「なに？」
「その前に・・・」
「うん、なに？」
「泣かせてぇぇぇ」
カズオがギュッと抱きしめた
なんかわかんないけど泣きたくなって
いろいろ　いろいろ　泣きたくなって
カズオがティッシュで私の涙拭いて・・・

「鼻は自分でやるわよ！」
はあぁぁぁ
「電話するから」
「うん」

電話して　わかった。
カズオが「ねーちゃんの方が話がわかる」って言った意味が。
アメリカ人だった。
日本語も上手だけど、細かいニュアンスは英語じゃないと伝えにくかったらしい。
なるほどね
アメリカ人だものね、合理的よ。
ジャネット、あ、山口さんの名前、に合理的かつ論理的に説明されて納得しちゃった。
明日、車で迎えに来てくれるって。

それにしても・・・
「あんた、なんでアメリカ人に声かけたの？」
「子ども 3 人連れてたし」
いやいやいや、だからってアメリカ人に声かける大胆さよ
「ねーちゃんと気ぃ合うのって外人かなあって」
ハ？
「両親教室のとき、ねーちゃん、他のお母さんたちと全然話さなかったからよ、
　やっぱ、ねーちゃんと話合うのって外人くれえじゃねえとダメだなあって」
こいつの・・・
観察眼と私を知ってる度合いが・・・　怖い

初めての服

リサイクルショップで買うべきものはすべて買った。
私のイメージのリサイクルショップとは全然違って、どれも「使い古し」感がないの。
それなのに安いから「だったら三枚くらい買っちゃう？」って気楽になれるし。
買わなくてもいいものもジャネットが教えてくれた。
ベビーバスは、キッチンのシンクにお湯を貯めて沐浴させればいいにはビックリよ。
1ヵ月もすれば親と一緒に入れるし、あんなものを使ったら腰を痛めるだけって。
そのバッサリした合理性が説得力があって私向き！
ジャネットはすべてリサイクルでという人ではないの。
新品のものを買うべきリストも作ってくれていたの、英語だけど。
「christening」のベビー服。
これは洗礼式で、向こうではその家代々伝わる服か新しい服を着せるんですって。
でも、私はクリスチャンではないからって言ったら、
退院するときに、初めて親が用意した服を着せるでしょって。
なるほどね、そうよね、入院中は病院が用意したベビー服だけど、
退院のときに初めて着せるのが記念すべき親からのプレゼントみたいな？
それは大切！　ここは妥協できない！

ジャネットと連絡先交換したわよ。
カズオに「山口さんのは消さなくていいわよ」って言ったんだけど、
「俺はスーパーで会えっから」って。
「Kazu はワタシのセンセイよ、今日はこれが安いって教えてくれるのよ」
カズオ・・・　アメリカ人の主婦に先生扱いされている！

そして、今日はジャネットおススメのベビー用品のショップ。
退院のとき用の服を買いに来たの。
おおおお！　リサイクルショップとは違う高級感！
私のイメージは決まってるの。
白にベビーブルー、この組み合わせが大好き。
男の子でも女の子でもこれにしたいって思ってたのよ。
それっぽいのがいっぱいある！　嬉しくて泣きそう！
あああああ！　これ！　まさにこれ！

「カズオ、これが私の夢のベビー服！」
上質な白の素材にさりげなく白のビーズが襟元にあしらわれていて、
ベビーブルーの小さな刺繍がちりばめられてる・・・
美しい！
これしかない！　これにしよう！
「ねーちゃん」
え？　なに？　まさか・・・　怖いとか言う？
確かに高いけどね、これは譲れないわよ！
「俺が買う」
・・・・・ん？
「俺が買うから」
えっと・・・　私の脳が処理できない言葉を・・・
「なんて・・・言った？」
「俺が買うって」
どうやって？？？
「カ、カズオ、これ、税込みで２万８千円よ」
「うん」
うんて　わかってるのかな？ どうしちゃったのかな？ なにが起こってるのかな？
「俺、３万下ろしてきたから」
サンマンオロシテキタ？
「シンシンさんからもらった金」
えっ？
「あれは・・・　だって・・・」
ていうか
「どうやって下ろせたの？」
私は教えてないわよ
「昨日、山口さんにおせえてもらって下ろした」
いつの間に？
「俺が山口さんにやり方おせえてくれっつったから」
だからいつの間に？
「これはねーちゃんの夢で、俺たちの子どもの服だからよ」
そう・・・だけど
「やっぱ、なんつうか、男としてっつうか、父親としてっつうか」
すっごい顔してるんだけど？
「なんつうか、惚れた女の夢叶えるっつうか」
え・・・　なんか、どう反応すればいいんだろう？
「父親として自分の子に最初に着せる服は買いてえっつうか」
もんのすごい覚悟だってことだけはわかるけどぉ
正直・・・　怖いんだけどぉぉぉ
カズオが３万円とか、怖いぃぃぃ

なんかカズオが高い服を怖いっていう気持ちがわかる気がするぅぅぅ
えっと・・・　あ！
「だ、だったら、もうちょっと、安いのにするから」
「ねーちゃん！」
「は、はい？」
「お、俺を男にしてくれよ」
なにその、どっかから借りてきてまったく合わないセリフ？
「これが、ねーちゃんの夢だろ？」
そういう風に言われちゃうと・・・　本当にそうなのかわからなくなってきたぁぁぁ
「親が子どもに最初に着せる服ってよ、メッチャ・・・　大事っつうか」
そ、そうだけど・・・
「俺が買う！」
「あ・・・　はい」
気迫負けしちゃった
カズオに・・・

買いました。
カズオがスタッフに「これください！」って、セリみたいに大きな声で・・・
私は固まったまま　見てるだけだった

わからない
40パーOFFの服さえ怖いと言っていたこいつが・・・
2万8千円もするベビー服を・・・
正直私でさえ、一回くらいしか着ないのに高いかな？ ってチラッと思ったのに

部屋に戻って・・・
カズオは昨日買ったベビー用品で一度洗った方がいいというものを洗濯して
私はローテーブルの上のショッピングバッグをボ〜ッと見ている

もしかして・・・　無理させちゃったかな
おとといリサイクルショップのことで泣き出した私を見て
本当はそこじゃなくて、カズオと私だけの連絡通路に別の人の名前があることに
そこはいいけど・・・
だって、自分のパンツだって穴が開いても履いてるヤツよ？
そんなヤツが・・・
私が追い詰めた？　　そうかも・・・

あ　戻ってきた
「ねーちゃん、開けねえの？」

「カズオォォ・・・」
「ど、どした？」
条件反射的に抱きしめるけどぉぉ
「ごめんなさい・・・」
「な、なんで泣いてんの？」
「私が・・・追い詰めちゃったのよね・・・」
「あ？」
「だってぇぇ、穴の開いたパンツ履くあんたがぁぁ、３万下ろすってぇぇぇ」
「ねーちゃん、なんも悪りぃことしてねえよ、俺が決めたんだからよ」
「でもぉぉぉ」
「あのさ・・・」
カズオがギュウッて私のこと抱いて・・・
こういうときって・・・　顔見られたくないとき・・・
「俺さ、便所に捨てられてたとき、汚ったねえ古新聞にくるまれてたんだって」
え？
「施設の園長が、俺が施設出るときにおせえてくれたんだ。
　施設出るときって、なんつうか、そういうのおせえられんだけどよ。
　それ聞いても、そうなんかぁくれえでよ、なんも思わなかったっつうか」
カズオの声は・・・　たしかにふつうの声で・・・
「昨日、山口さんとねーちゃんが話してんの聞いてたらよ、
　俺が最初に着せられたんは汚ったねえ新聞紙だったんだなあって。
　やっぱゴミッカスだなあって」
そんなこと考えてたの
「そんでもよ、俺みてえなゴミッカスがよ、
　ねーちゃんみてえなメッチャスゲー人と結婚できてよ、
　そんで、ねーちゃんと俺の子が生まれるってよ、すげえなって」
カズオはもっとギュウッて私を抱きしめて
「俺、結婚できるなんて思ってなかったし、子どもなんて・・・
　だってよ、俺みてえなんと結婚してぇなんて・・・　いるわけねえじゃん」
ここにいるけど
「ねーちゃんの夢は、俺の夢っつうか、俺の子に最初に着せる服が・・・
　あんなきれいな服着せられるなんてよ、俺、メッチャしあわせだよ」
そういうことだったのね
「それをよ、自分が稼いだ金で、つってもまだピンときてねえけど、
　そんでも、俺が買えるなんてよ、ねーちゃん、俺、メッチャ・・・」
だからあんなに自分が買うって言ったのね
「ありがとう、私の夢を叶えてくれて」
カズオが照れ臭そうに笑って
「私の夢叶えて、子どもにあんな素敵な服買うなんて、男の中の男！」
「ねーちゃん、ぜってぇ俺のことからかってんだろ」

「俺を男にしてくれ！　かっこいい！」
「ねーちゃ～んはよぉ！」

大山、あんたはすごい！
カラクタ市に国宝だった、確かにそうだった、古新聞に包まれて隠れてた
私、見つけた！

お風呂から上がって、ちょっと調べものしていたら・・・　衝撃的な情報が！
ウソでしょ・・・　危なかった！

カズオがお風呂から上がってきた。
「カ・・・カズオ」
「ね、ねーちゃん、どした？」
「生まれたばかりの赤ちゃんて、温かい子宮から急に外に出るから、
　寒くて低体温症っていう危険な状態になることもあるんだって」
「エッ　マ、マジッ？」
「それでね、新聞紙ってけっこうな保温効果があるんだって」
「へ？」
「カズオ、あんた・・・　新聞紙にくるまれてなかったら・・・　死んでた！」
キョトンとした顔でこっち見てるけど
「低体温症になって死んでたのよ！」
「あ、うん？」
「あんたが新聞紙にくるまれててよかった！」
「あ・・・　う、うん」
「あんた死んでたら・・・　私、あんたに会えなかった、この子もいなかった」
「あ・・・」
「よかったあ！　新聞紙にくるまれてて！」
「あ、うん」
「よかったあ！」
カズオが・・・　口開けたままの情けな～い顔で
「ねーちゃんは・・・」
なんで笑うの？
「マジ・・・　ウケる」
私、真剣なんだけど？

クリスマスイブ

まだまだ出てきちゃ困るけど、お腹重たい。
「美里さんのお家ではどうするんですかぁ？」
「え？　なにが？」
「明日のクリスマスイブですよぉ」
「何もしない」
「えっ？　なにも・・・　しない？」
「私、そういうの全然興味ないから」
「でも、今年はカズオさんもいらっしゃいますよね？」
「カズオは・・・　わからないと思う」
「わからない？」
「ホームレスがクリスマスやると思う？」
「あ・・・」
「ね？」
「はい」
だいたいクリスマスイブなんて迷惑でしかなかったわよ。
ふつうに食事したくても、どこも予約でいっぱい。
テイクアウトの店でもやたらとフライドチキン推し。
お弁当屋で焼き肉弁当買ってきて食べたわよ、カップ麺のときもあったな。
「あのぉ、私、何かお手伝いしに行きましょうか？」
「何の？」
「何か・・・　イブっぽいものとか持っていくとか」
「いいわよ、大山だってカレシと過ごすんでしょ？」
「そうですけどぉ、あまりに・・・」
大山が「あまりに」と言った後の言葉が出なかったくらいの状態なの、私？

お風呂からあがると、カズオが肩と腰を揉んでくれる最近です。
「ねーちゃん、バリッバリだなあ」
両親教室で習ったことを忠実にやる男。
まさか妊娠てこんなに肩と腰にくるとは思わなかった・・・
「あ、そこそこそこ！」
カズオのマッサージはうまい！

こいつ、マルチな才能を持ってる男。
「ねーちゃん、あしたさぁ」
「な～に～？」
ああ、気持ちいい
「ねーちゃんが仕事終わったころにさぁ」
「6時には終わるわよ、残業ないと思う」
「俺、駅んとこで待っててもいいかなあ？」
「駅？　どこの？」
「ねーちゃんの会社ん近くの」
「山下町？」
「うん」
「なんで？」
「え、なんか、なんつうか、なんとなく」
なんとなく？
そうよね、カズオはほとんど家とスーパーだけで、たまにはお仲間に会いたくなった？
「いいわよ」
家の中だけじゃ主婦、じゃなくて、主夫はストレス溜まるわよね、わかんないけど。

そして、朝です。
「それじゃ、あとでね」
「うん、いってらっしゃい」
さあ！　この大きいお腹抱えて仕事に行きます！

そう、毎年こうよ、イブの日は夕方5時半くらいからみんなソワソワし始めるの。
カレシやカノジョがいる人たちはディナーの予約が気になるんでしょうね。
家族持ちの男性たちは、さっさと帰らないと奥さんに叱られるんでしょうよ。
今日は残業して！ なんて言ったら、一生恨まれるわね、仕事ないからいいけどね。
そんなに大ごと？　クリスチャンの国ではないわよ？ って毎年心の中で言ってる私。

6時になった途端、サーーッと消える、毎年。
私も帰るか。
あ、そうよ、カズオが駅で待ってるのよ、急がなきゃ、このお腹で？

いたいた！
ダークブルーのダウンコートにグレーの裏起毛のジャージボトム、可愛い。
「あ、ねーちゃん！」

嬉しそうな顔で手を振る姿、可愛い。
待って、可愛いって、なに？　私にも母性本能が芽生えてきた？
多少は芽生えてもらわないと困るけどね、子どもが生まれる前にはね。
「お仲間には会ったの？」
「あ？」
「ほら、あの、おっちゃん・・・たち」
「こんくれぇ寒みぃときはべつんとこいっから」
あ、そう
「ねーちゃん、あのさ、チコッとだけ歩ける？」
「歩けるわよ？」
先生も歩いた方がお産が楽になるって言ってたし。
「そんじゃ、こっち」
カズオが私の手を握って、転ぶと危ないからね、駅の裏手に向かったけど・・・

え？　山下町にこんなところがあったの？
高台みたいに街が見える場所
素敵な公園とかそういうところではない　ただの空地だけど
夜景がきれい！
「ねーちゃんに見したくてよ」
え？
「俺、こんくれえのときになっと、たま～にここ来てよ、きれいだなあって。
　街ん中の、なんつうの？　灯りついてる通りは、俺みてえのが通ると・・・なあ、
　ここはなんも言われねえし、これ見てっと、きれいだなあって」
カズオが白い息を吐きながら・・・
「俺、あんま、なんつうか、クリスマスとか、わかんねえからよ」
え？
「ねーちゃんに、なんもしてあげらんねえけど」
そんなこと・・・　考えてたの？
「これ見せてえなあって、あれ、あの、ツリーっつうの？　あれの代わりっつうか」
こいつは・・・
私を泣かせる才能ピカイチ
「え？　ね、ねーちゃん、どした？」
「あんまりきれいだから感動してるだけ」
「そっか」
嬉しそうな顔しないでよ、もっと泣いちゃうから
「私も、クリスマスを祝ったりしなかったけど・・・」
しなかったけど
「クリスマスプレゼント」
カズオに Kiss
「ねーちゃん・・・」

なに？　なんでそんな驚いた顔？
「俺、前ぇにここ来てっとき・・・　ここでキスしてもらえっとか、そんなん・・・
　なんつうか・・・　マジか・・・」
「マジよ」
って、もう一度しようと思ったら
カズオからKiss・・・　メチャ・・・ロマンティックなKiss
「カズオ、すごくきれいなイブのツリーをありがとう」
照れ臭そうに笑う顔、可愛い。

夕食は水炊き！
え？　なにこれ？　つくねまで？
「カズオ、これは買ってきたの？」
「作った」
このコリコリの軟骨まで入っていて、生姜の効いた絶品つくねを作るとは！
「鍋用の鍋ねえから、フッツーの鍋でごめんなあ」
関係ない関係ない！
「すっごく美味しい！」
「マジ？」
嬉しそうな顔、可愛い。
「山口さんによ、クリスマスって何食うんだって聞いたらよ」
そんなこと聞いてたの？
「なんかデッケー鳥のケツになんかいろいろ突っ込んで焼くって」
七面鳥のローストのことね
「どんなんかサッパリわかんねえから、やっぱ鶏肉かなって」
それで水炊き！
「ねーちゃんのこと、寒みぃとこ連れてくしなあって、鍋にした」
そこまで考えていたとは・・・！

ごめん、私、ホームレスだから何もわからないなんて
あんたが世界でいちばんクリスマスの意味をわかってるかもしれない

「ね、ねーちゃん、なんで泣いてんの？」
「美味しいからぁぁぁ」
あんたに感動してるからなんだけどぉぉ
「なんだよぉ、ねーちゃんメチャ可愛いなあ」
って抱きしめるけどぉ
「カズオ・・・　私・・・　こんな素敵なクリスマスイブは初めて」
「マ、マジ？」
カズオが素敵にしてくれた

なんなんだ、こいつ？
神さま、私、すごいヤツをプレゼントしてもらいました
ラッピングは新聞紙ですけど
メリークリスマス
いちおう言っておきます
意味はよくわかりませんけど

正月休み

明日からまた会社。
ちょっと正月ボケしてる、正月ボケなんてしたことなかったのに。
お正月は・・・　ふつうに過ごしたわね。

あれは・・・　次の日から休みに入る前の晩だったから、28 日か。
カズオがメチャクチャ「途方に暮れています」って顔で私の前に座ったのよ。
「ねーちゃん・・・　俺、これ・・・　作れる気がしねえ」
何の話？ って思ったら、スーパーのチラシを私に差し出したの。

おせち予約

え・・・　これを全部作らなくてはいけないと思ったの？
おそらく主婦の大半はこれをすべて手作りしてないと思うわよ。
かまぼことか？　ムリでしょ、作る人もいるかもしれないけど、知らないけど。
でも、これを出してきたということは・・・
カズオは、おせちを食べてみたいのかな？
「カズオ、おせち料理食べたい？」
「俺は・・・食ったことねえから、食いてえかどうかわかんねえ」
えっと？
食べたことがないから・・・　食べたいかどうかわからない？
食べたことがないから食べてみたいじゃなくて？
禅問答みたいなんだけど。
「もし食べてみたいなら」
スーパーのじゃなくてデパ地下のだけどね
「買ってもいいけど？」
「んっと、俺は食ったことねえから食いてえかどうかわかんねえ」
えっとね・・・
「食べたい？　食べたくない？」
「わかんねえ」
どうしたらいいんだろう
「あのぉ、ねーちゃんは、食いてえよな？」
え・・・　私は・・・

「やっぱ、なんつうか、正月っつうのは、こういうの食うんだよな？」
「それは・・・　そうなんだけど・・・」
「そっか・・・　だよなあ」
なにこの、おせちを巡って途方に暮れる二人って？
これは・・・　カズオがおせちを食べる機会を奪うことになるけど・・・
「正直に言っていい？」
「うん」
「私、おせち嫌いなの」
「へ？」
「食べろって言われたら食べられなくはないけど、食べたいとは思わないの」
「あ？」
「だから、正直に言うけど、お正月でも、カズオのふつうのごはんが食べたい」
「マ、マジ？」
「ごめんね、あんたは食べてみたいわよね？」
「俺は、ねーちゃんは食いてえだろうなって」
いやいや、食べたくないのよ
「ほんでも、どうやって作っていいんかぜんぜんわっかんねえしよ」
「作らなくていい、私、本当におせちは嫌いだから」
「マジ・・・か」
あ、そうよ！
「おせちって、主婦が作り置きして、お正月は料理しなくて済むように・・・」
なんだっけ？
「そういうところから・・・」
全然興味ないからうろ覚えだな
「カズオが、お正月くらい料理しないで休みたいって思うなら」
「なんで？」
「なんでって、毎日私のごはん作って疲れちゃうでしょ？」
「俺、ねーちゃんが俺が作ったメシ食ってくれんのが嬉しくてよ、
　ほんで、うまいっつってくれっとメチャ嬉しくてよ」
「あ・・・　疲れない？」
「なんで疲れんの？」
の？ って私に聞かれても、私は料理するの嫌いだから気持ちはわからないわよ。
「それじゃ、お正月休みも、ふつうにごはん作ってくれる？」
「マジ、フッツーでいいの？」
「マジふつうがいい」
「やっぱ、ねーちゃん、外人みてえだなあ」
「ハ？」
「山口さんに聞いたらよ、山口さんはべつになんもしねえっつってよ」
ああ・・・　アメリカではそうよね、最大行事はクリスマスだからね
「ほんでも、やっぱ、ねーちゃんは食いてえかなあって」

「食べたくないってば」
「あ、うん」
ホッとした顔
おせちをゼロから作ろうとした男・・・　怖い

年越しもふつうの豚の生姜焼き。
元旦はね、鍋、しかもカレー鍋！
クリスマスイブの翌日にオンラインで鍋買ったの。

私のキッチンには、けっこう名の知れた調理器具が揃ってるの。
どうせ買うなら美しい方がいいと思って。
でも、私は料理しないから買った意味がまったくなかったんだけど、
今ではカズオが大いに使ってくれているから意味が見い出された。
さすがに鍋料理用の鍋は買ってなかったけどね。
そんなものを家でやるという発想がなかったのよ。
鍋専門店に行けば食べられるもの。
でも、買った。
「ねーちゃん、ありがとなぁ」
カズオは感激してたけど、結局は私のためってことよね、私が食べるんだから。

その鍋でカレー鍋！
しかも海鮮カレー鍋！
30日に投げ売りしていた魚介類買ってきたらしい。
カレー風味にしてあるから生臭さがまったくなくて絶品！
なんでカレー風味にしたの？ って聞いたら、
「カレーの素がチコッと残ってたから」
ハ？
「ねーちゃん、カレー好きだからよ、入れたらうめえかなって」
なにそのアレンジ力の高さと発想の豊かさ！
そしてね、後半あたりに小さく切ったお餅を入れたの。
「トロッとなってうめえかなって」
最高なんだけど！
お雑煮は好きでも嫌いでもあってもなくてもいいと思ってるけど、
この出汁の出たおつゆを吸ったトロリとしたお餅たまらない！

残念なことにね、最近お腹がせりあがってきてるから、
一度にたくさん食べられないの。
これってアリ？
妊娠初期はツワリでチョコチョコとしか食べられない

9ヵ月にはお腹が大きくて胃が押されてチョコチョコとしか食べられない

カズオは常に小さいおにぎりを用意してくれてるの。
匠の技と私の貧血たのめにジャコとシソとワカメを入れた2種類。
私がキッチンに行ってちょこっと食べてると嬉しそうな顔して見てる。
こんなしあわせな妊婦っているかなあ？
私がよ？　この私がね？
会社行かないでカズオのそばにいたいって思っちゃうの、行くけどね。
行ったら行ったで速攻仕事モードになるのはわかってるけどね。

ベッドの中。
最近は向かい合わせだと距離ができるから、ほら、お腹がね、
私がカズオに背を向けてカズオが私の背中にピタッてくっついてる。
「カズオ」
「どした？」
「明日、会社行きたくないなあ」
カズオは黙ったまま私の頭を撫でて・・・
その手でわかるのよ
あんたも私と一日中いたいけど
私は仕事が好きだってわかってるってこと

行くか！　行くけどね！

出産

「藤木部長が呆れてましたよぉ」
お風呂からあがって、大山と電話、仕事のね、
「北川のやつ、産休中に MAGA との案件まとめやがってって」

正月休み明けに、藤木さんに呼ばれて「おまえ、いつまで働くつもりだ」って。
「予定日の 2〜3 日前くらいで」って言ったら叱られたの。
「会社で産気づいたらどうする！　　2 月から休め！」って。
で、2 月から休んだんだけど、やることないし、
MAGA から私のところに直に連絡来たからやり取りしただけなんだけど。

「明日はバレンタインですねぇ」
「え？　　あ、そうか」
14 日・・・ってことは、あと・・・14・15・16・17・・・　4 日。
「美里さんのところはバレンタイン・・・　あ、やらないですね」
「それどころじゃない」
「ですよねぇ」
「イデッ」
「大丈夫ですかぁ？」
「大丈夫、蹴られただけ」
「元気ですねぇ」
そうね、蹴られたとき、お腹がポコッて出っ張るとは知らなかった。
胎動どころか蹴られまくりってカンジ。
ここ数日はおとなしくなってきたんだけど。
「イデデッ」
「えっ、大丈夫ですかぁ？　　陣痛じゃないんですか？」
「違うの、最近右側蹴られるとすごく痛いのよ」
「何か・・・　あの・・・」
「大丈夫、多分この子は私の痛いところを突くんだと思う」
「美里さんに似てるんですねぇ」
え？　　どういうこと？
「それじゃ、MAGA の書類は任せたから」
「はい、美里さんはいい加減ゆっくりしてくださいね」

「はいはいはい」
ピッ

なんか今日は朝からお腹が張るなあ。
臨月に入ってから、たまに張って、横になっての繰り返し。
妊娠て・・・　未知との遭遇だらけ。

あれ？　え？　あれ？
なんか・・・　痛い・・・けっこう・・・痛い・・・
え・・・　これ・・・　まさか・・・
あ　おさまった
まさかねえ、あと 4 日あるのよ
トイレ行きたい、もうっトイレも近くなっちゃって　ヨッコラショ

え・・・　血？
これって・・・　なんだっけ、あ、おしるし？
え？　今日？　いやいやいや　あ・・・また・・・痛い・・・

なんとか・・・トイレから出たら・・・　おさまった
え・・・　もしかして・・・

カズオがお風呂から・・・
「ねーちゃん、どした？」
「かも・・・」
「かも？」
あ、きた
「じ、陣痛？」
カズオが腰をさすってくれて・・・　あ　肩に力入ってるのね　はい
おさまった
カズオが時計見て、チラシの裏に・・・　数字は大丈夫なのよねえ

痛くなると「きた」って言って、カズオが私の腰をさすりながら時間書いて・・・

「ねーちゃん、10 分おきになってっぞ」
「え？」
「俺、病院に電話すっから」
「わ、わかった」

タクシーで病院に着いた頃には 5 分置き。
陣痛室で、カズオが腰をさすってくれると少し楽になる。

カズオが肩を触って、あ、力入ってたってわかる
あれ？　今日何日？　13 日？　エーーーーッ？
「カズオ・・・」
「どした？」
「生みたくない」
「あ？」
「今日生みたくない」
「ねーちゃん、もう始まっちまってっからよ」
「だ・・・よ・・・ね・・・」

子宮口が 10cm になったからって、分娩室に移動。
カズオも一緒、立ち合いにしてよかった。
なんていうのかな、私の合理的性格？
両親学級で得た情報を、ちゃんと把握して実行しなければ、
今後の私の仕事に対する姿勢に対して自分で自分が許せないみたいな？
出産中いちばん苦しいのは赤ちゃん　狭い産道をギュウッと押されながら通る
だから　できるだけ身体の力を抜いて　ゆっくり呼吸して酸素を送る
忘れそうになると、私の手を握ってるカズオがギュッてしくれるから・・・
「頭が出ましたよ」
あ　いきみがなくなった
え？　カズオがボロッボロ泣いてるんだけど？
「なんで泣いてるの？」
あ、自分の子どもが生まれた感動か　そうよね
私は終わったっていう完走感しかないけど
「ねーちゃんが必死んなって苦しいのガマンして生んでんの見たらよぉ・・・
　ねーちゃんがいじらしいっつうか、もう可愛くて、感動しちまって、俺・・・」
え　そこ？
「カズオは・・・」
え

「先生！　出血が」
「リンゲル！」

「ご主人は・・・」

「ミ・・・」

「ミサト！　ミサトーーーー！」

最後に聞こえたのは

カズオが　私の名前を　呼ぶ　声

三年後の春

空が青くて
　　風が気持ちいい

「とうたん」
「どしたぁ？」
「かあたん、お空にいるかなあ？」
「かもしんねえなあ」
「あそこかなあ？」
「どうだろなあ」
「ヒトミ、かあたんにあいたいなあ」
「そうだなあ」
「とうたんもかあたんにあいたい？」
「ヒトミ、かあちゃんの好きなイチゴ買って帰っか」
「うん」

玄関のドアを開けると・・・
誰もいない

リビングに一人・・・

New York から帰国
かっこいい響き
響きはね
1 ヵ月って・・・
藤木さんとのアメリカ出張
最後の夜は、ホテルのラウンジバーで祝杯。
藤木さんと私のペアは無敵よね。

「君とのニューヨーク出張は久しぶりだな」

「4年ぶりです」
「また君とこうやって来られるとはな」
藤木さんの言葉の意味がわかる。

あのときのことは　今まで藤木さんと話すことはなかった。
おそらく藤木さんは私が知らないことを知っている。

「あのときは・・・　さすがの俺も・・・」
こんなに時が経ってから、時が経たないと話せなかったのね

私が憶えているのは・・・

え・・・　頭が・・・　重い・・・
まぶたも・・・
ゆっくりと目を開けると・・・
カズオがベッドの横で　青い顔してうつむいてる
カ・・・　あれ、声が・・・
「カ・・・ズ・・・オ」
カズオが顔を上げて　私を見て　目を見開いて
え？　なんでボロボロ涙流してるの？
「ね・・・」
えっ？　な、なんで倒れた？
「カズオ？　カズオ？」
どうしよう　えっと　あ　ナースコール
「森下さん、どうしました？」
「あの、えっと、主人が倒れて」
「えっ？　森下さん、気がつきましたか？」
なんの話？
「今行きます」
何が・・・　と、とにかく・・・
「カズオ」
え、身体が重くて・・・　手を・・・なんとかカズオの・・・　届かない
あ、先生！
「しゅ、主人が・・・」
看護師さん二人がカズオを抱き起こして
「森下さん、よかった」
なに？

先生によると、私は出産直後に大出血起こしたんですって。

貧血だったこともあるけど、妊娠によって卵管がねじれかけていて、
出産の衝撃でその部分が小さな亀裂ができてそこから大出血。
危なかったんですって
端的に言うと　死にかけた
ていうか、一瞬死んだ
・・・って聞かされも、憶えてないし、臨死体験みたいなのもしてないから実感ない。
丸二日意識がなかった、正確には途中朦朧としてまた意識を失うみたいな。

輸血が必要だったんだけど、私の血液型がO型のRh－。
なかなかいないのよ、AB型のRh－も少ないけど、私のも少ないの。
そしたらね、カズオもO型のRh－だったんですって。
ビックリ！　　O型はけっこういるけど、そこにRh－がつく人が、まさかのカズオ。
カズオは必要な血を全部取ってくれって言ったんですって。
これ以上は危険ですって言っても、大丈夫だからって。
もうこれ以上は無理ですって言われて・・・

カズオは私の会社に電話をかけた

出たのは大山で、私が大出血して血液が必要なこと、しかもO型のRh－。
大山はすぐに藤木さんに伝えた。
藤木さんはすぐに病院に駆けつけて、大山は全社に呼びかけた・・・
ていうところまでは、大山から聞いていた。

「俺もO型のRh－だからな」
まさかねえ。
「俺が行ったときには、彼の血と輸液でもう峠は越えていた。
　俺はもしものときのために摂ってもらったんだが、
　廊下で彼が、土下座・・・みたいなことまでして」
あれをやったのね
「君の奥さんは君の血で助かったんだよって言ったんだ。
　俺は、もしものときのために摂ってもらっただけで、君が助けたんだって。
　彼には全然聞こえてなかったんだよ、聞こえてないというか・・・」
藤木さんが不思議な顔つきで　何かを思い出すように
「自分が助けたという意識がまったくない、それに驚いたよ。
　まるで俺が助けたと思ってるように何度も何度もお礼を言うんだよ、
　どんなに、君が助けたんだよって言ってもね」
藤木さんが私の顔を見た
「俺は、今までああいう気持ちになったことがないんだが・・・
　こいつには永遠に勝てる気がしないって思った」
あ　わかる

「彼は勝つとか負けるなんて思ってはいなくて、俺もそういうことは思ってないけれど、
　こいつには・・・　勝てないなと思ったな、あれは不思議な感覚だったな」
「カズオは、藤木さんが来てくれて嬉しかったって言ってました。
　おそらく・・・　心細かったんだと思います」
「あのときは・・・　21 歳だったか」
「はい」
「彼の方が俺よりずっと頼もしいよ」
「はい」
「おい、そこは嘘でも否定しろよ」
「藤木さんは嘘見抜いちゃうでしょ？」
「そうだな」
藤木さんが穏やかな顔で笑った
相変わらず素敵な笑顔です
「藤木さんのところもそろそろですよね？」
「予定日は来月末だ」
「立ち会うんですか？」
「カミさんからやめてくれって言われてるよ、あなたは血に弱いから迷惑だって」
あ、TikYok で血を見て失神する夫タイプか！
え？　血に弱いのに血液提供してくれた・・・
「北川、おまえは彼に勝てたと思うときはあるか？」
「ないです」
「俺もカミさんに勝てたと思ったことがない、家では無能だ」

家では無能同士の　祝杯
つまりは　お互いに　しあわせってこと

泣く

先生が病室から出ていって、少ししたら、
「森下さん！　まだ休んでなきゃダメですよ！」って声が廊下から聞こえて、
病室のドアがガラッと開いて、ヘロッヘロのカズオが現れた。
「ねーちゃん・・・」
ヘロッヘロで私の傍に来て
「ねーちゃん！」
抱きついて号泣
どうしたらいいのかな
私、泣いてる人を慰めたことないから
えっと　頭撫でてみる？
あ　頭撫でていた手を握ってまた号泣
手を奪われたら　どうすればいいの？
なんでこんなに泣いてるの？
え　え？　まさか・・・
「カズオ・・・　赤ちゃんは？」
カズオが顔をあげて・・・　また号泣
えっ　ウ・・・　ウソ！
「げ・・・」
「え？」
「げ・・・ん・・・」
「え？」
「元気・・・」
ハ　ハァァァァァ　よかったぁぁぁ
「カズオは赤ちゃん見たの？」
うんうんって　また号泣
私が意識なかった間に　こいつにいったい何があったのよっ？
「カズオ」
あ　顔あげた
「なんでそんなに泣いてるの？」
「なん・・・」
また号泣
もういい、好きなだけ泣いていて　疲れた

「ね、ねーちゃん？」
揺り動かす？
「ちょっと目をつぶってただけよ！」
「あ・・・　よかった・・・」
また泣く
「カズオ、私、生きてるから」
「うん、うん・・・」
また泣く
もう何も言うまい
何か言ったら泣く
「ね、ねーちゃん？　どした？」
何か言ったらあんたが泣くから黙ってるのよ
「具合悪りぃ？　先生呼んでくっか？」
黙ってれば黙ってるでこれかよ！
「大丈夫よ」
「ハァ・・・」
「泣かない！」
「う、うん」
って言いながら泣いてるっ
あ！
「赤ちゃん、どっち？」
「どっちって？」
「男の子？　女の子？」
「女の・・・子・・・」
と泣く
女の子！　嬉しい！　女の子欲しかったの！
あ！
「いつ生まれた？」
「だから・・・ねーちゃんが・・・」
「日づけは？」
「わかんねえ・・・」
ハ？
「俺・・・」
ダメだ　こいつの涙腺と脳の回線は壊れまくっている
あ　看護師さん
「森下さん」
「はい？」
「あ、ご主人の方です」
なんかいろいろすみません
「まだ休んでないとダメですよ、あれだけ血を摂ったんですから、昨日も寝てないし」

あれだけ？　寝てない？　いったいどういう？
「俺、なんともねえから」
私が見てもヘロッヘロなんだけど　無精ひげ生えてるし
「それでも」
「俺、こっから離れねえ」
ちょ、あ、看護師さんが・・・　あきらめ顔で　ため息
私が意識のない間　どういう状態だったんだ、おまえはっ？
「すみません、あの、赤ちゃんは・・・」
「連れてきてあげましょうか」
「はい」
「少しだけですよ、森下さんもまだ安静が必要ですからね」
「はい」
赤ちゃんに会える！
カズオを見たら・・・　涙ウルウルで私を見てるんだけどぉ

「はい、さっき沐浴したばかりですよ」
渡された初めての・・・
「3,275g、51cm、大きな赤ちゃんよ」
これが私の・・・
「2 月 14 日生まれなんてロマンティックね」
14 日？　よかったあぁぁ　13 日はまぬがれたぁぁぁ　え？
「ロマンティック？」
「ハレンタインでしょ」
「あ・・・」
そんな日に生まれるなんて　あなたデキ過ぎでしょ
それにしても　この子・・・
「カズオ」
「な、なに？」
「カズオが赤ちゃんのとき、すっごくすっごく可愛かったのね」
「あ？」
だって
「この子、カズオにそっくりだもん」
涙出てきちゃった・・・　嬉しくて・・・
「ねーちゃん」
カズオが私のこと、赤ちゃん抱いてる私をそのまま抱きしめた
「カズオにそっくりでよかったぁぁ・・・」
カズオが私の頭を撫でて
「こんなに可愛いなんてぇぇぇ」
「ねーちゃんはよぉ」

「カズオ、お風呂入ってきて、臭いぃぃ」
「俺が臭せえのは・・・　ねーちゃん慣れてっだろ？」
「そうだけどぉぉ」
そうなのよぉぉぉ

看護師さんが、赤ちゃんを連れていった。
バカ夫婦だと思っただろうな　うん　思ったなあれは

命名

私はカズオそっくりの女の子が欲しかった。
カズオそっくりの男の子でもいいんだけど、
可愛がり過ぎてマザコンかチョ～ダメ人間にしちゃう絶対しちゃう。
女の子だったら顔はメチャクチャ可愛いし、
性格もよくて将来はお嫁さんにしたい NO.1！
最低なのは、私そっくりの女の子。
私でもどう扱っていいのかわからないと思う・・・
もう一人の私って・・・　ゾッとする。
私そっくりの男の子は・・・
仕事はデキるだろうけど、ドＳの亭主関白、家のことはいっさいしない・・・
私なら絶対結婚したくないタイプね。

通常分娩なら 4 日で退院だけど、私は様子を見るために 10 日の入院。
あさって退院！
カズオはずーーっと私の傍から離れなくて、4 日目に私がキレた。
「お風呂入って着替えてきなさい！　それじゃまるでホームレスよ！」
ホームレスだったんだけど！　見慣れてるっちゃ見慣れてるけど！
病院であの汚い無精ひげとヨレヨレの服はまわりに迷惑でしょ。
カズオがいったん家に戻ってるときに看護師さんが言ってた。
私が意識不明の間、カズオはまったく泣かなかったんですって。
信じられない、今でも視線感じるなあと思って見るとウルウルの目で見てるのに。
自分の血液型が私と同じだと知ったら・・・
私の命はカズオが救ってくれた、だからこうやってカズオそっくりの子を
「ねえ、赤ちゃ・・・」
あ！　名前！
確か生後 14 日までにつけるのよね。
この病院では出生証明書出すから、できれば退院までにって言われたし。

名前・・・
私はグローバルな名前にしたいのよ。
沙羅とか？　真理亜とか？　奈菜とか？
でも・・・　カズオが書けると思う？

いっそカタカナ？
サラ・・・マリア・・・ナナ・・・
カタカナだと一気に・・・なんか・・・歌舞伎町の香りになるな。
ひらがなにする？
いやいや、それだといかにもカズオか漢字読めないからみたいな、そうなんだけど。
カズオが書ける、もしくは読める漢字を使う？

病室のドアを開けるたびに、カズオは「ああ！　よかった！」みたいな顔になる。
「カズオ、そろそろ赤ちゃんの名前決めないと」
「名前？　あ、そ、そっか、名前」
「ねえ、カズオが書けたり読めたりする漢字ってある？」
「んっと・・・　書いたことねえけどぉ、書けっかなあって思うのは・・・大根」
・・・。
「あと、玉ねぎの玉！　あれはイケっかなあって」
「他には・・・？」
「んっと、書けねえけど読めんのは・・・　豆腐と油揚げ、あ、納豆も」
・・・。
「あ！　牛肉と豚肉、鶏肉の鶏っつう字はボヤッとしてっけど、肉見りゃわかったから」
スーパーの買い物・・・じゃないのよ！
「カズオ・・・　真面目に言ってる？」
「マジで俺ちゃんと読めっからよ」
真剣な顔
そうだった・・・　こいつは冗談は言わないヤツだった・・・
だから余計にたちが悪い・・・
「私たちの子どもに・・・　豆腐ってつけるの？」
いっそ「珈琲」にしてやろうかっ
「あ？　　あ！」
あ、何か考えてる、こいつが考えるときはろくなことがないのよ
「ねーちゃん・・・　ねえな」
「ない？」
「あ！　ある！」
「なになになに？」
「北川美里と森下一男は書けて読める！」
え・・・
この膨大な漢字が溢れている日本で、選択肢８個・・・
いっそひらがなでよくないっ？
いやいやいや、大切な我が子の名前よ、ちゃんと考えないと。
どう組み合わせる？
こいつが突き付けてくる難問は、大きな企画考えるよりむずかしい・・・

えっと・・・　こっちは・・・　これとこれは・・・
あ！　　これはどうだ？
「カズオ、これは？」

一美

「これで、ヒトミ」
「ヒトミ？」
「一男の一は、カズともイチともひとつのヒトとも読めるのよ」
「あ、うん」
「美は、ご存知、私の名前の美よ」
「うん」
「これでヒトミ」
「ねーちゃん！　　メッチャ可愛いじゃん！」
「そう思う？」
「チョーー可愛いじゃん！」
「これなら・・・　書けるわよね？」
「ぜってえ書ける！」
よかった！
もし次に生まれたら・・・　当分生みたくないけど・・・　もう文字はない
カズオに何回も書いて覚えさせるしかない！
あんたならできる！　　私の名前を書いて覚えたんだから！

退院の日。
ヒトミは、カズオが買ったあのきれいな服を着た。
なにもうっ　プリンセス！
こんな可愛い子、この世にいない！
一美
一人の美人
ううん、世界一の美人！
さすが私の娘！
「カズオ、この服、ヒトミのためにあるみたいよね」
「なんだよぉ、メッチャ可愛いじゃん！」

親バカって言葉の意味を　しみじみと知る　けど　本当に可愛いんだってば！

入園式

空が青くて
　　風が気持ちいい

なんか眠くなって・・・

　　ミサト
ミサト

私の・・・　名前・・・
目を開けたら・・・
「ねーちゃん、おかえり」
ホッとする
「ただいま」
「かあたん」
「ヒトミ！　ただいま」
ヒトミは黙って私に抱きつく。
それだけで、どれだけ私のことを恋しいと思ってくれていたのかがわかる。
こういうところもカズオそっくり。
「ヒトミに会いたかった」
私がそう言うと、もっとギュッと抱きついてくる。
「ねーちゃん、夕方帰ってくんだって思ってたからよ、ヒトミと散歩してて」
「早い便に替えたの、連絡するの忘れてた、ごめん」
「かあたん、かあたんのすきなイチゴかったの」
「ありがとう」
嬉しそうにニッコリ笑う顔もカズオそっくり。
「着替えてくるからね」

ベッドルームに入ると・・・
リサイクルショップで買ったヒトミの子ども用ベッドでギュウギュウ
そして・・・
私は知っている
カズオは我慢している

メチャ我慢している
自分はお父さんだからお父さんなんだからって
でも　我慢できなくて・・・
ほら　ドアが開いた
「ねーちゃん」
ギュウッて抱きしめる
「淋しかった？」
「ねーちゃんは仕事だったんだからよ」
「淋しかった？」
カズオが情けな～い顔して
「ねーちゃん、ぜってえ俺のことからかってっだろ」
そう言ってもっとギュウッて
相当淋しかったのね
まあね、向こうから電話したのは、無事に着いたってときと、週末の４回？
あとは仕事モードになっちゃってたからね。
私としては４回も電話するなんて快挙だけど。
ていうか、出張中に仕事以外で誰かに電話したことないけどね。
「明日はヒトミの入園式だから、早い便にしたの」
「うん」
「午後からは出社するけど」
「あ、うん」
「ウソ」
「あ？」
「有給取ったから一日中一緒にいるわよ」
「ねーちゃ～ん！　　ぜってえ俺のことからかってんだろぉぉ」
嬉しいのね

入園式当日。
ヒトミはサイドを編み込にしたヘアスタイルにしたら、もうプリンセス！
カズオそっくりのお目々で見つめられたら、男の子たち瞬殺よ。
カズオは式の間中目を潤ませて、ずっと私の手をにぎっていた。

入園式が終わって、ヒトミをお昼寝させるためにカズオはベッドルーム。
ヒトミが幼稚園児か・・・

ヒトミが生まれて、退院してからは、ヒトミのことはすべてカズオがやってきた。
夜中に泣くと私が寝られないからって、夜はリビングにヒトミのベッドを移して、

カズオはその横でマットと毛布で寝ていた。
そこまでしなくていいって言っても、
「ねーちゃんは生んでくれたんだから、こっからは俺の番じゃん」って。
ヒトミは文字通りカズオが育てた。
私はたまにあやしたり遊ぶくらいで、あとはすべてカズオがやった。
私はオムツも換えたことがない。
あ、一回だけあった、カズオがお風呂入ってるときに、ヒトミが泣いて、
なんだろうと思ってオムツ開けたらオシッコしていて、なんとか換えたのよ。
ところが、ほら、ほぼやってないからユルユルで、すぐにウンチして漏れちゃって、
ちょうどカズオがお風呂からあがってきたからよかったけど。
そのとき、カズオがなんて言ったと思う？
「ねーちゃん、ごめんなぁ、こんなことやらせちまってよ」
いやいやいや、私もいちおう母親だから、逆にうまくできなくてごめんなさいよ。
私は何もしてないから、私には懐かないだろうなって思ってたんだけど、
カズオが私のことをすごく大切にしているのを見て、なんていうの？
インプリンティング？　ああ、この人は大切な人なんだなあって刷り込み？
ヒトミも私のことをとっても大切にしてくれる子に育った。
「かあちゃんは優しいなあ」
「かあちゃんはきれいだなあ」
「かあちゃんはスゲーーな！」
そんな言葉を聞いて育ったから、ヒトミの中では私はカズオの言葉どおりの人になってる。

最初はね、「とうちゃん・かあちゃん」て呼ばせるのには抵抗があったの。
せめてパパとママ、最低限でもお父さん・お母さんでしょって思ったけど・・・
カズオが一生懸命育ててるのを見てたら、そんなことはどうでもいいって。
むしろ一周回って新しくない？ くらいに思ってるわよ。

ヒトミが三時間置きくらいに起きていた時期も、カズオはお弁当作ってくれたの。
大変だからいいって言ったのに、「ねーちゃん働いてんだからよ」
いやいや、あんたの方が極限ハードワークよ。
私が働いてるからってだけじゃなくて、心配だったらしい、貧血ね。
「今日の鶏の竜田揚げ美味しかった！」って言うと、「そっか」って嬉しそう。
「今日の鶏の塩レモン炒め美味しかった！」っ言うと「そっか」って嬉しそう。
ある日ね、大山にもあげたのね、いつもだけどね。
「わあ！　この鶏レバーの唐揚げ美味しいですね！」
ハ？　鶏レバー？
そういえば、ふつうの鶏肉と食感違うなあって思ってたけど・・・
鶏レバー食べたことないから気づかなかった

カズオ・・・　レバーを入れやがった　知らないうちにっ
帰ってから言ってやったわよ。
「今日の鶏レバーの唐揚げ美味しかったわよ」
あっ　バレた！ って顔したわよ。
それだけ心配してたのねって思ったら・・・
「ありがとう」しか言えなくなるでしょ。
今は鶏レバーは食べられる、牛と豚はムリだけど。

この三年間、カズオのおかげで、鶏レバーだけじゃなく、私の貧血も改善されたし、
仕事にも集中できた、家のことを何も心配しないで安心して仕事ができた。
ヒトミはカズオとずっと一緒にいたから、ますますカズオそっくりになって、
とってもとっても可愛い子に育った。

あ、ひとつだけ私ができること。
絵本の読み聞かせ。
ほとんど絵だしひらがなだからカズオもできるんだけど、
ヒトミは私に読んで欲しがるの。
そうなるとね、どれだけその世界を表現できるかの挑戦になっちゃうのね。
それでね、なぜか私の後ろにピッタリくっついてカズオも聞いてるの。
「そこに・・・　オオカミが・・・　ガオオオオ！」
ヒトミはもちろん驚くけど、カズオも私の後ろで「ウオッ」って驚くのよ。
「めでたしめでたし」
ヒトミは嬉しそうにお手々パチパチ、「メッチャよかったあ！」って私の後ろで感動。
よくわかんないけど、楽しんでるならそれでいいけど。

カズオがベッドルームから出てきた。
「寝たの？」
「うん」
カズオの目が・・・　死ぬほど愛しいって目で・・・
私のところに来て・・・
あ・・・　このKissが恋しかった・・・
「ミサト・・・」
カズオの手が・・・
「とうたん」
「ワアアアアッ」
カズオが跳ね起きて
「オシッコ」
「そ、そ、そっか、シッコか、そっか」
眠そうな目のヒトミをトイレに連れて行くカズオであった。

可愛い　二人とも　フッ

あのとき

夕食はカレー。
カズオは、カレーのとき、私用の中辛とヒトミ用の甘口両方作るの。
なにそれ？
私だったらめんどくさいから甘口でいいやって・・・　どうせ作らないけど。
しかもね、ふつうの甘口だとヒトミにはまだ辛いからってハチミツ入れるの。
とっても優しい味！
ヒトミ、あなたはしあわせよ、離乳食からこの天才が作ったものを食べてるんだから。
ああ！　そして私の中辛の絶妙なバランス！
「カズオ、私が日本に帰ってきてよかったって思うのは、カズオのごはん食べたときよ」
「マ、マジ？」
メチャ感動した顔してるけど、本当よ。
表現がちょっとアメリカンでごめんね、まだ抜けないのよ。

カズオは最近は、T シャツにジャージの裾めくってヒトミをお風呂に入れて、
ちょちょっとお風呂きれいにして、私が入れるようにするの。
私が入ってる間にヒトミを寝かしつけて、私が上がったら自分が入る。
なにこの良妻賢母的な男！

カズオがお風呂から上がってきて・・・
髪をタオルでゴシゴシ乾かして・・・
20 歳のときもイケメンだなあって見てたけど、イケメン度がますます上昇中。
「ねーちゃん、どした？」
「なにが？」
「なんでジッと見てんのかなって」
「私の夫はイケメンだなあって見ていたの」
「ねーちゃん、ぜってえ俺のことからかってんだろ」
笑ってる
マジで私がからかっていると思っている
自覚がなさ過ぎて・・・　もういい
「ねーちゃん」
「なに？」

「俺・・・さ　・・・・・・・・・・・・」
なに？　なにこの　長ーーーい　間？
「アタマ・・・・・おかしくなってんのかもしんねえ」
「ハ？」
「俺さ・・・ねーちゃんが・・・ヒトミ・・・生んだとき・・・」
え・・・　カズオがあのときのことを口にするなんて・・・
カズオはいっさいあのときのことを言ったことがない　不思議なくらいに
まるで何もなかったみたいに・・・
「正直、俺・・・　なんも憶えてなくて」
だから何も言わなかったの？　憶えてなかったから？
「なんか、いろんな人がいろんなこと言っても・・・
　なんのこと言ってんのか・・・　わかんねえっつうか」
そうだったの
「ねーちゃんがいない間・・・　俺、チビッとずつ・・・思い出して・・・」
私がニューヨークに行っている間・・・
「ねーちゃん」
カズオが・・・まるで今あのときの中にいるような顔で私を見て
「ねーちゃんが・・・ヒトミ生んですぐに・・・あんとき・・・
　気ぃついたら、俺、あの地下道に座ってて、汚ったねえまんまで・・・」
ハ？
「ああ、夢だったんかって、俺が見てたんは夢で、夢ん中でも俺はなんもできねえなって」
なんの・・・話？
「夢ん中でもすげえ好きな人も助けられねえんだなあって、やっぱクズだなあって」
カズオが口を歪めて
「どっしようもねえクズだなあって」
今・・・　カズオには私が見えてるかな？
「それが・・・　ねーちゃん、目ぇ覚まして・・・　俺のこと呼んで・・・」
カズオの目から涙がツーッと流れてきて
「そんとき、俺、また病院にいて・・・　そっから、よく憶えてねえんだけど、
　あれ？　俺、なんでここにいんだ？ って、俺、また夢見てんのかなって・・・」
カズオの目が真っ赤で・・・
「なんか・・・そういうの思い出して・・・も、もしかすっと、ねーちゃん・・・
　またいなくなんじゃねえかって・・・ヒトミも・・・生まれてなくて・・・
　俺は・・・　もしかすっと、ただ地下道ん座って夢見てんじゃねえかって・・・」
なんだか・・・　カズオが・・・　どれほどのショックの中にいたのか・・・
脳が混乱を起こすほどなんて・・・　どれほど・・・
「俺、ねーちゃんと会う前は、なんも持ってねえからなんも怖くねえっつうか、
　今死んでもなんも思わねえなあって、そんくれえ、なんも考えたことねえっつうか・・・
　そんでも・・・　俺・・・」
カズオのくちびるが震えて

「ねーちゃんがいなくなったらって、ちっとでも・・・　怖くて、すげえ怖くて・・・」
カズオが涙で濡れた目で私を見て・・・
「今こうやって見てんのも夢で、消えちまうんじゃねえかって・・・
　そしたら、俺・・・　もう・・・」

バッチーーーン

カズオが驚いた顔で頬を手で押さえて私を見てる
「痛い？」
カズオはよくわからない顔のまま頷いて
「私ね、生きてるのよ、あんたを思いっきり引っぱたけるくらい元気なの」
「え・・・」
「なんで生きてると思う？」
それはね
「あんたが私のそばにいて、あんたの血をくれたから」
カズオが私のことを見ていて・・・
「あのとき、カズオがそばにいなかったら、私、死んでた、確実に死んでた。
　だって私の血液型って珍しいから病院でもなかなかすぐには手に入らないのよ。
　でも、あんたがそばにいて、すぐにあんたの血をくれたから、私、生きてるのよ」
カズオの目からボロボロ涙が・・・
「あんたがいてくれたから、私はここにちゃんとこうして生きてるの」
「ねーちゃん・・・」
「あんたがクズなんだったら、クズって最強なのね、私のこと助けちゃうんだから」
カズオが私に抱きついて声をあげて泣いた
「バカじゃない？　　私は消えないわよ！」
「うん・・・」
カズオの頬に私の手形が真っ赤についていて
「痛かった？」
「ねーちゃんの・・・　ビンタは・・・　チョー・・・強烈で・・・」
「夢じゃないってわかるくらい痛かった？」
「涙出るくれえ痛かった」
カズオが情けな～い顔で笑った。
「もしも、あんたが、またあの地下道に座ってたら」
わかるでしょ
「私がまた無理やり連れてくるから」
カズオが笑おうして・・・　くちびるが震えて・・・
「何度だってね！」
だから
「安心して座ってなさいよ！」
ホッとした顔で涙ボロボロ流して

「うん」
私に抱きついた

あんたは・・・　そんなになるほど・・・　そんなになってしまうほど・・・

「カズオ、私のこと好き？」
「ハア～？」
カズオが情けな～い顔で
「アッタマおかしくなっちまうくれえだよ」
「そうね、そうだった」
笑っちゃった　ふたりでね

カズオが Kiss をして・・・　アタマがおかしくなりそうなくらい好きって Kiss を・・・

「ミサト・・・」
名前を呼ばれているだけなのに・・・　身体中が熱くなる・・・
見つめられていると・・・　とろけそうになって・・・
くちびるで・・・　その手に触られると・・・
愛しそうにちょっと歪む顔が好き・・・

カズオは私を抱きしめたまま
いつもそうね　とっても大切なものを離したくないみたいに
「ねーちゃん」
そして呼び方は変わる・・・と
「ありがとなぁ」
「なにが？」
「ビンタしてくれて」
「ビンタされてお礼言うって、ハハハハ」
「マジで」
カズオが私の大好きなあの目で私を見て
「目ぇ覚めた」
「そう」
「そしたら、ねーちゃんいた、ちゃんといた」
ギュウッて
「ここにいた」
いるわよ
いるわよ　あんたのそばに

最強の男

ヒトミが幼稚園に通い始めて一ヵ月。
今日は三つ編みにベビーブルーのリボンにしてあげた。
カズオそっくりの上目遣いが可愛くてたまらん！
カズオは私とヒトミのお弁当を作る毎日。
私に作っていたミニミニシリーズがヒトミのお気に入りになっている。
「いってきます」
私が先に出勤するのを、
「いってらっしゃい」
カズオとヒトミが見送る日常。

「森下部長、ここに判をお願いします」
そうなの、私、この前の人事異動で、海外事業部部長になったの。
女性初 30 歳にして部長！
藤木さんは取締役兼総合部長としていてくれているから安心。
「大山、あんたのお腹もだいぶ大きくなってきたわねえ」
「そうなんですぅ」
「なにその、すぅって」
「懐かしいかなと思って」
「うん、妙に懐かしい」
大山は総合職になって、私の元で働いてくれている、頼もしき右腕！
去年結婚して、8 月に出産予定。
うちの会社、出産ラッシュ！
「美里さんが生んでくださったから、みんな職場復帰できるって安心してます」
私は本当に生んだだけなんだけどね。
なんていうのかなあ？　客観的にカズオがやってることを見ているからかなあ？
子育て中の社員に優しくなってきた？
「山本さん！　何してるの！」
「は、はい？」
「今日、6 ヵ月検診でしょ！　会社に来てどうするのよっ！」
「あっ！」
「早く行きなさい！」

「は、はい」
言い方は・・・　変わらないからどうなんだろう？

玄関のドアを開けると・・・
「かあたん、おかえり」
可愛い
「ヒトミ、ただいま」
「ねーちゃん、おかえり」
ホッとする
「ただいま」

三人で晩ごはん食べて・・・
ソファのそばで、カズオとヒトミが遊んでいて・・・
なにこの平和な光景
なんでこんなに平和なの
「かあたん」
ヒトミが私のところに来てギュウッて私に抱きついてくる
可愛い　ただただ　可愛い
「とうちゃんも！」
娘に便乗する父親
そして・・・
あ　ちょ、ちょ、ヒトミが・・・
カズオがヒトミのお目々を手で隠して・・・
Kiss されながら
薄目開けて　ヒトミを・・・
ヒトミ、その手はね、お腹にいるあなたを触って・・・
絶対憶えてるわよね　忘れられないわよね
その手はあなたの命を救った最強の手なのよ
「とうたん！　　かあたんが見えない！」
怒り方が・・・　ちょっと・・・　私に・・・
気のせいよ　うん　気のせい

ヒトミはもう寝てる。
カズオがお風呂に入っている間に、そ～っと・・・
添い寝　ほとんどしたことないけど
可愛い顔して眠って・・・る・・・

ん・・・メチャ・・・狭い・・・

えっ？　私の背中にカズオ！
この小さい子ども用ベッドでムリでしょ！
「イデッ」
ほら、落ちた
「シーーー」
「う、うん」
二人でそ～っとベッドルームを出た

炭酸ミネラルウォーターにレモンとカズオがベランダで育てているミント。
ハァァァァァ！　スッキリする！
ベランダは今やミニ農園よ、狭っまいけどね。
ベランダガーデンなんて素敵なもんじゃないけどね。
ペットボトルで作った鉢もどきや発泡スチロールの箱が並んでるけどね。
「ねーちゃん」
「なに？」
「俺、ヒトミが幼稚園行ってる間の４時間だけ、パートしてもいいかなあ？」
「ハ？」
「あのよ、スーパーに、パートなんちゃらって書いててよ、何書いてんのかなあって、
　ただ何書いてんのかなあって思って見てただけなんだけどよ。
　そしたら、店長さんつうのが寄ってきてよ、働いてみねえかっつって」
「え？」
「俺はうちん中のことやってっし、ヒトミの送り迎えもあるし、脚こんなだし、
　読み書きできねえっつったんだけど、人手不足だっつって」
「はあ」
「裏の荷物の仕分けやってくんねえかって、４時間でいいからっつって」
ヘッドハンティングされたのか！
「やってもいいかなあ？」
「やりたいんでしょ？」
「ねーちゃんがダメだっつったら、俺はぜんぜん」
「私の意見ではなく」
あ、仕事モードになっちゃってるけど
「カズオはやってみたいと思っているのよね？」
「あ・・・　うん」
「そうであれば、やるという方向で」
いやいやいや、会議じゃないのよ
「やれば？」
「マジ？」
「家の中ばっかりじゃストレス溜まるしね」
「そんなんじゃねえよ、俺、そういうんで働きてえんじゃねえよ」

「あ、そう・・・」
そんなにむきにならなくても
「俺は・・・　ねーちゃんにイチゴ買いてえから」
「ハ？」
「ねーちゃんの好きなイチゴは、俺の稼ぎで買いてえなあって」
え・・・
「やっぱ、なんつうの、そんくれえしてえじゃん、惚れた女にさ」
照れてるけど・・・
「好きなイチゴくれえ、俺の稼ぎで買ってやりてえじゃん」
あんたってヤツは・・・　やだ、涙・・・
「えっ、ね、ねーちゃん？　　どした？　　俺、なんか悪りぃこと言った？」
なんで・・・
「なんで・・・　働きたい理由が・・・　私の苺なのよぉぉぉぉ」
「ねーちゃん？」
抱きしめるけどぉぉぉ
「なんなの、あんたはぁぁぁ」
「え？　　な、なんなのって？」
「あんたが泣かせたんだからね」
「あ、ご、ごめんなぁ」
「謝らないでよ！　　嬉しくて泣いてるんだからぁぁ」
「え？」
「なんでそんなに優しいのよっ」
「なんでって」
「アタマおかしくなるほど好きだから？」
「うん」
「アタマおかしいわよ！　　私の苺買いたいから働くってぇぇ」
「うん」
「頭撫でないでよ・・・」
「うん」
撫でてるじゃない
ハァァァァ
「カズオ」
「ン？」
「私も言わなきゃならないことがあるの」
「なに？」
「あの・・・ね、いるかも」
「なにが？」
「赤ちゃん」
「・・・・・へ？」
「なんかおかしいなあと思って、昼休みに検査薬買って・・・　陽性だった」

カズオが目をひんむいて驚いてる
「どうする？」
「俺は・・・」
「私のことが心配？」
私を見ながら何か考えてる　何を考えてるの？
「俺は生んで欲しい」
「え？」
「ねーちゃん、また辛れえ目にあわせちまうけど」
「それは・・・　いいけど」
私はあんたが心配なのよ
「もしも、ねーちゃんに何かあったときは・・・」
そうよね　やっぱりそこが・・・
「俺がいっから、そばにいっから、俺の血があっからよ」
なにそれ・・・
「ぜってえ守る、俺がねーちゃん守っから」
カズオの腕の中に飛び込んだ
この中はホッとする
こいつは絶対私を守ってくれる
私の命を救った人だもん
ヒトミの命も
そして　今　私の中にある命も　きっと守ってくれる

うちには最強の男がいる。
ホームレスで、脚が悪くて、読み書きできなくて、少年院入ったことがある
社会では無能扱いされてたけど
うちでは　誰も勝つことなんかできない　最強な男！

Fin.

「あ！　カズオ、名前考えておいた方がいい、男の子と女の子」
「あ？」
「もう文字がないから！　大根とか豆腐じゃなくて、決めて、練習しておかないと」
「わ、わかった！」
こういうこともあるけどね。

Be With～Ⅱ

著　　神原　涼

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社